



—— 2023 ——

—— 日本連句協会 ——

連句年鑑

令和五年版

連句年鑑（令和五年版）目次

〈表紙題字・横田思案人〉

一般社団法人日本連句協会令和五年度総会・全国連句大会の記……………7

文化芸術の花 咲いわたり 美ら島おきなわ文化祭2022

第三十七回国民文化祭

第二十二回全国障害者芸術・文化祭

芭蕉の島で芭蕉の風雅「連句の祭典」報告……………10

フランス俳諧のはじまりと連句……………村松定史……………14

言葉の園と出会ったもの……………ほしおさなえ……………27

三つ物の周辺……………鈴木千恵子……………37

令和四年の連句界……………林 転石……………46

論
評
エッセイ

回
顧

（カット・秋葉初枝）

作品

愛知県連句協会	「豌豆や」	53
阿吽の会		
「旗掲ぐ」	54
赤のままの会		
「小春かな」	55
「星と螢と」	56
あした連句会		
「さよならの」	57
「凍蝶へ」	58
「百韻や」	59
「多羅葉」	60
あした芭蕉記念館連句会		
「新米や」	61
あした梶の葉連句会		
「冬ざるる」	62
あした本庄連句会		
「榎の山」	63
蛙門会		
「けんけんバ！」	64
伊賀連句会ーいがまち座		
「蒼穹や」	65

伊勢原連句会																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
--------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

古都連句会	「北山の尾根」	80
伯連さざなみ会	「春耕や」	81
ころも連句会	「電車旅」	82
「緑児の」	83	
さくら草連句会	「梅林の」	84
「羊皮紙の」	85	
サザン	「辛夷咲く」	86
詩興派連句	「ミサ始／マッチ擦る」	87
猪の会	「少年期」	88
獅子門	「獅子門支考忌追善俳諧」	91
	「獅子門翁忌追善俳諧」	92
獅子門友楽社	「翁忌追善俳諧」	93
獅子門藜杖社	「翁忌追善俳諧」	94

獅子門麗水社	「翁忌追善俳諧」	95
下町連句会	「雄飛の翅あり」	96
風水会	「村二つ」	97
湘南吟社	「初句会」	98
	「万歩かな」	101
白老連句を楽しむ会	「虹多き町」	102
裾野連句会	「散歩道」	103
	「生絹のごとく」	104
宗祇白河連句会	「春光や」	105
草門会	「ふじのゆき」	106
武生連句の会	「初紅葉」	107
	「燭灯し」	108
遅刻坂連句会	「春眠を」	109
	「旅人の」	110

「復元を」	111
「炎昼や」	112
中央連句会	
「雲に鳥」	113
千代の会	
「四条どんつき」	114
筑波連句会・東京	
「葛の芽吹き」	115
筑波連句会・石川	
「産土の水」	116
つばさ連句会	
「吉右衛門丈へ」	117
桃雅会	
「会員歳旦三つ物」	118
「湿地飯」	120
「乾杯」	122
東京かびれ	
「山眠る」	123
「燕の子」	124
桃天樹陰聚連句会	
「未開紅」	125
稲門連句会「西北の風」	
「旅の日や」	126

徳島県連句協会	
「ボギー気取れば」	127
都心連句会	
「揚雲雀」	128
「ゴミ出しの」	129
「靴下の穴」	130
とよあげ連句会	
「寒牡丹」	131
奈良県連句協会	
「寒鴉」	132
日台連句会	
「春聯や」	133
日本連句協会千葉支部	
「江戸川を」	134
猫の目連句会	
「巨人となりて」	135
ねじまき連句会	
「電波時計」	136
野田連句会	
「御慶御慶と」	137
白塔歌仙会	
「映画の聖地」	138
巴世里連句会	
「秋の川」	139

花音	
「青鷹」	140
浜風	
「卯の花」	141
「葉桜」	142
ひなの会	
「池の朝」	143
ひねもす連句会	
「襲の色」	144
風狂連句会	
「片腕を」	145
ふたば会	
「梅の路地」	146
「小面の涙」	147
北杜連句塾	
「黒日傘」	148
ほれぼれ座	
「あんれまあ」	149
松山連句協会	
「初句会」	150
南さつま連句会	
「あおすじ揚羽」	151
宮城県連句協会	
「青年の虚無」	152

柳瀬川連句会	
「新涼や」	153
夢夢連句会	
「神楽殿」	154
「城跡や」	155
横浜ベイサイド連句会	
「夕顔」	156
四葩連句会	
「阿弥陀仏」	157
ラピロス連句会	
「煤払ひ」	158
連句会ひらめき	
「蛸壺や」	159
若笹連句会	
「ダボ鯨や」	160
わかやま連句会	
「和歌の浦」	161

個人作品 (捌・五十音順)

出原樹音「宮参り」	165
牛木辰男「尺八の音」	166
梅村光明「風人」	167
大久保風子「春惜しむ」	168
大山とし子「破れ蓮田」	169
木之下みなみ「桜しべ」	170
五郎丸照子「曼荼羅塗絵」	171
佐々木リサ「天上に」	172
瀧村小奈生「天井の」	173
棚町未悠「蜚舟」	174

学生作品

仲本お池「雨上がり」	175
林 転石「語るべき事」	176
半田有杜「杜の暗さや」	177
平井繁樹「大漁旗」	178
・小学生	
徳島・夏休み子ども連句教室 実践の記録	181
「さんしんはくやしい」	185

小・中・高校生

国民文化祭おきなわ2022	
三つ物 六巻	186
表合せ六句 九巻	186
・大学生	
東京・創価大学	190
「三日月の」	190
「秋 初月」	190
「コスモスの」	191
「火恋しと」	191
「思い出す」	192
「バレリーナ」	192

「秋惜しむ」

「月光の」	193
富山・富山大学	
「冬 銀河」	194
「雪 月夜」	194
東京・日大藝術学部	
「言葉も響き」	195

地方連句組織

一般社団法人日本連句協会 定款

年鑑担当

〽編集後記〽

大久保風子・木之下みなみ

一般社団法人日本連句協会

令和五年度総会・全国連句大会の記



▲高尾秀四郎会長

日本連句協会の令和五年度総会及び全国連句大会が令和5年3月19日（日）に台東区立台東区民会館特別会議室にて開催されました。今年は全国的に桜の開花も早く、東京では3月14日と平年よりも10日も早い開花宣言を聴く中で、の総会となりました。昨年に引き続き、当日会場に足を運ばない会員のために、Zoomの会議システムを利用しての総会内容の同時配信と全国連句大会を行いました。総会開会の11時前には、遠方より参加した連句仲間が集い、久しぶりに会う喜びを交わす声や、近況を報告し合うにぎやかな声が会場に広がりました。

定刻11時に年次総会がスタート。司会是小川副会長が務め、現地出席者、リモート参加者のほか委任状提出者多数により、定款に定める総会の定足数を満たし、総会が成立したことがまず報告されました。引き続き高尾会長が議長となつて第1号議案「令和4年度事業報告及び同年度決算報告の件」について審議に入りました。高尾会長より「新型コロナウイルス感染症も漸く下火の傾向をみせ、各地の連句会もその開催が可能になってきた、そして、日本連句協会の取り組みとして、連句興行のペースを下支えるため、たと

えはりモート連句会の開催、連句りモート枠の貸し出しなどに注力したこと、また昨年の沖縄国文祭において協力人員の派遣、募吟への作品協力、ミーツ動画作成とネットへのアップなどにより沖縄地域の紹介に努め、沖縄国文祭の活発化に寄与できた。さらにはこれまで10年単位で発行してきた現代連句集の第4番目として準備を進めてきた『現代連句集Ⅳ』の発行が無事に終了した」等々の報告がなされました。

会長報告を受け、第1号議案の審議に入り、林理事長より令和4年度の事業実績についての詳細な報告がされ、岡本理事より令和4年度の決算案の説明がありました。続き渡部監事の監査報告の後採決に入り、賛成多数にて可決となりました。

続き第2号議案「令和5年度事業計画及び同年度予算案の件」の審議に入り、林理事長より令和5年度の事業計画についての説明がなされ、岡本理事より令和5年度の予算案の説明がありました。令和5年度の事業計画においては、国民文化祭への支援をはじめとするこれまでの取り組みの推進、会員や地域の連句グループによるリモート連句会開



▲林 転石理事長

催の支援、日本連句協会のホームページ・協会報の充実、過去の協会報のPDF化の完了と利用促進による連句の興隆等が強調されました。

事業計画の明細についてより具体的な内容を求める質問



▲全国連句大会・実作会

があり、林理事長より説明がされました。また協会の企画・立案についての現状説明を求める質問があり、高尾会長と林理事長から、昨年のH P 委員の活動とリモート連句グループに関する説明がされました。質疑の後、採決に入り賛成多数にて第2号議案は可決されました。

続く第3号議案では、今期にて退任される方の説明と新任の方への承認が求められ、賛成多数で可決しました。審議終了後、今年開催される石川国民文化祭の関連説明と昨年日本連句協会が発刊した『現代連句集Ⅳ』の案内がされ、すべての審議は終了となりました。

昼食をはさみ、同会場にて全国連句大会が開催されました。今年も昨年同様にリアルな座とリモートの座による連句大会となり、リアルな座が10座47名、リモートの座が3座14名、合計13座61名の参加となりました。巻上げた一部のリアルな座の作品が披露され、和気あいあいのうちに連句大会は終了となりました。総会終了後は、会場を移して有志による懇親会が開催され、有意義なひと時を過ごしました。

（日本連句協会常任理事・高橋賢）

文化芸術の花 咲いわたり

美ら島おきなわ文化祭2022

第三十七回国民文化祭

第二十二回全国障害者芸術・文化祭

芭蕉の島で芭蕉の風雅「連句の祭典」報告

令和4年10月29日に吟行会と交流会が、30日に「連句の祭典」が沖縄県南城市のシュガーホールにて開催されました。この吟行会、交流会及び「連句の祭典」の開催に至るまで様々なドラマがありました。

この沖縄県南城市における「連句の祭典」から遡ること3年、国民文化祭の開催地が沖縄に決まったとの連絡を受けました。沖縄で国民文化祭が開催される令和4年（2022年）は、第二次世界大戦後米国の統治下にありました沖縄県が戦後処理の一環として本土に復帰した1972年から数えて50周年に当たり、本土復帰記念の意味が込められておりました。また2019年に発生した那覇市にある沖縄県民の心の拠り所でもある首里城が火災でその主要部分を焼失するという痛ましい出来事もあり、日本全国から首里城再建の義援金が集められていた時期とも

重なっておりました。一方、日本連句協会の会員名簿を見ても沖縄県在住の会員はたった一人という状況で、現地の連句人のご協力をいただける用途は立っておりませんでした。加えて沖縄には連句ではなく「琉歌」という8・8・8・6の音律を持つ伝統の詩歌があつてその大会やその歌詞を付けた演奏も行われているとのことでした。このような連句普及には越えねばならないハードルが多々存在する中、沖縄出身で東京在住の若手有力俳人のご紹介を受けてコンタクトを取り、沖縄における俳諧の普及状況の把握や俳諧人脈の探索などを進めておりました。他方、沖縄県庁の国民文化祭のご担当の方とは沖縄における「連句の祭典」の開催市町村の選定について検討をすすめておりました。第一希望の那覇市は参加希望団体が多すぎて早々と選沢肢から外れ、4つほどの候補市町村と接触を持ちましたが、いずれも開催場所や宿泊施設の確保ができない、予算確保が難しい等の理由から合意をいただけない状況が続いておりました。そんな中、最後に沖縄本島の南端にある南城市が立候補され、ようやくお受けいただくこととなりました。これは開催時期の約1年半ほど前であつたように記憶しております。そこに至るまで日本連句協会副会長で国文祭担当

の吉田酔山さんの多大なるご尽力がありました。令和3年（2021年）の年も押し詰まった12月に吉田酔山さん、常任理事で広報担当の山中たけをさんとの3人で、南城市役所を訪問しご担当の喜瀬様、業務委託を受けていただき「連句の祭典」の開催会場ともなるシュガーホールの北野様、知念様ともお会いして具体的な進め方について踏み込んだ打ち合わせをさせていただきました。その際に、ご挨拶代わりに私と酔山さんで巻いた「琉歌連々」と名付けた連句の5・7・5・7・7の長句短句と、8・8・8・8・6の琉歌とをミックスした琉歌・連句混合作品「行く秋や」の巻を持参し披露させてもいただきました。

2022年の年が明けてからは準備も佳境に入り、応募作品は二十韻とし、締切は当初5月14日としておりましたが応募状況が思わしくなかったことから、1か月ほど延長しました。そのかいあって応募総数は前年開催の和歌山の485巻を僅かながら上回る490巻となりました。選者もこれまで選者を担当していただいたことのない方々をお願いし、フレッシュな選者となったように思います。しかし作品の応募が終り選者による作品の選考が進み、8月初旬の選者会議を前にした7月25日に吉田酔山さんが急逝さ

れるという信じ難い出来事があり、「連句の祭典」の事務局との詳細のやり取りに関して全てお任せの状態であっただけに、その後の業務を引き受けた私は戸惑うばかりで、関係各位にはご迷惑や不行き届きの点が多々あったものと思います。その後の選者会議での入賞・入選作品の決定、大会の参加要領の作成と発送等を経て、10月の吟行会・交流会、「連句の祭典」の開催に漕ぎつけることができましたが、これも偏に事務局の方々や皆さんのご協力があればこそであり、改めてお礼を申し上げます。

10月29日の交流会の前には吟行会が開催され交流会会場でもあるユインチホテル南城から出発し途中で沖縄料理の昼食を摂った後、世界遺産に指定されている斎場御嶽（せーふあうたき）という霊場を巡りヤハラヅカサという白いサンゴの砂浜を歩き、玉城のグスク巡りをしました。南城市には沖縄全土に現存する城（グスク）の約半数が集中しており沖縄の方々にとって南城市は心の故郷と言える場所とのことで、その幾つかを巡りました。当初「城」ということで、天守閣のような石積みや櫓のようなものがあるのかと思っておりましたが、沖縄の「城」（グスク）は神の居場所を意味し、大きな木や石、海を見下ろす丘などに存



▲2022年10月29日 吟行会 ヤハラヅカサ

在しておりました。

交流会は南城市役所と道を隔てた反対側にあるユイinchホテル南城にて開催され、南城市の副市長の當間様他の方々も参加され乾杯の後は沖縄料理と泡盛で盛り上がり、アトラクションでは沖縄拳法の演舞や最後のカチャーシーの演奏と踊りでは会場の全員が踊り出すという賑やかさで、華やかな掛け声が会場に溢れました。

明けて10月30日の本大会では文部科学大臣賞に始まる受賞者への賞状の付与と受賞者代表のお礼の言葉が述べられました。今回はジュニアの入賞者も表彰式に参加し小さなお子さんが受賞する

▶懇親会 カチャーシー



姿を見ることができ、和やかな雰囲気加わりました。その後の講演では琉球大学准教授の前城淳子氏による「歌う琉歌と歌わない琉歌」というテーマでのお話があり、その中で琉球古典音楽野村流松村統絃会副会長の宮城竹茂氏による琉球古典音楽のご披露もありました。昼食を挟んだ午後の実作会は、講演が少し延びたことから午後1時近くとなり、昼食もそこそこに、実作会が始められ、「ウカビ」「アマミキヨ」「エンジン」「コマカ」「サキタリ」「セーファ」「ヤシナミ」「ガンガラー」「ガンジユウ」の9つの座に分かれて実作が進められ、多くは今回の募吟の形式である二十韻で連句が巻かれておりました。

閉会には次年度の開催県である石川県加賀市の方への日本連句協会の「連句」旗の引き渡しが行われ、「連句の祭典」のバトンが沖縄県から石川県に引き継がれました。私には最後のご挨拶を求められ、関係各位へのお礼を申し述べましたが、私にはこの沖縄大会に心血を注ぎながらも道半ばで逝去された吉田酔山さんがこの会場におられるように思えてならず、そのことを申し上げた途端、胸に迫るものを覚えて、囁かずも言葉を詰まらせ、回りの方々を心配させてしまうという一幕がありました。吉田酔山さんの七

七忌が終わった10月10日に日本連句協会の林理事長と共に、横浜の吉田家を訪問し、ご霊前にお線香を上げさせていただいたこと、その折に奥様が「主人は生前、沖縄の件で随分根を詰めていたようです。」と話されていたことなど、瞬時に蘇ってきました。「お陰様で成功裡に終わることができました。」と心の中で吉田酔山さんにお礼を申し上げたことを昨日のことのように思い出しております。改めましてご協力をいただきました皆様に深甚なるお礼を申し上げます。有難うございました。

(日本連句協会会長・国文祭おきなわ担当・高尾秀四郎)

フランス俳諧のはじまりと連句

村松定史

フランスへの俳諧移入のはじまりは、若き哲学者ポール・クルイ・クーシュー^①による。クーシューはアルベール・カール財団の奨学金を得て世界一周の旅に出かけ、最後に訪れた日本に魅了される。一九〇三年九月から一九〇四年五月にかけて八か月滞在し、その間に、日本の風物はもちろん、勃発した日露戦争についてもつぶさに記録を残している。

なかでも、クーシューがもつとも心奪われたのは、芭蕉や蕪村に代表されるハイカイ（フランスでは一般に発句のことともこう呼ぶ）の奥深さである。一九〇四年七月にフランスに戻ったクーシューは、学生仲間数人を誘ってパリの学生街のシャンポリオン通りに定期的に集まり、猪口で日

本酒を振舞い、持ち帰った掛軸など見せながら、ハイカイの素晴らしさを熱く語ったのである。これがハイカイとは何かフランスで紹介された最初である。

クーシューは一九〇六年に、「ハイカイ―日本の詩的エピグラム^②」というハイカイ論を発表する。室町時代から江戸時代にいたる百数十句を引用し、自然や四季の繊細な描写、人の営みや人生への情愛が簡潔かつ暗示的に詠まれていることを称美する。

しかし、さらに注目すべきはこのハイカイ論の前年、一九〇五年七月に、クーシューは画家アンドレ・フォール^③と彫刻家アルベール・ボンソン^④を伴ってハイカイ吟行の船旅を催したことである。パリからセーヌ川をさかのぼり、運河を通じてラ・シャリテ・シユル・ロワールに至る行程で、三人の青年は船上で句作を試みる。それらは韻のない三行自由詩の形だが、ハイカイの簡潔さや滑稽に近づくようにしている。ほとんどが実際の見聞による嘯目吟であることも注視すべきだろう。クーシューは旅の翌年に発表する「日本の詩的エピグラム」を船旅に携えて行ったと思われる。これには三行に仏訳された一五八句が含まれており、それが創作の手本であったことは、後に述べる模倣の跡からも

間違いない。詠んだ句はフランスで最初の句集『流れに沿って』^⑤にまとめられる。ただしこの句集は著者名のない薄い冊子で三十部の私家版であった。

小部数でもあり、百年を経た今、瞥見することさえ不可能と思われたが、近年そのテキストを読む機会を得たので、連句的な視点も踏まえ、ここに紹介したい。全七十二句を讀むに当って、まず参照した文献について述べておく。

①句集が日本でおおやけにされたのは「フランスハイカイ集『水の流れのままに』(Au fil de l'eau)——「幻の本」の出現——(一九九五年)^⑥という記事によってである。

各三行の原句に逐語訳が付され大要を知ることができる。
②つぎに重要なのは、ポール・ルイ・クーシュー著『アジアの賢人と詩人』の邦訳書(一九九九年)^⑦である。書中の第二章「日本の抒情的エピグラム」は一九〇六年に雑誌に掲載された「ハイカイ——日本の詩的エピグラム」を改題して収録。クーシューが仏訳引用した句を、本訳書では対訳で示し、原句と作者も特定した上で、さらに詳しい後注も付す。

クーシューがハイカイの説明に対応して引用した句は、「声なくば鷺こそ雪の一つくね 宗鑑」にはじまり「蜻

蛉つりけふはどこまで行つたやら 千代女」にいたる十六〜十八世紀の秀句で、五・七・五を三行に仏訳している。形式はフランスにすでにある三行詩^{テルセ}だが、韻は踏ま

ず十七の音数も無理に合わせることはしていない。

③フランスで句集が翻刻^⑧されるのは二〇一三年。著者ドミニック・シポは、自身がフランス語のハイジンでもあり、全句を翻刻しただけでなく、句ごとに詳しい評釈をほどこし、さらに旅程の各所を丹念にたどり、古い絵葉書で訪問地などの写真六十余枚により、詠まれた句が実写であることも証明している。

ここに再録する句集の原句はシポの翻刻によったが、三行詩形はスラッシュを入れ一行とした。何句かに添えられた地名もシポに従ったが、括弧に入れ斜字体とした。訳は十七音の句形にはせず区切りは一字空けとし、季語の読み取れる句は訳末尾に「―」で季を記した。原典に番号はないが、便宜上1〜72の通し番号をふった。また半分ほどの句には下段に簡単な脚注を付した。

船に揺られての吟行といえは風雅に聞こえようが、乗り込んだのはどうやら砂糖などを運ぶ荷船で、川遊びの屋形船といった想像は当たらない。シテ島の大聖堂からセーヌ川

を南へさかのぼり、やがてフランス中央部を流れるロワール川に続く運河へ。流れに沿った土手からは馬あるいは人が船を曳く。運河には水門があり水位の高低を調節するために、まず水門を閉じて水を満たし、次の水門を開き先へ進む。そうした情景も詠み込まれている。時にクーシューは二十六歳、ポンソンは二十八歳、青年たちは恋に憧れ、若い少女を夢見る年ごろでもあるのだ。

ところで、『流れに沿って』は三行詩形による長句の連続だが、七十二句という数からは連句が思い起こされる。ドミニク・シポも評釈でレンクに触れ、三十六と三十六のダブル・カセン（歌仙）かと推測している。ところが連句には七十二候という形式がある。一年の季候を七十二に分けた「四季七十二候」にちなんだもので、百韻より三の折の表裏二十八句を略し、一卷七十二句の構成としたもの。だがクーシューはハイカイ論の中でレンクにはいつさ言及していない。句集の七十二句は単なる数字の偶然であろう。五・七・五を模した三行詩ハイカイを試みようとしたのであって、句を連ねるレンクに挑んだわけではない。なぜなら句はすべて長句であるし、同字、同語、同想の繰り返しも多く、連句と見るにはあまりに式目から逸脱して

いる。七十二候は三花五月だが、定座にこれらもない。ただし、前句からの連想には付け味を思わせる箇所が幾つも見られるのと、七十二候という初表裏・二の折表裏・名残の表裏の各面に季節の句が二、四句は含まれており、四季の変化が織り込まれているのは連句的と見ることもできる。七十二候の別表にも月花の定座とは別に「」で季を記してみた。本来の式目から大いに外れるにせよ、連想の物語として味わうことはできるかと考えたからである。

ふつう連句は屋内に集い座を組むから、頭の中の想像や記憶で句を詠むことになる。だが名所旧跡などを訪ね詩歌の題材を求めて野外を歩いて吟じる創作行動もないことはない。実際、クーシューたちは空想のイメージを詠むより、現実に目の前を移りゆく情景やそれに触発される感興を多く句にしている。

では、クーシューたちは東洋の古い詩をどのように模して、自分たちなりのハイカイを創造していったのであろうか。まず、上五・中七・下五に当たる三つの要素を三行詩の形とした。これはクーシューによる古句の仏訳で用いた詩形を踏襲したもの。目に映る素材の発見には、ハイカイ的な着眼、人生を一瞬にして切り取るひらめき、を意識し

ているように思われる。

はじめてフランス語でハイカイを詠むのにどのように仏訳句を手本としたのか、創作上の参照がたどれるケースはいくつもあるが、模作というよりインスピレーションとフォルムのアイデアをそこに求めたものと考えるべきだろう。学習から創作への過程を(イ)～(ヌ)の例に見ながら、換骨奪胎の妙をしばし玩味していただけたらと思う。

まず前述②の訳書の後注と訳者の論文⁽⁹⁾の指摘から。

(イ) 引用句「草臥て宿かる比や藤の花 芭蕉」(J'arrive fatigué / A la recherche d'une auberge : / Ah! ces fleurs de glycines!)

句集11 Dans le soir brillant / Nous cherchons une auberge. / O ces capucines!

旅人の心象と花の照応。趣向と形式の模倣。

(ロ) 引用句「露の世は露の世ながらさりながら 一茶」

(Ce «monde de rosée» / N'est, certes, qu'un monde de rosée! / Mais tout de même...)

句集12 Dans un monde de rêve, / Sur un bateau de passage, / Rencontre d'un instant.

「露の世」を「夢の世」に置き換えたのは、はかなさより、ゆきずりの恋への憧れか。

(ハ) 引用句「かりそめに早百合生けたり谷の坊 蕪村」
(Simplement / Une anémone dans un pot : / Temple rustique.)

句集64 Une simple fleur de papier / Dans un vase. / Eglise rustique.

田舎の素朴な寺院と簡素な花の取合せ。

前述③のシボによる評釈から。

(二) 引用句「いそがしや沖の時雨の真帆片帆 去来」
(Quel remue-ménage! / Au large, sous la brusque averse, /

Voiles de face, voiles de biais!)

句集24 Polka dans la nuit. / Dans la zone de lumière jaune, /

Silhouettes claires, silhouettes sombres.

一行目は言い切り、三行目は疊語法の構成。

(ホ) 引用句「水底を見て来た兒の小鴨かな 丈草」(Il a l'air tout fier / D'avoir vu le fond de l'eau, / Le petit canard.)

句集15 Il est tout fier, le petit chat, / D'avoir fait peur / Au vieux coq.

雄鶏を怖がらせた子猫は、小鴨の賢顔の転写。

(く) 引用句「粽結ふ片手にはさむ額髪 芭蕉」(Elle enveloppe les gâteaux / Et de l'autre main arrange / Ses cheveux sur son front.)

句集⁵² D'une main elle bat le linge / Et de l'autre rajuste / Ses cheveux sur son front.

片方で手仕事、他方の手で前髪を直すあたっば。

(ト) 引用句「墓原や秋の螢の二つ三つ 原松」(Un cimetière. / Et les lucioles de l'automne, / Deux ou trois.)

句集⁵⁷ Dans l'immense corbeille verte / De petits villages marrons, / Deux ou trois.

発見の驚き、螢も村も多からず少なからずの数。

最後に原句に学んだ作例を論者も三つ付け加えておく。

(チ) 引用句「蜻蜓やとりつきかねし草の上 芭蕉」(Une libellule / Essayant en vain de se poser / Sur une tige d'herbe...)

句集⁸ Sur le rebord du bateau / Je me hasarde à quatre pattes. / Que me veut cette libellule?

焦燥を覚えているのは、船べりでは人の方。

(リ) 引用句「山里や井戸の端なる梅の花 鬼貫」(Une

chaumière de montagne. / A côté du puits, / Le prunier en fleur.)

句集³¹ Au bord du vieux puits / Dès qu'elle a posé, / Elle me tend la rose.

同じ井戸端でも恋句の花はバラである。

(ヌ) 引用句「風毎に葉を吹きだすや今年竹 千代尼」(Au moindre vent / Les feuilles tremblent : / Jeune bambou.)

句集³⁵ L'orage se prépare. / Toutes les feuilles du tremble / Battent de l'aile.

雷雨の風となると、葉の羽ばたきは激しい。

シボもいうように、剽窃を言い立てるべきではなく、発想を借りた見習いであり、句作りの手ほどきを受ける旅であつたと思うべきだろう。

こうした仏訳句に触発された作句は、洋の東西を問わない、普遍的な人間の仕草や営為が、共通であることに今更ながら気付かされる。クーシューらの吟行の記録である連続した七十二の句は、あらためてわれわれに、ハイカイの視点と連想の面白さ、海を超えた人間の感性や思考の共通性を訴えかけてくる。式目にのっとった連作ではないにせ

よ、船旅の吟行は日常に埋没しかねないわれわれ現代人に自由な水の流れ、大気の揺曳を深く呼吸させてくれるように思える。

注

(1) ポール＝ルイ・クーシユーは一八七九年、フランス南東イゼール県の町ヴィエンヌに生まれた。一八九八年、高等師範学校入学。一九〇一年、哲学の教授資格取得。一九〇二年から一九〇四年にかけて、アルベール・カーン財団の奨学金で世界旅行。帰国後は精神医学の勉強を始め、数年後には医学博士となり療養所に勤めた。

(2) Paul-Louis Couchoud, *Les Haikai : Epigrammes poétiques du Japon, Les Lettres*, No. 3-7, 1906. 「日本の詩的エピグラム」というタイトルは、明治期長く日本に滞在した英国人バジル・ホール・チェンバレンの「芭蕉と日本の詩的エピグラム」(Basil Hall Chamberlain, *Bashô and the Japanese poetical epigram, Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XXX, part II, 1902.) に追従したものであろうが、後年クーシユーは著書『アジアの賢人と詩人』に収録する際には「日本の抒情的エピグラム」と改題する。A. epigramme は「諷刺詩、寸鉄詩」の意味で辛辣さや皮肉を含む警句。機知と興趣を併せ持つハイカイを西欧的に表現するにはこの語を描いてなかったであろう。

(3) André Faure (?-1914) 画家。

(4) Albert Poncin (1877-1954) アール・デコ期のブロンズ彫刻

家で多くの賞を受賞。作家、詩人でもある。

(5) Paul-Louis Couchoud, André Faure & Albert Poncin, *Au fil de l'eau*, 72 haikai : plaquette hors commerce, 1905.

(6) 柴田依子「フランスハイカイ集『水の流れのまねに』」(*Au fil de l'eau*) —— 「幻の本」の出現」(国際俳句交流協会「HI」No.18 平成七年九月)

(7) ポール＝ルイ・クーシユー『明治日本の詩と戦争 アジアの賢人と詩人』金子美都子／柴田依子・訳 みすず書房 一九九九年。副題 *Sages et poètes d'Asie* が本書の原題。

(8) Dominique Chipot, *Au fil de l'eau avec Paul-Louis Couchoud*, Editions Julu, 2013.

本稿に再録した原文はほぼこれに依拠した。

なお二〇〇三年にラファエル・ロザノの仏語句集と合わせてクーシユーの句集を再録した小型本 (Éric Dusser, *Au fil de l'eau suivi de HAÏKAS, Les premiers haïku français (1905-1922)*) があるが、句の順序等々、不備が多い。

(9) 柴田依子「西洋における蕪村発見——P. L. クーシユーから R. M. リルケへ——」(學燈社「國文学…解釈と教材の研究」第41巻14号 一九九六年十二月号)

付記

クーシユーらのフランス語ハイカイの解釈と日本語訳については、エリック・プリウ氏に多くの助言を賜った。記して謝するものである。

Au fil de l'eau juillet 1905

『流れに沿って』一九〇五年七月

- 1 Le convoi glisse déjà / Adieu Notre-Dame!... / Oh!... la gare de Lyon!
はや荷船は滑りゆく ららばノートルダム!... おお!...リヨン駅だ!
- 2 Nu comme un dieu / Au galop dans la prairie / Il fait la réaction.
神のように裸で 牧草地を駆歩 悦びに溢れて
〔晩夏〕
- 3 Dans la dahabieh / Les faiseurs de haïkai / Eventent leurs jambes nues.
ナイルの川船のこもり ハイカイの詠み手は 剥き出しの脚風になぶらせ
〔晩夏〕
- 4 La nuit est-elle finie? / Je soulève la bâche / Eboulissement.
夜は明けたのか? 幌押し上げるや なんとこころ眩しや
- 5 Ville endormie. / Un garde de prison passe. / Un volet s'ouvre. (Melun)
眠っている町 牢番は行きすゑ 錠戸が開く
- 6 Une prison. Des abattoirs. / Une patrouille au fond de la rue. / Oh! vite vivre...
刑務所に屠殺場 通りの奥に警邏隊 おお! 生き急がん...
- 7 Entre les plats / Il lave son assiette : / Marinier amateur!
大皿のあいだで 自分の取り皿を洗う 新米の水夫!
- 8 Sur le rebord du bateau / Je me hasarde à quatre pattes. / Que me veut cette libellule?
船べりを つわつわ四つん這い トンボよ ぼくにさつしんや
〔三秋〕
- 9 Les jongs même tombent de sommeil. / Je rôtiis délicieusement / Midi.
イタサヤも堪らなく眠る 心地よい日焼け 真昼
〔三夏〕
- 10 Dans la première écluse / La flûte pénètre / Nuptialement. (St-Mammès.)
最初の水門に 川船は入ってゆく 新婚の儀式
- 11 Dans le soir brûlant / Nous cherchons une auberge. / O ces capucines!
灼けつく黄昏 旅宿を探す おお! ノウゼンハレン!
〔三夏〕
- 12 Chéri, chéri, / Ah! tu me fais mourir! / Douche dans le verger.
いとしいあなた ああ! 死ぬほど好きよ! 果樹園でシャワー
〔晩夏〕

脚注

- 1 パリ中心の大聖堂前にある道標は各地への距離の起点。船を曳く馬が馬具から解放されたのだろう。
- 3 ダアビエは大型帆船。誇張。ムランはパリの南東四十六キロ。セーヌ河畔の町。特産のブリ・ド・ムランは三十旬目に詠まれている。
- 6 死の暗示から生を喚起。サン＝マメはパリから七十キロ上流、セーヌとロワンの合流点。句はロワン運河最初の水門。
- 12 一―二行は通俗恋唄の歌詞。

- 13 Au bord du vieux puits / Dès qu'elle a posé, / Elle me tend la rose.
古い井戸のはよりで しなを作ると ぼくに差しだされるバラ
〔初夏〕
- 14 La costumière de l'Opéra / Tient maintenant enseigne pimpante / A l'entrée du village.
オペラ座の衣装係 今は小粋な生業^{なりわざ} 村のとば口で
〔二冬〕
- 15 Emiliennel Emiliennel / Sans répondre, elle papillonne dans la nuit, / Feu follet de notre désir.
エミリエヌー エミリエヌー 答えず夜にひらひらと舞う ぼくらの欲望は東の間の鬼火
〔二冬〕
- 16 Entre deux amis, / Sous la tonnelle fleurie, / Je me suis guéri de l'amour.
二人の友にはなまれ 花咲く東屋で 僕は恋から立ち直る
〔二冬〕
- 17 Le bateau coule, / L'heure fuit / Insensiblement...
船は行く 時は逃げて去る 気づかぬほどに緩やかに...
- 18 Les bateliers roupillent dans l'herbe, / Les deux chevaux s'en vont devisant, / »Service accéléré.«
船頭たちは草に眠り 馬二頭しゃべりつづ去る これが「急行」
〔二冬〕
- 19 Sur le chemin de halage / En bonnets de fous / Deux bourricots.
曳船道 道化帽の 小ロバが二頭
- 20 Le vieux canal / Sous l'ombre monotone / S'est vert-de-grisé.
古びた運河 坦々と変わらぬ影の下 緑青色の広がり
- 21 Dans un monde de rêve, / Sur un bateau de passage, / Rencontre d'un instant.
夢の世界 行きすゝある船上からの かりそめの出逢い
- 22 Sautez mignonne, Cécilia! / Ce vieux marc est exquis, / Diner d'adieu.
跳べ、かわいさセシリアー 古びたブランデーは極上 別れの晩餐
- 23 La lune monte l'oreille, / Les arbres semblent souffrir, / »Avez-vous vu trois filles?«
月は耳の形で昇る 悩ましげな木々よ 「三人娘に会わなかったかい。」
〔三秋〕
- 24 Polka dans la nuit, / Dans la zone de lumière jaune, / Silhouettes claires, silhouettes sombres.
夜のポルカ 黄色い光の帯の中 明るいシルエット、暗いシルエット
- 25 La péniche vernissée / Ne se compromett pas / Avec les miséreux montugons
La péniche vernissée / Ne se compromett pas / Avec les miséreux montugons

- 14 パリ・オペラ座を退いて、
故里に粋な店を開いたか。
- 15 前旬の店の夜の情景か、若い娘は蝶のように身軽。
- 18 船頭も馬ものんびり。これが「急行」、皮肉と滑稽。一行目（原文には下線）は船歌「十五で父はあたいを船に乗せ、大海へ。跳べ、かわいいセシリア」から。水夫と結ばれる歌詞。
- 25 モンリュソンは「棺」とも呼ばれる川船。対比の面白さ。

- 26 艶やかな川船 我閑せず焉 えん 貧相な曳舟 セモノリフネ なんかとは
 Cette vieille laveuse / Est la dogaresse / De la Venise du Gâtinais. (Montargis)
 あのおけた洗濯女が 総督夫人 ヴェニス・デュ・ガティネの町では
 27 Sur sa mule pomponnée / Que vient faire à Montargis / Ce nain de Velasquez?
 着飾ったラバで モンタルジに何しに來たの ベラスケス描く小人よ・
 28 Réfectoire de couvent. / Les seurs vont venir. / C'est quarante sous l'entrevue.
 修道院の食堂 やがて集まる尼僧たち 面会したら四十スー
 29 Un cyclone cette nuit / Non, c'est dans l'écluse / Le torrent qui nous soulève.
 今宵は台風か！ いや水門の中で 船押し上げる奔流
 30 Quand on a enlevé la croûte noire. / Il reste une feuille de cigarette / Fromage de Melun.
 チーズの黒皮を削る 残りは薄い煙草紙ほど ムラン・チーズは
 31 Avec sa petite faucille / Comment pourra-t-elle / Faucher tout le champ?
 その小さな半月鎌で 彼女はとうやうて刈れるのか 畑全部を・
 32 Les ombres des gladiateurs / Viennent sans doute lutter la nuit / Forêt penchée sur les ruines.
 剣闘士たちの影 きここ夜じゅう戦いに来る 廃墟にかぶる森
 (Arènes de Chenevières.)
 33 Le bain rond / Est pour la nymphe du bosquet. / Le bain carré pour les faunes. (Thermes de Chenevières.)
 円形の浴槽は 森の妖精のため 四角は牧神のため
 34 Le chevet sur le canal. / L'église de Montbouy / Sommeille depuis huit siècles.
 運河に面した後陣 モンブイの教会 八世紀來のまじろみ
 35 L'azur triomphal / Transperce même / Le hêtre noir.
 勝ち誇る蒼穹は 差しつらぬく 黒々としたブナやえ
 36 Moissonneurs dans les blés. / A l'ombre d'une gerbe. / Une grande souprière.
 麦畑に刈入れ人 麦束の陰に スープの大鉢
 37 Les ombres s'allongent. / Les champs de seigles mûrs / Se mettent à flamber.
 〔初夏〕

- 26 小郡ガティネの町モンタル
 ジはヴェニスと呼ばれるから、洗濯女が総督夫人とおどけた。
 28 訪れた修道院か。四十スー
 (約千円)は喜捨であろう。
 30 ムラン産の黒チーズ。
 31 「ジャストン、半月鎌持つて、イグサ刈り」と始まる俗謡がある。
 32 シュヌヴィエールには古代ローマ円形闘技場跡。
 33 同じくシュヌヴィエールの古代ローマ共同浴場。
 34 モンブイは運河沿いの小町。

- 38 影は長く伸び 熟れたライ麦畑は 夕日に燃え始める
 Dans le soir violet / Arrivée délicateuse. / Il faut coller des sucres.
 紫色の黄昏 甘美なる接岸 ゃあ、砂糖の陸揚げだ
 〔晩夏〕
- 39 La nuit nous enveloppe. / Les grillons se mettent à chanter. / Souper sous la vigne.
 夜に包まれ コオロギが鳴きだす ブドウ棚の下夕食
 〔三秋〕
- 40 Vous qui passez dans l'ombre / Le long des peupliers / Etes-vous des amants?
 君たちは影の中を行く ポプラ並木に沿って 恋人同士なの……
- 41 L'Armée du Salut / Promène sur les canaux de France / Une salle de prédication.
 救世軍は運ぶ フランスの運河で 新教の説教室を
- 42 Au-dessus des feuillages / S'élève gravement / Le donjon de Coligny.
 葉叢越しに 莊重に聳える コリニーの塔
- 43 O sept écluses dans les pins! / De quel tombeau surhumain / Etes-vous l'escalier? (Rogny.)
 おお、松林の七つの閘門! どんな超人の墓の 石段なのか。
- 44 Uzouer. / Je trouve à ce nom / Une saveur patoise.
 ウズウェール この地名は お国訛りの味わい
- 45 Dans l'antique église / Sous les chapiteaux obscènes / Un sacré-cœur de sucre.
 古代の教会 みだらな柱頭装飾の下に 白糖の聖心^{ハート}
- 46 Horizon solennel. / Le fleuve magnifique / Agonise dans les sables. (Bony-sur-Loire.)
 厳かな地平線 壮麗な大河は 砂に埋もれて息も絶え絶え
- 47 Les chirurgiens / Examinent l'intestin / De la bicyclette.
 外科医たちは 診察する 自転車^{サイクリング}の腸を
- 48 TINCTURA IODI / PEDONCULI CERASORUM / Le pharmacien s'est endormi. (Cosme.)
 ヨードチンキ サクランボの花柄 眠りに落ちる薬剤師
- 49 Le pasteur / A pris pour petite bonne / Une jolie catholique.
 牧師の 雇った女中 可愛いカトリック女

- 38 パリ近郊から砂糖を運んで来たのだらう。
- 41 カトリック国フランスでも新教が布教のため説教室を船にのせて運行。
- 42 コリニーにある古城の円筒形の石塔。
- 43 ロニーにはかなりの高低差の七段の水門がある。
- 46 ボニー＝シュール＝ロワールの河岸には砂が堆積し流れを妨げている。
- 47 チューブ等を腸にたとえた。クーシューは医学を勉強中。コーンはロワール右岸の町。ラテン語は薬瓶のラベルを思わせる。ヨードチンキは消毒薬、サクランボの花梗は利尿作用がある。
- 49 新教の牧師とカトリック女、皮肉な取合せ。一九〇五年十二月、フランスでは政教分離法が制定される。

- 50 L'orage se prépare. / Toutes les feuilles du tremble / Battent de l'aile.
雷雨の気配 一斉にヤマナラシの葉は 懸命に羽はたく
- 51 Il est tout fier, le petit chat. / D'avoir fait peur / Au vieux coq.
子猫は 老雄鶏を怖がらせし 得意顔
- 52 D'une main elle bat le linge / Et de l'autre rajuste / Ses cheveux sur son front.
片手で洗濯物を叩く もう片方で 額の髪を整える
- 53 La vache repue / Ne voit que le pied / Du saule argenté.
腹一杯の雌牛 ただごと見るのは 銀葉ヤナギの根方
- 54 On dit / Que la demoiselle du château / A une oreille de porc.
風のうわや 城の姫君 豚の耳
- 55 A la lisière de la forêt / Les grands sapins / Présentent les armes.
森のはずれで モミの大樹は 捧げ銃^{ていじう}
- 56 Au pied du donjon. / En demi couronne. / Des toits gris et bruns. (Sancerre.)
塔の足下に 半冠形にぐると 灰色と茶色の屋根
- 57 Dans l'immense corbeille verte / De petits villages marons. / Deux ou trois.
途方もない緑色の大籠に 栗色の小さな村が 一二三〇
- 58 Sur cette terrasse / Venir au crépuscule / Parler d'amour...
このテラスには 黄昏時に訪れる 愛を語りに...
- 59 Le fleuve mal endormi / Fait vivre dans la terreur / Le village peletonné. (St-Satur.)
安らかに眠れぬ河は 怯えて暮らゆせる うずへまる村に
- 60 Dans la nuit silencieuse / Le fleuve épuisé et la vieille tour / Se rappellent leur vaillance.
静むる夜 枯れた河も古い塔も 思ひ起^{おこ}すのは己が武勲
- 61 Vieux combattants. / Les arbres sont toujours à leur poste / Devant le fleuve fatigué.
老兵にいらし樹木は いづも持ち場にいら 疲れた河を前にいつ
- 62 Dans la ville haute. / Une belle maineuse / Se coiffait à sa fenêtre.

〔三夏〕

- 55 クーシュー滞日中、一九〇四年に日露戦争が勃発。
- 56 サンセールの城館跡は円筒形の石塔が丘の上に立つ。
- 59 サン＝サテュールはロワールの増水、洪水危険地域。

〔晩春〕

- 川上の町 早起きの器量良しは 窓辺で髪を結う
 63 Des assiettes peintes / Dans l'aire des poulets rôissent / Ah! la bonne auberge! (St-Bouize.)
 壁には色絵皿 暖炉で炙られる若鶏 ああ! 心地よき宿!
 64 Une simple fleur de papier / Dans un vase / Eglise rustique.
 紙の花ただ一輪 花瓶に ひなびた教会
 65 Deux chênes géants / Gardent l'entrée / Du domaine.
 二本の大ナラ 守るは 所領の入口
 66 Les fermes semblent des forteresses / Les vaches ne vont que par douze. / Berry féodal.
 農家は要塞に似る 十二頭ずつ牛は行く かつての封土ペリー地方
 67 Lorsqu'elle s'est dressée, / La paysanne aux grands yeux, / J'ai cru voir Artémis.
 すくくと立った はうちりした瞳の農婦 狩猟の女神かと
 68 En route pour la foire. / Derrière chaque cariole / Une boîte de foin.
 定期市へ向かう道 二輪馬車の後ろにはごれも 干草の束
 69 Elle hèle le bateau. / Quand l'épaulé est meurtri, / Elle tire avec le ventre.
 かみさんは船を曳く 肩が傷めば 腹で曳く
 70 Au débouché du pont... / Nom de Dieu! c'est aussi beau / Que toute l'Espagne! (La Charité.)
 橋下の水路を抜ける... 畜生! なんてきれいなんだ スペイン全土をながらー
 71 A l'ombre de la Mosquée / Voici justement / Le patio des Orangiers.
 回教寺院の陰に ほら、お誂えむき オレンジの木の中庭
 72 Au-dessus du fleuve nocturne / La ville se silhouette. / Symphonie en bleu.
 夜の大河に 街が映し出すシルエット 青い交響曲

〔三冬〕

〔三春〕

- 63 サン・ブリーズは当時、人口七百ほどの田舎の村。
 65 サン・ブリーズのラ・グランジュ城の入口には左右にナラの巨木がある。
 66 ペリー地方は中世より王族ゆかりの地。
 67 ギリシア神話のアルテミスは月と狩猟の女神。
 69 川船は船頭の女房や家族も皮帯を体に掛けて曳いた。
 70 ラ・シャリテには史跡等あり、美景をスペインに比したか。
 71 モスク、パティオは前句からの連想か。町は聖地サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路でもある。

七十二候 三折・七十二句・三花五月

太字月花は 七十二候の 定座。							8	7	6	5	4	3	2	1	初 折 表
							三 秋	月					晩 夏	晩 夏	
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	初 折 裏	
	花				月		三 冬		初 夏	晩 夏	三 夏		三 夏		
36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	二 の 折 表	
	月						仲 秋						月 三 秋		
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	二 の 折 裏	
	花				月						三 秋	晩 夏	初 夏		
64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	名 残 の 表	
	月										晩 春				
下段の季は 『流れに沿って』の 季語に応じて、 仮に入れたもの。							72	71	70	69	68	67	66	65	名 残 の 裏
								花							

(日本連句協会理事)

言葉の園で出会ったもの

ほしお さなえ

このたびは『連句年鑑』へのエッセイのお話をいただき、大変光栄に思っております。わたしは小説家で、連句を題材にした『言葉の園のお菓子番』という連作短編シリーズを書いております。

わたしが連句、というより俳諧に出会ったのは、大学時代のことでした。小説が好きでしたから、高校一年生くらいまでは文学部に行く気でしたのに、突然「文学部に行けばえんえんと人間の心について考えなければならない、それはたいへんわずらわしいことなのではないか」と思いはじめました。

人でないものの世界について考えたい。できれば生き物でもない方がいい。本で見た鉱物の薄片の写真がきれいだったから、という理由で、模擬試験の数学で二点しか取れなかったこともあるというのに理系に転換し、地学を選びました。地学というのは当時からマイナーな分野で、東京近辺で地学を学べる大学はほとんどなく、実家から比較的近い東京学芸大学に進学しました。

学芸大学は当時は教育学部の単科大学だったのですが、単科とはいえ、国語専修、社会専修、理科専修から、美術や体育専修まで幅広いコースがあるため、総合大学のような雰囲気がありました。そのため一般教養の授業も種類が豊富で、そのなかに俳諧の授業があったのです。

高校時代、わたしは松尾芭蕉のファンでした。古典が好きで、日記文学や平家物語なども読んでいたのですが、『奥の細道』が魂の書だったのです。「俳句というのは明治になって生まれたもので、松尾芭蕉が作っていたのは『俳句』ではなく『俳諧』』ということを高校の古典の授業で学びましたが、教科書には俳諧は載っておらず、教師もたいして説明してくれなかったので、当時から「俳諧」とはなんぞ

や、と気になっていたのです。

大学に入って、一般教養の一覧を見たとき、芭蕉の俳諧を読む授業があることを知りました。理科専修のクラスメイトでその授業をとる人はいなかったのですが、わたしはとにかく俳諧のことを知リたかったので、ひとりでその授業を履修しました。理科の学生どころか、文系の学生もほとんどおらず、たぶん受講者はヒトケタだったと思います。授業は「猿蓑」の「市中は」の巻をただひたすら読んでいくという地味なものでしたが、わたしにとつては発句と脇の付け合いからもう本当に素晴らしく、俳諧とはこういうものなのか、こんな文化が日本にあったのか、と感動しました。

市中は物のにほひや夏の月

凡兆

あつしあつしと門々の聲

芭蕉

色々なものの匂いが漂う夏の空に浮かぶ月。「夏」と「匂い」と「月」というイメージが響きあってひとつの世界を作る。そういう大きな風景に、地上の人々の声だけ

を添わせる。そのバランスのかっこよさに痺れました。

そのまゝにころび落たる升降

來

ゆがみて蓋のあはぬ半櫃

兆

名残の表のこの付け合いも好きでした。荒んだ風景がふたつ並ぶことで、情けなさ、どうしようもなさが増します。そして、クライマックスはなんとと言っても、名残の表から裏にかけての三句の渡りでした。

いのち嬉しき撰集のさた

來

さまざまに品かはりたる恋をして

兆

浮世の果は皆小町なり

蕉

こうして「市中は」の巻を読み直してみると、いまでも一句一句記憶に残っていて、一句としての素晴らしさ、付け合いの素晴らしさ、三句の渡りの素晴らしさに驚愕します。

わたしが文学の道に進むのをためらったのは、近代以降

の文学の持つ「なんとなく重い感じ」が嫌だったのかもしれませんが。読んでいるときは心にずんとくるのですが、生きてるってそういうことばかりじゃないだろう、という気持ちがあつたように思います。

「猿蓑」は、蕉風俳諧の美学である「さび」「しおり」「輕み」が完成する時期の作品群であり、この一卷は芭蕉・凡兆・去来だけの三吟なので、とくに傑作揃いであり、その後の俳諧がどれもこの域に達しているというわけではないでしょうが、寄りかからずに付く感じ、そしてさつと離れる感じ、深入りしないのだからこそ一句ずつが際立つこのバランスにたまらなく惹かれました。

江戸期にこういう文学が存在していて、大学ではそういうことも学べるのだとわかっていれば、二点しか取れない数学に苦勞しながら理系に進まなくてもよかったのかもしれないません。

しかし、この授業ではかつてそのようなものがあつたということを学ぶのみで、自分たちで連句を巻くというようなことはありませんでした。というより、俳諧はすでに失

われたものであり、現代に連句としてよみがえり、楽しんでいる人たちがいるということはまったく知りませんでした。

わたしが連句と出会ったのは、大学を卒業して数年経ってからです。カルチャーセンターに勤めるかつての知人から「連句の講座があるんだけど受けてみない？」と誘われたのです。その人はわたしが大学を出てはじめて就職した会社の同僚でした。実はその会社が潰れたので、みんなそれぞれ別の仕事に転職したのですが、彼女は、わたしが以前の会社での雑談中に俳諧について熱く語っていたことを覚えていたようです。

現代にも連句というものがある？ よくわからないままわたしはその講座を受講しました。講師は村野夏生先生で、受講しているのは俳句経験のある年配の方ばかり。ほかの方々の句を見て「ちよつと素晴らしすぎないか？ この短い句でなんでこれだけのことを言えるの？ まじでわからん」という気持ちでいっぱいでした。五七五を作ったことさえないわたしはなにも思いつかず、半泣きで目の前に置かれた短冊に向かいました。

正直、考えたことを五七五や七七の形にするのがやっとで、自分の句ができたころにはもう句は決まって次に進んでいる……ということの連続で、その日は一句も取ってもらえなかったのか、それとも一句だけなんとか取ってもらえたんだっただか、記憶ははっきりしません。

それでも、とにかく楽しかったのです。「猿蓑」のような世界がいまここにある！ということに興奮しましたし、思いつかないながらも歳時記を眺めて言葉と格闘することの面白さに目覚めました。

その後カルチャーセンターの講座は閉じてしまったのですが、村野先生の連句会に参加するようになり、連句の世界に夢中になりました。会のメンバーはわたしよりずっと年上の方ばかりだったのですが、皆さん信じられないくらい教養があるのです。それも皆さんそれぞれさまざまな職業で活躍されている方なので、大学人のような浮世離れた教養ではなく、清濁合わせた生きた教養と云いますか、パワフルで癖の強い方が多くて、気圧されることばかりだったのですが、その席で耳にした話はいまもずっと心の中に残っています。

村野先生から、若い人たちに連句の楽しさを伝えよ、という命をいただき、若い世代向けの連句イベントを企画したりもしました。連句と出会ったことで言葉の面白さに目覚め、詩や小説も書くようになりました。大学受験の際に理系を選び、卒業後も二十代の間はずっと理系の仕事をしてきたのですが、小説の新人賞に応募したりするうちに結局小説家になりました。

大学受験のときの微分積分との格闘はなんだったのか。数学二点から一浪して理系に進んだのは、理系の出版社でまったく理解できないプログラム言語に関する本を編集した苦労はなんだったのか。最初から文系に行くべきだったのでは、とも思いましたが、こうして現代連句との出会いが、その後のわたしの人生も大きく変えたのです。

仕事やら、出産やらでもろもろあって、その後連句から遠ざかってしまいました。そのあいだに師である村野先生も亡くなり、わたしにとっては連句は村野先生あつてのものでしたから、もう連句を巻くことはないんだろうなあ、とぼんやり思っていたのですが、子どもが小学校に上がった時間ができたとき、ふともう一度連句を巻いてみよう

思いました。

それは、縁あって大学で小説創作の講義をするようになったことも関係があります。創作を志す大学生たちと出会い、言葉を使つて遊んでみたい、と思つたのです。学生たちと連句を卷いたり、さらに Twitter を使つた連句もおこなつたりもしました。連句には個人の創作とは違う楽しみがあり、もう一度しっかり連句を卷こう、と考えて、連句ワークシヨップも開催しました。そんななかから定期的に連句を卷く仲間もできはじめ、細々と巻き続けるようになりました。

とはいえ、それはあくまでも趣味の世界の話で、連句を題材にした小説を書くことになるとは思つてもいませんでした。

二〇一六年から「活版印刷三日月堂」という文庫シリーズを書き始め、その後文庫シリーズの仕事の依頼を受けることが多くなりました。シリーズものを立ち上げるときは、いつも題材に悩みます。続けていかなければならないので、広がりがある題材を選ばなければならないからです。

「活版印刷三日月堂」は川越の印刷所を舞台にした物語です。川越という舞台をさらに掘り下げた「菓子屋横丁月光荘」シリーズ、印刷から紙に題材を発展させた「紙屋ふじさき記念館」シリーズというふたつのシリーズをすでに書き始めていたところ、だいわ文庫の方から、さらにあたらしいシリーズの依頼がありました。

すでにスタートしているシリーズも、かなりの取材を経て執筆しています。ここでまた新しい世界に踏み出せば、また大掛かりな取材が必要になります。それだけの時間を取ることはむずかしく、どうしよう、と思つたとき、すでに自分が知っている連句を題材にするのどうか、と思ひつきました。

しかし、連句というのは、場面としては要するに人が集まって話をするだけで動きがありません。どう小説に仕立てるかについてはまったくのノープランでした。でも、なにか答えなければならぬ。それで、編集者の H さんに「連句はどうでしょう」とお話ししました。正直「それはちょっと動きがありませんね」と言われると思つていました。それがなぜか「面白そうですね」と言われてしまったのです。

聞けば、Hさんの知人に連句の話をしている方がいて、Hさん自身は参加したことはないのだが、以前から面白そうだと思っていた、とか。

Hさんに「連句会で食べるお菓子も出てくるいいですよねえ」と言われ、季節を感じるおいしそうな和菓子の食べ歩き取材にも出かけました。その後、「主人公はどうしましょう」という流れになり、内心、いやいや、なにも思いついていないのですが、と思ったのですが、正直にそう言うわけにもいかず「そうですねえ、やはり二十代後半くらいの女性で……」と、まあ、連句に出会ったころの自分と近い主人公を提案しました。でも、それ以上はなにも持ち札がありません。

それで、苦し紛れに「Hさんはまだ連句を卷いたことがないですよね、そうしたら連句というものがどういものなのか体験していただいた方がいいかもしれませんし、とりあえず一回連句を巻いてみませんか。そうしているうちにアイディアが浮かぶかと思えますし」とお誘いしました。Hさんも「それは楽しそうですね」とおっしゃったので、いつもの連句仲間にも声をかけ、Hさんとともに連句を

巻くことになりました。

ほかのメンバーには「今度連句会を舞台にしたシリーズを立ち上げることにしまして、連句がどのようなものか知ってもらうために担当編集にも一度連句に参加してもらうことになりました」とHさんを紹介しました。

連句をスタートしてみると、なんとHさんはここに来るまでの間に句を練ってきてくださったようで、うつくしい字で素晴らしい句を出してくれました。なんというか、わたしが最初に連句の講座を受けたときに書いたものよりあきらかに句らしい句で、文才を感じました。ほかのメンバーともあつという間に馴染み、予想以上に連句を楽しんでくれて、わたしもよかったよかった、と胸を撫で下ろしたわけです。

とはいえ、主人公がなぜ連句を始めたのか、主人公以外の登場人物の構成をどうするか、毎回のストーリーをどういう形にするか、ということについてはまったくなにも思いつきませんでした。ほかのシリーズの執筆も立て込んでいて、連句のシリーズをどのような形にするかはなかなか決まらず、時間稼ぎのために「少しネタも必要ですよね」

などと理由をつけ、季節ごとに連句会を開くことに。

Hさんは連句会に非常に意欲的で、腕もさらにめきめきあげていき、おいしいお菓子もお持ちいただき（こちらは持ち寄りですのでほかの皆さんも持っていらいっしょにいます）、いつのまにか連句会の番頭さんようになっていました。「もうそろそろ擲きもできそうですね」という話になり、参加者をいくつかの座に分けるような大きめのワークシヨップで擲きをとめてもらったりもしました。

そうこうしているうちに二年ほどが経過し、あるとき連句会の常連であるTさんがHさんに「そういえば、あの小説の話はどうなったんですか？」と訊いたのです。のらりくらりと先送りにしてきていたわたしは焦ったわけですが、Hさんは「いやあ、まだなんですよ、まだ一行もできてないんです」と答え、笑顔なのですが、圧を感じました。Tさんも「え、まだだったんですか？　もうてつきり出来上がって本になっているものかと」と笑っていて、Hさんは結局この二年間、和菓子を食べ歩いて連句を巻いていただけだったな、これはさすがにそろそろまずいな、と感じました。

それで、本気でシリーズの構成を考えはじめたのです。

連句会の場面だけでは小説として動きがないので、前から、連句会と主人公自身の仕事の話をからませるような形で進めていこう、とは思っていました。ですが、主人公の仕事がなかなか決まりません。連句とはまったく別のタイプの仕事だと物語が分離してしまいますし、変わった仕事だと連句よりそちらが目立ってしまうかもしれません。

それで、なにか言葉にまつわる仕事がいいだろう、というところまでは決まっていました。また、主人公が最初から安定した仕事を持っていると、そちらの話での起伏を出しにくいので、連句会に行くようになったきっかけと、主人公の人生の転機を絡ませるようにしようと考え、物語の冒頭で主人公を失職させることにしたのです。

ちやうど、全国各地で書店の閉店が相次ぎ、話題になっていたところでした。町の小さな本屋さんが減っていく時期が続いたあと、そのころには大型書店や、大手チェーン書店の支店の閉店が目立つようになっていました。書店員は言葉にまつわる仕事ですし、勤めていた店が閉店して失

職するという設定も不自然ではない気がしました。

でも、失職しただけでは連句会に出るようになるきつかけとつながりません。また、わたしが描きたかったのは、主人公が同じような世代の友人たちと連句を巻く話ではなく、かつてわたしがそうだったように、まったく異なる世代の人たちと座をともし、それまで知らなかった世界、ものの捉え方に出会っていく、という物語でした。

どうしたら主人公を世代の異なる人の集いに参加させることにできるのか。そこで思いついたのが、主人公の祖母でした。主人公の祖母はもう亡くなってしまっているが、かつては連句をしており、晩年は主人公の実家に同居していた。失職して収入がなくなった主人公が実家に戻り、祖母の遺品のなかから歳時記と連句のノートを発見し、そこに書かれていた連句会の人に連絡を取る。ノートに挟まれていたメモ書きから、祖母が連句会でお菓子番をしていたことを知った主人公は祖母のメモにあったお菓子を持って連句会に向く。そういう流れを思いついたことで、ようやく物語が動き出しました。

連句には約束事が多く、それを順に追って解説したら、

読者は説明が多すぎると思って読むのをやめてしまうかもしれません。自分が連句を学んでいたときのことを思い出しても、毎回の連句で飲み込めることは数えるほどで、あとは「そういうもののなか」と受け流すだけだった気がします。

それで、一話ごとのお話は短くして、主人公が日々の生活のなかで感じる悩みや困ったことについて、連句の席での出来事をきっかけに別の見方でとらえ直して少しずつ前進する、という形式を取ることにしました。連句については、一話ですべて解説しない。一話に一卷すべてを入れるのではなく、いくつかの付け合いだけを取り上げる。そこで感じたことと主人公の日常の悩みとを結びつければ、単なるルールの説明ではなく、主人公にとって意味のあるものとなり、読者にも飲み込みやすくなる、と考えました。

まあ、連句一卷を載せないのは、読者が飲み込めないということのほかに、毎回連句一卷をひとりで創作するのは大変すぎるし、作ったとしても面白いものにはならない、という作者側の事情もあったわけですが。独吟というものもあるようですが、連句はやはりみんなで巻くもの。ひと

りで作ったものはつまらない、とわたしは思います。

ただ、お話のなかに登場する句は、ほとんどわたしが作っています。日さんも含め、何度も連句会は開いています。そんなに都合よく小説の流れに沿った句が出るはずもなく……。小説を書きながら、必要な要素を入れた付け合いを毎回作っていました。

でも、それは本物じゃないよなあ、という思いもあり、二巻、三巻では、それぞれ全六話のうち一話だけ、いつもの連句会のメンバーで巻いた半歌仙、歌仙をそのまま物語に入れてあります。連句一巻を入れた話は日常の場面を少なめにして、一句ごとに捌きの解説を入れていく、という「連句実況中継」のようなスタイルになっています。この話だけは、主人公の日ごろの悩みからも小説全体の筋からも離れ、純粹に連句の楽しさを読者に感じてもらえたら、と思いつきながら書きました。

実は、小説の登場人物には、いまの連句会のメンバーや、かつていっしょに連句を巻いたことのある方の面影があり、小説に入れた半歌仙、歌仙では、メンバーそれぞれに小説の登場人物の役を演じてもらうような雰囲気で作って

もらっています（もちろん日さんの句もはいつています）。

物語が進むにつれ、主人公の祖母や連句会の年配のメンバーの過去の話が見えてきたりもするのですが、この作品を通して、わたしは自分がこれまで出会った人たちの縁を描こうとしているような気がします。連句の席で出会った方はもちろん、実際の祖父母や、両親や、プライベートな友人、知人。そうした方たちと出会うことで、わたし自身も少しずつ変化してきました。

それはどこか連句と似ていて、ほかの人の人生と自分の人生が融合してしまうわけではなく、お互いに少し出会って、少し知り合って、相手の深い部分が垣間見えることがあっても、深く干渉することはなく、そうだね、と言いつながら別れていく。その繰り返しなのだけれど、その出会いによってそれぞれの進む方向が少しずつ変わっていく。

連句の席では皆がただ短冊に言葉を書きつけ、見せ合い、雑談を交わす、ただそれだけです。なぜか遠いむかしのことでも、会話的一幕をありありと思いつけたりします。何十年も前のことを、いまになって思い出し、あれはそう

いうことだったのか、と思うこともあります。

大学時代、『猿蓑』を読んだときに「かつこいい」と感じたあれは、技術の問題ではなく、芭蕉・凡兆・去來の三者がそれまでの人生で見たもの、感じたものを凝縮し、ぎりぎりの言葉で交換しあった、お互いを信頼しあった上での間合いの素晴らしさだったのかもしれない。

「言葉の園のお菓子番」シリーズを読んで、読者から、連句は知らなかったけどおもしろそう、という声をいただくことも増えました。今後、少しでも連句の楽しさを伝えていければ、と思っています。

（小説家）

三つ物の周辺

鈴 木 千恵子

「日本連句協会会報」で「新三つ物」のコーナーを担当している。担当させていただきながら、前任の今村苗さんの「新三つ物」は「三句の渡りを勉強するために連句を成立させている一番短い形、三句を選びその中で付けと転じの妙味を学ぼうとするものなのです」という説明に依りかかってきた。まず、あらためて「新三つ物」とは何なのか。「新三つ物」によって、どのような付けと転じが学べるのかということを考えてみたい。

「新三つ物」を提唱したのは、松根東洋城である。『東洋城全句集』下から「俳諧新三つ物」の一部を引用する。

一日霽月子上京の節、一夜石木子と三人うた女庵に

会す、勿論例の連句興行の爲め、又夜をこめてのことである。その時、ふと石木子が「今日は三つ物をやりましょうか」といふ。我等まだ三つ物はやつたことがない。「それよからう、しかしそれなら僕に一つ考がある、かういふ風な新しい三つ物をけふはやりたいが」といふことで始めた。それは次のやうな制約の下に於てであつた。そこで仮に名をつけてこれを『新三つ物』といふ。

昔の三つ物にこの三つ物はすこしちがふ。昔のは必ず初三であるが、これはさうは限らぬ。寧ろ初三でない方がよい、とする。たとへば、一連の連句、その連句の中のどこでもよい、興の動いたところ、長句でも短句でも雑でも季の句でも何でもかまはず始める。そのあとは、その初一句が一卷中のどこかの一句であるものとしてその心持であとを附ける。で、結果からいふと、その出来上がったものが丁度一歌仙の中のどこかに当るやうになればよい。そこには花の座月の座を含むだものも出来やう、雑ばかりつゞくものも出来やう、又た恋の句もあれば季のあるなしの句も出来やう、

とかくは一連の連句の中のかの一部分をぬいて読む
だ氣持になればよい。

大正十三年（1924）五月「洪柿」

以下、東洋城は「忙しい世の中に」「一卷完成の稽古の
足しとしても、又た別のさういふ一種の表現の機会として
も」「新三つ物」もいいのではないか、と述べている。こ
の「新三つ物」は「どこまでも一卷の中の世界といふこと
を土台に心に置いてその中の一部といふ心持でやつて行
く」のが大切であるとも言ふ。文章は「序に」と、研究者
に「連句信心者」でもあるべきまでに制作に取り組んでほ
しい、そう要求することが我々の「命懸けの決心」である
と結ばれる。「人々に先つて努力してゐる」という東洋城
たちの実作も挙げる。同じく『東洋城全句集』下から。

1 { あまりくにもらふ草餅 樹々
父母を養ふ寺の花に月 青舟
尚奥谷の滝へ棧 東洋城

2 { ラジオで踊る三階の春
往來なき街の灯シとなりにけり
明日乗る船の帆柱の月 寅日子
東洋城

3 { てん草干して踏みどころなき
浪碧く帆白く風の薫りやう
箔置きかへの長谷の観音 喜舟
東洋城

4 { 作柄を案山子の笠に占ひて
野分の尻の雨になる夕 雨々
鯉汁こいぢの鯉を輪切のなまぐさく 喜舟
東洋城

5 { 五位鷺の枯らす藪あり下屋敷
二月の風の寒い葛飾 雨々
川蒸汽川筋換へに海へ出て 石木
東洋城

6 { 虫歯の痛み酒にまぎらし
深川へ舳が向いて寒の月 霽月
広いところを細く入る路次 石木
東洋城

7 肴屋に汁の実ばかり詠へて 石木
 今年は出ぬと露の芽を呼ぶ 東洋城
 春雪の晴るれば月もまどかにて 雨々

8 鼻緒くれたる人の恋しき 寅日子
 仰がる、大臣の君と隔りて 東洋城
 一人畑打つ裏山の陰 逢里雨

作者について、少しだけ記す。寅日子は言わずと知れた寺田寅彦。逢里雨は小宮豊隆。豊隆の音読みの「ほうりう」である（なお、東洋城は本名の豊次郎をもじっている）。その他に野村喜舟の名前が見える。

1～5は季の句で始めている。『東洋城全句集』では雑の句で始めても、ほとんど全部季の句を含んでいる。2、6、7は月の座を含む。6は冬月。7は春の月である。1も春の句で始めたのに付けて、月と花とを詠んでいる。8は恋の句の渡りである。

それでは、わたしたちの「新三つ物」も振り返ってみよう。

① 春光にものぐさ太郎目を覚ます 丘女
 二酸化炭素吐いて亀鳴く 徹心
 補陀落へ漕ぎ出す舟に桜餅 雅子

② どうど落ちたる雷の俎板 璞
 酷暑なり修理不能のプリンター 好博
 手持ち無沙汰に指が這い出す 徹心

③ ぬらりひよん舌舐めづりの細い月 たけを
 人寄せ付けず捨て子花咲く 日菜
 ママチャリは勢ひつけて走り抜け 鄭和

④ 浦々の文を探して鑑定に 蕉肝
 土筆の土手で仰ぐ昼月 あすか
 向き変えたパワーショベルに燕くる 利子

⑤ 百貨店目当の階へまっすぐに 敦子
 父と母とが恋をした街 美友紀
 しゃぼん玉吹いて良妻にはあらず 洋子

る。

連句協会の「新三つ物」は、わたしが担当しているわけだから、何を考えて捌いたのかということ語らなくてはならないだろう。三句の渡りを見るときに、親句ばかりが続くと転じが少ない。反対に疎句ばかりが続くと付け筋がわかりにくくなるのではないだろうか。

⑦は一句目の阿修羅のいそうなお堂などをイメージして、二句目が親句的に付けられている。それに続けて三句目の、見えたものがパズルの答えという付けには距離があり飛躍があると言えよう。⑧の二句目は、何故ブランコを漕いでいるのかは読者の想像に任されているけれど、一句目の子供が親父を嫌がる気分には素直に付いており、親句的である。三句目は、ブランコだけに捉われず、中空に飛び出すということから、西行の旅に連想を広げている。いずれも魅力的な渡りであると感じた。

たまたま、例に挙げたのが親句的な付けから疎句的な付けへとという展開となった。すると、発句に脇が寄り添い、第三で大きく転じるという一般の連句と同様に受け取られるかもしれない。疎句から親句へという流れも確認してみ

⑥

メビウスの帯の表裏に分かれ棲み
ドラマのやうに恋は突然
ただいまがこんなに嬉しい言葉とは
光明
ふう
一枝

⑦

哀愁の眉根阿修羅の魅力なる
暗きになれて見ゆるものあり
補助線を一本引いて解くパズル
士郎
祥子
美友紀

⑧

煩い親父子供嫌がる
ブランコを漕ぎ中空へ飛び出して
西行の旅たどる永き日
寿美子
敏枝
香織

⑨

右も左も見ない十代
コンビニの犬でも開く自動ドア
胸高に抱き粥草の籠
柚
あや
あすか

①は春の句、②は夏の句、③は秋の句（月の句）で始めたもの。冬の句で始めたことはなかった。④は雑の句で始めて、春の月を詠んだもの。花を詠んだものはなかった。⑤、⑥には恋の句がある。⑦～⑨も雑の句で始めた例であ

よう。⑨は一句目の十代の無分別さを、二句目で自動ドアの無分別さともいうべきもので受けている。前句の余情で付けているのである。犬でもという表現が何ともユーモラスである。続けて自動ドアに立ったのであるう人が詠まれる。その場の付けで、一句目から二句目の転じが、三句目で穏やかに収められている印象を受ける。親句から疎句から親句をいうことを述べたが、連句一巻の中で親疎が交互に表れることを目指しているわけではない。親疎のバランスの取れた付け、というものを新三つ物の中で試みることでもあるのではないかと提案である。

東洋城らの新三つ物も、親句的な付けなのか疎句的な付けなのかという観点でいくつか見直してみる。

1は草餅に春の寺というのどかな景から、夏へと季移りをしている。滝は涼気を感じさせるが、場は奥谷であり、棧の存在がかえって急峻さを思わせ大きく転じている。3はてん草を干し、浪が碧いという同場の付けから、長谷の観音へと転じている。具体的な地名が生きている。「箔置きかへ」は短句で多くの内容を表現していると感じた。4は案山子に秋の雨を付けている。「野分の尻」も豊かな

巧みな表現であると思った。寂しげな景であるが、鯉汁のなまぐささという三句目の俗への転じが大きい。5は枯藪に寒風が吹くという葛飾の景に始まる。三句目で「川蒸汽」を付けて、動きが生れている。

以上「新三つ物」によって、どのような三句の渡りが勉強できるかを見てきた。

東洋城も言っているように、「新三つ物」と違い、従来の三つ物は発句・脇・第三からなる。月・花また神祇・釈教・恋などは自由に詠み込んで構わない。こちらは歌仙などの経験のない者も、連句とは、を知る入口ともなり得るだろう。国民文化祭でも令和元年（2019）の第34回にいがた大会から、ジュニアの部が設けられ、三つ物（と表合せ）の募吟が始まった。三つ物（と表合せ）への取り組みは、連句経験のないジュニアにとって、それがどういうものなのかを知るいい機会となっていると思う。

後半では、わたしが令和四年（2022）の第37回おきなわ大会に向けて、どのように臨んだかということに触れていきたい。ジュニア連句に主に一緒に取り組んだのは、

金沢の植田結衣（当時七歳）・泰就（当時四歳）姉弟である。二人のお母さんの円水さんは、コロナ禍によるリモートで連句を始められた。円水さんはいつも二人——現在では三人——のお子さんの相手をしながら、巻いている。すると二人は「五七五?」「つきがよみたい」「はながよみたい」「ピカチュウがよみたい!」とどんどん参加してきた。例えば、

三日月をのみ込むやうにばなな食ふ

泰就

花の波大なはとびをびよんぴよんと

結衣

ピカチュウの絆創膏を膝につけ

結衣

といった具合に。捌きの一直が入り、大人との一卷なのでかな遣いや漢字の表記にも手が入っているが、なによりも発想の自由さ新鮮さに感動をおぼえた。そこで、これは一家でジュニア作品ができるのではないか、と思ったわけである。今回は母子によるジュニア連句を目指しつつ、三つ物（や表合せ）にもそれなりのルールがあるので、初めはわたしが捌くこととなった。

リモート実施の日は、春休み中に設定した。二月中旬に発句を依頼したところ、たくさんキラキラとした句が送ら

れてきた。一部を紹介する。

ふうせんをたかくとばしてうちゅうりょこう 結衣

しゃぼんだまうちゅうにむけてとんでった 結衣

しゃぼんだまいきをはーつとはいてみた 結衣

父さんにバレンタインデーチョコあげる 結衣

うちのねこねこのこいはするのかな 結衣

はるのにじずつとみてたらきえてった 結衣

もんしろちようにゆうがくしきにとんできた 結衣

はなびらは大きくなると木になるよ 結衣

なぜよなぜなぜのしつぽはどこにある 泰就

このような佳句がどうしたら生まれるのかは、わたしも教えてほしいと思っていた。知っていたのは結衣ちゃんはいくノート（松山市内の新一年生に配られているノートの元祖版のようである）を持っているということ。春夏秋冬の屋外と室内のイラストがあり、そこに季語が記してあるので、各季のイラストが図示されているかたちになる。ノートをきっかけとして、豊かな連想が広がっているように思った。今回聞いてみたところ、作句は季語の中から見たことがある、体験したことがある言葉を一覧にする。そ

の季語から浮かんだ言葉で五七、または七五をつくる。最後の語を円水さんと探す、というような流れだそうである。できた句が、この段階で「うちのねこ」の中七が字足らずなので、「ねこのこいとか」に。「かぜよかぜ」に季語がないので「はるのかぜ」に一直する。

春休み中の一日目は、三月二十九日である。円水さんの友人の山内裕子さんの咲良ちゃん（十歳）も鹿児島から加わった。佳句の山から、四句を発句案とした。

- ①もんしろちようにゆうがくしきにとんできた 結衣
 - ②しゃぼんだまうちゆうにむけてとんできた 結衣
 - ③うちのねこねこのこいとかするのかな 結衣
 - ④はるのかぜかぜのしつぽはどこにある 泰就
- 円水さんと裕子さんには、今回の実作について、前もって簡単に説明を加えておいた。

○三つ物という三句だけの連句を巻くこと。

○三つ物の中には、月・花なども自由に詠んでよいが、発句と脇は同季なので春・春・雑という展開が普通のこと。

○「月」を詠む場合には春の月を詠むこと。発句に「はる」をもう使っている場合には「おぼろ月」などの季語がある

こと。

○「花」を詠んでみてもよいが、花は晩春なので、発句が仲春の場合は脇も「初花」というような仲春の季語で詠んだ方が自然なこと。

そのようにして、当日完成した三つ物は以下の通りである。

- ①もんしろちようにゆうがくしきにとんできた 結衣
- ピカチュウたちと花をまつてる 結衣
- フェルトのブローチだれにあげようか 咲良

当季という感覚を大切にしていたかったので、「にゆうがくしき」という仲春の季語の句から取り組んだ。脇に、さくらのことを花と言って詠んでもよいとジュニアにも説明をする。ただし「にゆうがくしき」にはまださくらが満開でないこともあるので（実際には近年の開花は早い）、「はじめての花」などという詠み方があると補足をする。そして「花をまつてる」という句に落ち着いた。第三は咲良ちゃんの、フェルトのブローチ作りのような手芸が好きという話題から生まれた。

②

しゃぼんだまうちゅうにむけてとんでった 結衣

おぼろづきよにたびをつづける 結衣

水族館ハイビスカスの咲いた道 咲良

結衣

脇に春の月の「おぼろづきよ」を詠んだ。第三は、沖繩へのご挨拶をどうしたらいいかを皆で考えて、咲良ちゃんが句にした。

③

うちのねこねこのこいとかするのかな 結衣

結衣

ばあばのおにわレンギョウひらら 結衣

結衣

よもぎもちコネコネこねた白のなか 咲良

結衣

「ねこのこい」は発句を考えてもらったときの初春の句である。発句が猫の恋、脇が連翹の咲く景なので、第三は、人間の行動が詠まれた方が変化が生れるというアドバイスをした。「コネコネこねた」は、なかなかにジュニアでなくは詠めない言い回しである。

④

はるのかぜかぜのしっぱはどこにある 泰就

結衣

にげられちゃったおたまじゃくしに 結衣

結衣

赤ちゃんの目が光つてるときかわいい 結衣

結衣

「かぜのしっぱ」という斬新な発想である。脇の「おたまじゃくし」は「しっぱ」から連想したか。第三は字余り

である。例えば「赤ちゃんの目がひかるときかわいいな」などと一直すれば字余りは解決する。しかし、捌きとしてはそれは改悪であると思い、元句のままとした。ジュニア連句では、定型に収めるための「うだな」「うだよ」という類いの安易な表現をよく目にするように感じる。ジュニアに限らず、詩を定型に収めるには、表現は磨かれなくてはならないと思う。

春休みをもう一日使って（四月五日）、表合せにも挑戦することにした。そちらも紹介してみたい。

⑤はるのにじずっとみてたらきえてった 結衣
をこの日の発句とした。

保護者への事前説明は、

○表合せという六句（または八句・十句）だけの連句を巻くこと。

○表合せも素材は自由に詠みこんでよいが、発句が晩春なので、脇と第三は三春か晩春という展開が自然であること。自由に詠む中で「花」か「月」を詠んでみてもよい。

○発句が「はるのにじ」という天象なので、脇で「にじ」と一緒にではない「月」を詠むのは、難しいかもしれない

こと。

○「花」を第三で詠んでもよい。他の箇所でも、他季の正花として、春以外の「花」を詠んでもよい。ジュニアは夏の正花の「花火」などが詠みやすいかもしれないことの補足。○挙句の前(表合せ六句だったら、五句目)に「月」や「花」を持つてくると、盛りあがり作りやすいということ。

大体、以上の通りである。

当日完成した表合せ六句作品。

はるのにじずっとみてたらきえてった

結衣

カメラでパチリうぐいすの声

咲良

イースターエッグレースをおとうとと

結衣

ぐらぐらゆれる高い吊り橋

咲良

手どりがわおくせんまんの花火さく

結衣

こおりいちごをもっとたべたい

咲良

発句から、脇ではうぐいすを連想した。カメラで声を撮るという発想がユニークである。発句が虹を見ている自分のこと。脇がうぐいすを見ている、うぐいすの声を聴いている自分のことなので、第三で人物を出す場合には、自分以外の人物も登場した方がよいとアドバイスする。結衣

ちゃんは弟の姿を詠み込んだ。エッグレースは実体験のようであった。四句目では、レースで玉子のぐらぐらする様子から、吊り橋が付けられた。五句目は、一巻の山場として、花火などを詠むのが相応しい流れとなった。金沢在住の結衣ちゃんならではの、手取川の花火となった。表合せの挙句は、ジュニアらしい夏の句である。

その後、円水さんと裕子さんが捌いた三つ物作品も、入賞を果たすことができた。国文祭の場でも述べたが、三つ物(や表合せ)はジュニア(や未経験者)が連句に触れるいいチャンスになり得ると感じている。

一方で、あらためて新三つ物の意味である。現代連句の実作経験者の作品が、季題配置表(例)などに頼り過ぎていると思えることがある。「新三つ物」への取り組みは、季題配置表の季に頼らずに、自分で前句に相応しい季の情緒を見出してゆく。月花の定座に拘らずに、引き上げたりもする。そんなことの稽古ともなるのではないだろうか。今後とも、皆さんと「新三つ物」による付けと転じの追究を続けていきたい。

(日本連句協会理事)

令和四年の連句界

林 転 石

取り巻く情勢

令和四年の春はロシアによるウクライナ侵略の勃発より始まる。よもや二十一世紀の世界に起こりえないだろうと思われていた専制国家による帝国主義の戦争、動乱が世界を震撼させた。前年から起こっていた原油価格のつり上げ、農産物の価格高騰がこの戦争により更に拡大し、あらゆる物価が上昇するコストプッシュインフレとなって世界経済を巻き込んだ。この為物価の沈静化を目指した米国FRBは度重なる貸出金利の引き上げを行い、結果、日米金利差の拡大により極端なドル高円安の局面となり、資源・食料を海外からの輸入に委ねている日本は貿易収支の大きな赤字を計上する事になる。

三年目を迎えたコロナ対策も令和四年にはワクティン接種の回数が五回目を越えたところでありしもの感染の猛威もその峠を越して鎮静に向かうようになる。但し、その対策のための財政出動の原資などから国債の発行・借り入れは千二百兆円を超える膨大なものになっている。

日本連句協会年次総会と連句実作会

三月に日本連句協会は東京墨田区の江戸東京博物館において総会並びに全国連句大会を開催した。実に三年ぶりの事であった。委任状を含めて二七六名の参加となり、この大会はリアルな座とリモートの座とを並行して同時進行させるという協会としては初めての企画を試みた。昨年作成したりリモート連句マニュアルを活用し、機材の手当も行い綿密な打ち合わせも重ね実行したものである。実行参加した協会委員の作業も手探りのものとなったがリモートの座の参加は二四名、リアルな座の参加は三四名とまずは成功と評価できるものとなった。

国民文化祭の状況

今年の国民文化祭は十月に沖縄県南城市で開催された。

詳細については沖縄県の公式記録に記載されているところであるが、連句作品の募吟については二十韻の形式で行われ、また本大会の会場は南城市文化センター・シュガーホールであった。

準備段階から沖縄県全体が新型コロナウイルス感染症の甚大な影響があり、当初は打合せなども思うように進めることが困難であったが、開催の時期が近づくにつれコロナの影響も漸減し、また地元南城市の行政のご尽力と募吟および本大会に参加された方のご協力もあって成功裏に開催することが出来た。募吟一般の部の作品は四九五巻（うち海外五巻）、ジュニアの部の参加作品は二十七であった。

リモート連句会

昨年に引き続き第二回全国リモート連句大会を六月に開催した。これはZoomアプリを使用し連衆の画像・音声と共有画面で連句作品を実作するもので、参加資格を問わないオープン参加とし当日は四六名の参加があった。作品数

は十二巻であった。

リモート連句の効用は現場に参集する必要がないため多少、体力に自信のない方、あるいは子育て中の方でも比較的气楽に参加できることであり、特に普段はなかなかお目にかかることが出来ない遠方の方、自分の所属と異なるグループの方と同じ座となつて付け合いを楽しむことができるという事であろうか。日本連句協会としては今後もこの企画を継続、支援していく方針である。

日本連句協会としての動き

「会報」日本連句協会会報は今年も六回の発行を行った。会報は連句作品、随筆、各種の連絡事項を掲載しているが、感染症流行の影響があった前年度から比べると掲載する作品数も増加傾向に転じている。会員の方あるいは非会員の方の連句に関する評論または随筆の寄稿を編集部にお寄せいただきたいと考えている。

「現代連句集」日本連句協会が十年ごとに発行している現代連句集、今年はその第Ⅳ号を十一月に発行した。十年ひと昔というのが掲載されている作品と連衆のお名前を眺め

てみるといささかの感懷を覚えるところである。是非一読
いただきたい。

「年鑑」令和四年度版を六月に発刊した。評論エッセイ
は三編、掲載作品はグループ分一〇八巻、個人十七巻、学
生生徒十二巻の合計一三七巻となった。引続き個人、学生
生徒の作品の応募拡大に期待したい。

「動画作成」二年前から始めている国文祭PRのための
動画作成は、今年六月、「ミーツ連句美ら島沖縄」をアッ
プし、沖縄国文祭と地元地域の様子、琉歌などを紹介した。

日本連句協会会員の登録人数は令和四年十二月現在四六
六名、前年同期比で差引六名の減少となった。紹介してい
るグループは一九二グループである。そのグループに蕪村
派、老虎亭連句会が新たに登録された。

（日本連句協会副会長・理事長）



令和4年 主要連句行事一覧表

協 会 行 事	諸 行 事
1／29 常任理事会	
2／1 会報連句244号発行 2／13 理事会	
3／20 日本連句協会総会・全国連句大会（江戸博物館会議室）	
4／1 会報連句245号発行	4／21 猫蓑会藤祭り 4／29 えひめ俵口全国連句大会（松山）
5／8 常任理事会	
6／1 会報連句246号発行 6／12 全国リモート連句大会 6／30 連句年鑑令和四年版発行	
7／9 理事会	
8／1 会報連句247号発行 日本連句協会々員名簿発行同封	
9／3 常任理事会	9／10 いなみ全国連句大会
10／1 会報連句248号発行	10／9 浪速の芭蕉祭（大阪） 10／9 さきたま連句大会 10／12 伊賀上野芭蕉祭 10／29～30 国民文化祭おきなわ2022（南城市）
11／12 理事会 11／30 現代連句集Ⅳ発行	
12／1 会報連句249号発行	

作

品

—連句グループ五十音順—
割付の関係で前後する場合があります。

《愛知・愛知県連句協会》

二十韻 『豌豆や』

豌豆や愉しき莢の子だくさん
麦茶沸かして午後の団欒
穏やかに流るる大河眺め
放たれし馬駆ける牧場
就活はスマホに託す月遙か
薄どつさり信楽の壺
手をつなぎ蛸の道どこまでも
好きと嫌ひで占める年頃
バタンとドア閉める音響くらん
いつかいきたいイースター島

間瀬芙美捌

間瀬芙美

森田美那子

八雲鏡子

中西静子

静

那

鏡

芙

ッ

富田八千代

ナオ裏路地はおでん準備の屋台骨
くしやみをする
オタニサンスゴイスゴイとアナウンサー
猫の会議は恋で延長
愛のある世界平和を祈りぬ
迷彩服をいつかドレスに
ナウ若返りロッキンロールは老の夢
転びながらも風は離さず
碧空に溶けて広がる花万朶
麓それぞれ開帳の列

静 芙 那 芙 鏡 那 鏡 静 代 那

令和四年五月二十日首
令和四年五月三十日尾

（於・熱田神宮文化殿・文音）

《徳島・阿吽の会》

二十韻 『旗掲ぐ』

梅村光明捌

春寒し「殺すな」と書く旗掲ぐ
正気忘れて二月終はりぬ
花いまだトーカーで観る喜劇人
タッブダンスの響く階段
姫娥^も思ふ夏の夜の夢蘇る
麦酒片手に白い手招き
下駄を履きふたりつきの家族風呂
スワンボートは旅の仕舞ひに
神秘主義富嶽の景に融け込まん
百年日記孫に求めて

梅村光明
黄木由良
光明
由良
光明
由良
光明
由良
光明
由良
光明
由良

ナ核廃絶メール見返す櫓明り
目から鱗が落ちる初弥撒
羽子をつく腕伸びやかにしなやかに
恋の煙の消えることなく
滅びたる狼昇る月に吠え
敗戦忌には配る赤紙
ナ身^ナに沁みて竹山道雄読み了へる
伝へたき言^{こと}耳に委ねて
平穏はあまりに脆く飛花や悲歌
海市出来^{しゅらい}まほろばのごと

由良
光明
由良
光明
由良
光明
由良
光明
由良
光明
由良
光明

令和四年二月二十六日首
令和四年三月十七日尾
(文音)

《東京・赤のままの会―その二》

歌仙 『小春かな』

小春かな遠出の靴の紐は赤
自転車を漕ぐ寒林の径
父子して将棋入門座右の書に
サイレントニャー猫の眩き
月煌々天守の鯨の反り返り
色変へぬ松愛づる人々
ッ車座になつてたけなは新酒古酒
わたしや女将で千手観音
憧れの君と旅するアフリカへ
ヒジャヴを外す瞬間にキス
「青鞥」にらいてう熱き想ひ込め
ゴルフボールは一直線に
屋上に回転木馬月涼し
幼年の夢終はる短夜
北からのミサイルに又戦きて
家族会議は移住相談
村おこし僻地賑はふ花の山
むすびは菜飯角のコンビニ

黒瀬琢葉捌

黒瀬琢葉
本屋良子
服部秋扇
高澤貴々
青山牛蟹
勝又丘女
小畑玲衣
正村有
篠はらつば
高橋つらら
土屋日菜
内藤秀穂
中岡実来
永禮未鬼
古田もえ
山本秀夫
篠原輪菊
琢葉

ナオ 中空の蝶の羽ばたき初々し
唱 和高らか少年の詩
願はくばJICAにこの身捧げんと
折込チラシ折鶴となり
状受けにあなたの香り太き文字
恋の焰に雪女郎融け
才能を信じた夫まだ冬眠
秋葉原まで通ふオタクで
カプセルのおもちや揃へる専門店
暖簾七代守るこいさん
水平線月の道伸ぶ浦に立つ
モンサンミシエル爽涼の中
ナウ 雁の声塔のはるかな高みより
乗り降り数多駅は混み合ひ
古里の母へのみやげ懷に
老犬連れて進む川土手
花吹雪鳥居奉納宮大工
床柱背に祝ふ桜湯

良子 秋扇 貴々 牛蟹 丘女 玲衣 有
はらつば っらら 日菜 秀穂 実来 未鬼 もえ 秀夫 輪菊 良子 秋扇

令和四年十一月 七日首
令和四年十二月 二十日尾 (文音)

短歌行
『星と螢と』

視界ただ星と螢と競いけり
 ほのかに香る梔子の花
 銘は不二手作り茶杓彫り終えて
 ルイボステイは朝な夕なに
 狭庭からビブラート付きちちろ虫
 派手な秋服君に贈らん
 間諜と知りつつ月に抱く尼僧
 幼き頃は魔女に憧れ
 口紅をさす少年の舞い姿
 おだやかな風アンニュイな午後
 花の下帆を張る舟の過ぎゆきて
 風合戦もちよいと休憩

山本秀夫 捌

秀 鬼 良 葉 菜 良 秀 鬼 葉 菜 子 夫

ナオ
弥生尽ブラックチョコの渋さ愛で
父の好みのブランデーの古酒
友人と明日の海釣りプラン練る
会社のあの娘誘つてみよか
天邪鬼嫌いは好きのことらしく
大観覧車なびけ黒髪
寒月にパリ行の便飛び去りぬ
水辺に集うあまた白鳥
ナウ
ふるさとはかけがえない母の国
平和を願ひパンドウラ弾く
ほろ酔うて少しの嘘を花の宵
仲間と共に行かん野遊び

鬼葉菜 鬼葉菜 鬼葉良 秀菜良

令和四年八月二十一日首
令和四年八月二十一日尾
(文音)

《埼玉・あした連句会―その四》

歌仙『多羅葉』

多羅葉に「宙」と書く秋朱印寺
良夜を渡る雁が音の列
久々の芸術祭に招かれて
音楽隊の深き敬礼
売り出しの商店街の幕が開き
老いも若きも着脹れている
燃えさかる暖炉の部屋にルオーの絵
少女の膝につんとシヤム猫
まばたきの瞳の中に潤む我
閨の灯が消え世継ぎの灯点く
幸せも程々でありそれなりに
苦手ジョギング今はルーティン
月涼し華麗にはねる錦鯉
庭師自慢の作り滝落つ
なつかしい友と再会時過ごし
酒は吟醸銘は初孫
城跡の台地を巡る花筏
声燦燦と松蟬の詩

川上綾子捌

川上綾子
次山和子
宮本艶子
二村十専
竹本いくこ

綾 和 艶 十 々 い 綾 艶 和 い 綾 十 和

逆立ちて山嶺近き畑を打ち
平家落人伝説の村
年一のフリマ広場はにぎわいて
夕日に映えるモンチッチたち
わいわいと遊び疲れてもらう風邪
炬燵にもぐり開くアルバム
逢いたくて逢いたくなくて爪を噛む
碇を下ろす傷心の旅
バチカンのピエタの像に涙して
役目を終えた水車朽ちゆく
墨をする香の立ちこもり居待月
名残りの茶事の足るを知る軸
分校へ幾曲りして刈田道
たまに行き交う小型トラック
錆びついた鉄看板のボンカレー
おいドローンよ君は何処へ
長堤の限り花あり花吹雪
四肢のびやかに跳ねる若駒

令和四年十一月二十日首
令和四年十二月十二日尾（文音）

艶 綾 十 い 艶 綾 和 艶 綾 十 い 綾 十 い 艶 綾 和 艶 綾 十 い 綾 艶 和

《東京・あした芭蕉記念館連句会》

歌仙『新米や』

新米や農の労苦を噛み締める
月は 遍く 団 欒 の 卓
史蹟みな湖底に沈み水澄みて
遠く 近くに 鳥 の 歓 声
高速を出でひまわりの黄に会えり
夏富士を背に自撮り成功
厳めしきジビエ料理の看板
かつば橋にはデバもナキリも
彼の人と世帯持たんと張り切る娘
ぼんぼん育ち閨に詳しく
いとしさを心に了い打つメール
修正液の尽きるペン先
寒月に番記者のなお影の引き
ひとは時には狼となり
おつかいの赤頭巾ちゃんきをつけて
軽くステップ気分ルンルン
古刹にて豪華絢爛花の宴
太閤に似た仁のうららか

渡部春水捌

渡部春水

川上綾子

次山和子

山田他美子

戸田徳子

芦澤湧字

綾

和

他

徳

湧

春

和

綾

他

湧

徳

春

ナオ
蜃楼は夢か現か確かめん
駅弁友に目指す最果て
望郷の国後島をスケッチし
ジムで鍛えた逞しき腕
夕立に軒先で拭く君の髪
唐 枕 並 べ 邪 な 恋
ビザ期限間近に迫り落ち着かず
スペイン広場戻る賑わい
帆船のボトルシップの完成し
熊楠の書の微細緻密に
芒原スーパームーン赤々と
虫の音のなか浸かる岩風呂
ナウ
御遷宮ひと目見んとて父に添い
大道店は橋の手前に
ポケットに小さき角瓶しのばせて
吟行の句が何と特選
久々に花舞う中のコンサート
明日を待みてかかる初虹

綾 和 他 徳 湧 春 他 綾 春 他 綾 湧 春 和

令和四年十月 一日首
令和四年十月二十三日尾 (文音)

歌仙『冬ざるる』

江森京香捌

江森京 白根順 川岸富 宮本艶 高橋たかえ

富順京た艶 富順京た艶 富順京

令和四年十一月二十日首
令和四年十二月一日尾
(文音)

た京艶富順京た艶富順京た艶富順京た艶

《本庄・あした本庄連句会》

歌仙『粃の山』

越智みよ子捌

一陣の風吹きぬけり粃の山

越智みよ子

古池の面照らす満月

田口晶子

少年のサックスの律身に沁みて

竹本いくこ

ゆったり渉る雲のいろいろ

晶

フレームのふくらみ切つて出荷時

晶

家族揃つて囲むは櫓火

い

ッ開設の乗馬クラブの賑わいに

み

捌きの妙に心底引かれ

晶

貫禄の神田須田町老舗妻

い

坂登りつめ古き神苑

み

ランドセル鳴らし帰宅の子等の列

晶

スマホに習う料理あれこれ

い

月歌とかかる中天蜘蛛太鼓

み

声の弾ける林間学校

晶

いつの世も末は博士か大臣か

い

まずは健康ヨーガ・食事と

み

花人の湧きて湧くなり天が下

晶

ビーフカレーに浅蜷たっぷり

い

ナオ強東風にあっけらかんと辻地藏

幡ひらひらと備前窯元

刻過ぎてポスト虚しき生あくび

いつか立ち消え合弁話

冬ざるる物価高騰円安も

すつてんころりおっと凍鶴

お姫様抱っこ力士の腕の中

地震ぐらりとビルの崩壊

ゆったりと弛む電線畑の上

新バイパスの工事は遅々と

海原に月の道筋まつしぐら

夜長手遊び成る千羽鶴

ナウ阿波踊り先導若き城ガール

年季の入る婆のまんじゅう

恵方へとジャンボ飛行機伸びゆけり

笑顔で帰還ワールドカップ

地酒酌み芸は玄人花筵

和の文字を背に唸る大風

執

筆 い 晶 み い 晶 み い み い 晶 み い 晶 み い 晶 み

令和四年十一月十日首
令和四年十二月十日尾 (文音)

《東京・蛙門会》

二十韻 『けんけんパ!』

光丘真理捌

青空や帰燕は高く点となり
大欠伸する石榴ゆらゆら
汁椀の底に弦月香りして
十日前から旅の支度を
風逃れ海辺のカフェでジャムセッション
その秋波^{なみだ}に身の竦むほど
吾も又薄く紅引く神社裏
処方箋には知らない薬
闇の森狼の影行き過ぎし
ネット回線凍りつかせる

浅岡照夫 村松定史 岡部瑞枝 横田めい 光丘真理 定史 瑞枝 めい 照夫 篠塚雅世

ナオ棺の蓋かたこととり鳴り止んで
べつかふ飴に透ける横顔
小さき蔵異国の妻と酒醸し
比叡^{ひえい}山仰ぎて蜚^{ほう}を愛づ
ミサイルの飛び交ふ野辺に夏の月
縦糸に時横糸に夢
ナウ古硯の池を満たせば龍の顕れ
雪解道来るウーバーイーツ
けんけんパ!ふるよまたふる児らに花
蛙受け継ぐ眠い遺伝子

定史 瑞枝 照夫 雅世 瑞枝 定史 瑞枝 真理 照夫

令和四年 十月四日首
令和四年十一月八日尾

(於・文京シビックセンター)

歌仙『冬嶺を』

冬嶺を鳥鳴きわたる日暮かな
たぶちむかえる里の木守
作りおく茄の漬物準備して
家具の匠の椅子が三脚
月食の時をしずかに待つならむ
回す新酒はかるやかな酔
台風は室戸岬をかすめ過ぎ
案山子の腕はいつも健在
縄文の土器の下からナウマン象
忘れられない喜寿の元カレ
パソコンで負けずに送る愛の文
クリツクミスで消えてしまった
うたた寝の覚めてハワイの虹の橋
目高の桶に浮かぶ月影
お土産は寄木細工のコースター
大神宮のみくじ大吉
花分けて屋形船ゆく隅田川
町内あげて集う曲水

近藤蕉肝捌

飯田せつ子
近藤蕉肝
近藤礼子
せつ子
蕉肝
礼子
せつ子
石川桃瑪
礼子
蕉肝
桃瑪
せつ子
蕉肝
礼子
せつ子
桃瑪
礼子
蕉肝
せつ子

ナオ 誰彼となく誘い出し桃畑

愛想笑いでやり過ごす人
長かったコロナ籠りで名も忘れ
グリークラブのしぶいバリトン
お七夜の寝顔おだやか月円
弁護士事務所届く有りの実
ハロウィーン訳も分らず馬鹿騒ぎ
江戸の石碑は薬研彫りにて
品選び推しと言われて見る値札
円安ゆえのインバウンドなり
プーチンの夢食った猿腹こわし
海の向こうに鬼の住む島
ナウ 近頃はなべてスマホに教えられ
卑猥な話ほくそえむ彼
体操も女子陸上も脱毛し
エントロピック重力の蝶
ダム工事始まる前の花むしろ
春のみかんが並ぶ直売

※有りの実＝梨のこと

桃畑
せつ子
蕉肝
礼子
せつ子
桃瑪
蕉肝
礼子
せつ子
桃瑪
蕉肝
礼子
せつ子
桃瑪
蕉肝
礼子
せつ子

令和四年十一月四日首尾

(於・伊勢原市中央公民館)

歌仙
『巫女ふたり』

根津忠史

みつ代 忠史 麻佐子 みつ代 直幸 博山 明水 忠史 麻佐子 みつ代 直幸 博山 明水 忠史 麻佐子 みつ代

(於・伊勢原市中央公民館)

《伊東・伊東連句会「風」―その二》

歌仙 『初 鷗』

かぎろいや今飛び立たん初鷗
福茶たまわる干物屋の縁
新築の木の香ほのかに漂いて
広い舞台におろす右足
月冴えて野原一面白々と
何はともあれ呷る熱燗
同胞の集う法事に猫もいる
空の涙にまたもだまされ
なれそめはGTR颯爽と
バンジージャンプ君の胸まで
カラヴァッジョ求めローマの休日
に投げるコインは五円百円
ピオロンの不協和音に月惑う
鈴虫の声遠きミサイル
霧はれて平和な国よ蘇れ
マツチヨが選ぶ鶏肉のハム
ありったけ玩具ちらばる花筵
れんげ畑の故郷の道

近藤蕉肝捌

角田紀子
宮澤次男
半田有杜
龜山松子
寺本碧水
菅沼公子
紀子
齋藤恵子
藍原綾子
菅沼不立
りん亭
次男
有杜
碧水
綾子
次男
不立

ナオ 春炬燵気ままな山の暮しあり
八百万なる神を敬い
大いなる杉玉つるす酒屋にて
呂律回らず医者に駆け込む
女子アナの分け隔てなきその笑顔
手入れよろしき権妻の庭
藁人形月照らしたる釘の跡
装う山の色も褪せたり
不凍港西も東も穴惑い
葉っぱ頭に化ける練習
繰り返す遣伝子変異ケルベロス
雪の降る夜は昔話を
ナウ ただ前へ進み行くのみラガーマン
夢と希望の三者面談
ソーラーに波に地熱にバイオマス
伊豆の海辺の風車売り
花の宿ケーブルカーで運ばれて
かすみにかぶ頼朝のかげ

碧水
有杜
不立
りん亭
紀子
綾子
不立
りん亭
紀子
碧水
有杜
次男
碧水
有杜
りん亭
綾子
近藤蕉肝

令和四年 十月二十日首
令和四年十一月十七日尾

(於・伊東市中央会館)

《伊東・伊東連句会「風」―その二》

歌仙 『極 寒』

極寒や山ふところの村老いし
霜柱踏み覗く箱罌
街角のコーヒーの香に誘われて
音の静かな電気自動車
高樓に仰ぎ見る月耿耿と
満天星紅葉いよよ鮮やか
裸婦像に足を留める美術展
十二時過ぎて元のボロ服
真実の愛を求めて寅次郎
美人姉妹の本命は誰
宣伝に乘せられサプリー買ひ漁り
ジビエ料理をおっかなびつくり
平和裏にPK戦で夏の陣
月も涼しき須磨の松籟
懐かしき顔が揃いてまず一献
こくりこくりと居眠りの犬
寂庵に旅人をまつ花の笑
春風に乗る琴の調べよ

菅沼不立捌

菅沼不立
藍原綾子
宮澤次男
半田有杜
寺本碧水
綾子
次男
有杜
碧水
りん亭
有杜
綾子
碧水
次男
有杜
綾子
不立
碧水

ナオ

競漕の勝利のエイト力瘤
走り来る子をしかと受け止め
母牛の草を食みたる丘の牧
鐘を目指して巡礼の道
冬晴れをドクターイエロー輝きて
成吉思汗の鍋つつき合う
ふるさとの川はこんなに狭かった
地図に載らないこの隠れ宿
家で待つ妻のある身をつい忘れ
DJポリス舌の滑らか
べったらの市照らし出す月の翳
落鮎下げて友のあらわる
赤とんぼ戸惑いながらビルの谷
防犯カメラ写す妖怪
AIの翻訳とときに的はずれ
時の流れを追えぬ年代
外つ国の人も集いし花の宴
良きこと多きうらかな昼

次男
有杜
綾子
りん亭
有杜
碧水
綾子
有杜
不立
次男
有杜
りん亭
有杜
綾子
次男
綾子
りん亭

令和五年一月十九日首
令和五年二月十六日尾

（於・伊東市中央会館）

二十韻 『大阪のかたち』

小池正博捌

大阪のかたちにかぶる夏帽子
麦藁蛸のうごくトロ箱
ワゴン車で撮影班が次々に
昔のこととこれからのこと
激動の世界見つめる月の眉
告白さえも虫に邪魔され
そぞろ寒けんかするほど好きだった
木魚にあわせリズム体操
熟さずにまだまだ青い青二才
課長の靴をあたたためており

小池正博
木村ふう
下江花留化
竹山みどり
ふう
花留化
正博
花留化
みどり
ふう

ナオ
うちの仔もマイクロチップ埋めました
心配したがつただの風邪らし
お勧めの水まんじゅうに冬の月
むすびの地へと桶を漕ぎだす
女湯の暖簾に揺れる恋のうた
寝物語は止むにやまれず
ナウ
正確な予測へ線状降水帯
紋白蝶がひらりひらひら
山麓の酒蔵からも花便り
美しきもの春のいのちか

花留化
ふう
間部好美
正博
ふう
みどり
ふう
花留化
正博
みどり

令和四年六月六日首尾

(於・たかつガーデン)

《平塚・おおすすめ連句会》

二十韻 『蛇皮線弾く』

石川桃瑪捌

花冷えや西洋館の波硝子

石田 京

いつ入るかと巢箱見上げる

小林 静司

白てふの寄り道しつづ飛ぶならん

石川 桃瑪

誰が投げたかやちむんの壺

安楽 明郎

思ひ出はいにし世のまま月涼し

静 司

豊満な胸つつむ芭蕉布

京

蛇皮線の音と弾き手に惚れこみて

明 郎

戦禍に負けぬ国を誇りに

桃 瑪

近ごろは小麦の価格高騰す

京

象牙買ひ込み篆刻の技

静 司

ナオ初霜の置く庭先に箒立て

凍鶴群るる風の保護地区

ビタミンよプロテインよと嫁料る

蚊帳の名残に龍田姫招く

星月夜じゅごん去りゆく辺野古沖

大綱引に人のひしめく

ナウ平和なる時代を確と噛みしめて

少し返せし借金額

満開の落ちなんとして紅椿

磯の口明け朝まだきより

桃 瑪

明 郎

静 司

京

明 郎

桃 瑪

京

静 司

桃 瑪

明 郎

*やちむん…沖繩のことば。焼き物。陶器。
*いにし世…過ぎ去った世。去る年。
*料る…古語。《料理の動詞化》料理する。
*招ぐ…古語。をく。をぐ。《心霊などを》招き寄せる。

令和四年四月 二日首（於・八幡山の洋館）
令和四年四月二十日尾（文音）

二十韻 『晴れの国』

今村華紅捌

立春や名に違はざる晴れの国
そぞろ歩きに匂ふ梅林
田楽を師の大皿に盛りつけて
座敷の隅に猫が居残り
サイダーの泡のはじけて昼の月
頬杖ついて君を見てゐる
だまされたあの言葉から二十年
どちらがぐりでぐらがどちらか
草原をつぎつき過る雲の影
地酒抱へて来たるポン友

石見にやん子
藤原みきよ
今村華紅
小川沙羅
小倉掬
景山かおり

ナオ
ふるさとの訛行き交ふ冬の町
燻つているダルマストープ
抱擁は彼のマントに包まれて
闇にこぼるる長き黒髪
有明の月を待たせて一の宮
糸のころぐさの群生に会ふ
ナウ
色鳥の羽音降り来る峠道
母の両手にぶらさがる子等
京へ五里花に埋もれしみちしるべ
木の学舎に立てる陽炎

畑霜
大倉青帆
にや
み
月
にや
華
月
帆
にや
華
月
帆
にや
華
月
帆

令和四年二月 四日首
令和四年二月二十日尾

(於・きらめきプラザ)

源氏行 『鷹 柱』

初折二折オ
二折ウ名残折

服部秋扇捌
渡辺 柚捌

峰風に乗り旋回す鷹柱

服部秋 扇

朝月のこる空の広やか

別所真 紀

故郷の柚餅子の顔は無骨にて

渡辺 柚

猫に差し出す紺の座布団

鈴木美奈子 帆

約束を忘れな盆に忘れきし

西川 菜 良

双手に包む小さき香盒

越村清 良

大壺の枯れ蓮時を縮みゆく

津高鬼 猫

しづりの雪に頬ぬらす君

福永千 晴

恋重し抱擁の身に言葉なし

石上遥 夢

ゆつくり走る七尾線なり

石田 京 良

三葉虫の個眼レンズをリノベーション

江下緋 紗

棘みづみづと稊栗の青

白石一 有

乱取りの投げ技決まり汗拭ふ

佐久間鶴 紀

礼儀作法は父の特訓

舟 紀

幼児の方舟なりし玩具箱

扇 帆

階段箒筥ふいに飛びだす

乾坤をわたる尺八花月夜

酔ひ覚めてなほ曲水の夢
ニオ山笑ふ山羊は手紙を食べてゐる
シジミ蝶てふ愛らしき友
少年の想ひ疾走倍速に
「勝手にしやがれ」スイスでの自死
その貌のまざまざありし浮いてこい
夏大根の辛味強かり
気の弱り六部の辿る行者道
海坂藩の町割図書く
ダ・ヴィンチの遠隔オペを支援して
コード読めずに迷宮に入る
月細く地酒積み出す舟の笛
木桶に放つ魚籠の鯖鮎
ニウ沈下橋水澄む川を分けて黄泉
あなむざんやな案山子すてられ
羞ひの緋き腕のふるへしを
スケボー野郎颯爽と行く
短夜と気流上昇してふたり
一角獣の乗ってくる虹
湧水の在処に小石ゆらゆらと
ボコ・ア・ポコと指揮棒の先
亀歩む千里の道もたゆみなく
三日月型の兜国宝

西田荷

舟 夢 晴 扇 京 猫 良 夕 紀 柚 夕 舟 夢 柚 紀 舟 晴 良 紗 柚 京 猫 晴

花婿は化学^{ばけ}花嫁物理学
 イグノーベルを目差す卒論
 ナオ清明の酒ははんなり伏見酒
 青柳捌く姑の柳刃
 片乳を失くした聖母像を見し
 ヘジャブのゆゑに死せる少女は
 岸壁より慟哭として水が噴く
 黒く白くと太るペンギン
 冬ばらを茶花としたり門跡寺
 愛しき君とわれは裸木
 筒井筒いつしか尉と姥となり
 箒持たせて世の塵を掃き
 待宵のともづなに鳩連なれる
 寸法直して残菊の宴
 ナウ円楽は憎まれ役よ色葉散る
 太祇たのしく島原に住む
 集へるはうたびと言霊さきはふや
 新入園児結んで開いて
 撫で牛の肌艶めきて花の雨
 白魚を汲む透明を掬む

紀 柚 夕 扇 夢 良 晴 猫 京 舟 晴 良 猫 奈 舟 柚 夕 扇 晴 紀

令和四年九月十五日首
令和四年十月二十日尾

（於・高円寺中央会議室）

歌仙 『志士の像』

薩摩路や時雨に濡るる志士の像
飛翔を終へし鶴憩ふ里
歌がるた譲れぬ札を氣に留めて
読めぬ未来に歴史重ねん
億万のあなたの月の浮かぶ杯
駅長独り袖に草の実
ッノラ猫に鎌振り翳すいほむしり
ポツケに入れる平和用意し
思ふのに口動かさぬじれつたさ
急接近は草野球から
くじ引きも恋の出逢ひも強き運
渋滞の中届くデリバリ
だれやめに甘諸焼酎をぐいと飲み
静けき月に大暑忘るる
故郷の訛耳にし安堵して
ワシントンより至る絵葉書
花の席箏三面の奏でられ
塩瀬の帯の柄はやどかり

梅村光明捌

中嶋祐子
梅村光明
松下みゆき
村瀬 悟
田代洋里子
前田 豊
大西朝子
日高うんま
藤崎眞理子
吉永千賀子
光 明
祐 子
みゆき
豊
洋里子
うんま
朝 子

ナオ春風に額髪まかせ観覧車
逆境なれどブレぬ軸足
人質の竹千代いつか將軍に
虚実皮膜の間目差さん
打ち揃ひおでん囲めばほぐれゆく
物価高騰白息吐息
純愛は作家シラノの鼻の由
前世の約と胸にすがりて
先立たれしよぼくれ果てる夫たち
マイクロプラの被害深刻
変はるもの変はらぬものを映す月
秋彼岸会は親族居並び
ナウ落鰻捌く手際に手を合はせ
難問奇問解きしホームズ
颯爽とキックボードが駆け抜ける
架空索道山の上まで
罷り越す鞍馬天狗に花吹雪
子らの見る沖喜見城顯つ

千賀子
眞理子
祐 子
光 明
みゆき
豊
洋里子
朝 子
うんま
眞理子
千賀子
光 明
祐 子
みゆき
豊
洋里子

歌仙『大洲の鵜飼』

珍しき伊予の大洲の鵜飼かな
床涼みする舞妓連中
スケジュール直ちに知らせるラインにて
離乳食にも流行る缶詰
摩天楼背比べするや月昇る
独居慰め鉦叩き鳴く
ッ同期会酌み交わしたる新走り
ご無沙汰詫びる絵手紙が来て
改めて思ひは深しセピア色
愛の巢求め秘境ブータン
抱き寄せて僕で良いかと聞いてみる
路面電車の近づける音
月冴えて共同温泉賑えり
ハウス栽培冬苳採る
米寿には曾孫玄孫のロンドの輪
家族の歴史嘘かまことか
三年も花見の宴の遠ざかり
卒業式か羽織袴で

小松知二
橋本直樹
柏元章

種川とみ子
河田水尾
森本幹子
北川稔

ナオ
遍路へと友と語らい旅支度
編隊組んでオスプレイ飛ぶ
どこかも廢墟となりてウクライナ
常夜灯下猫に餌遣り
持たせたる麦茶に汐をひとつまみ
幼馴染と夜店冷やか
今朝の髪彼の好みと褒められて
心ならずも道ならぬ恋
懐かしきモンパルナスの洒落たカフェ
若きアーチストあちらこちらに
堅琴を月に奏でる楽師いて
きのこ狩りには鈴を忘れず
ナウ子も親も楽しくはしゃぐ万鬼祭
町の飲み屋で暮敵に会い
勇ましき西部劇見て憂さ晴らし
牧水の碑に暖かき雨
バスを待つ列に花びら何処より
骨董市へ春の散策

令和四年七月二十二日首
令和四年九月 一日尾
(於・横浜
藤が丘地区センター)
ウ九句目以降は文音

章水と直稔幹水と直知章稔幹水と直知章

《横浜・桂の会―その二》

二十韻 『遠き旅』

吉田酔山師追悼

鳥のごと落花を抜けて遠き旅
尺八の音に春を惜しみぬ
千の風亀の看経唱和して
飛行機雲の消えていく空
暑^ウき日のようやく暮れて月仰ぐ
揃いの浴衣畳む嬉しさ
タンゴなら彼のリードに身を任せ
思い出深し君の生き方
酔い醒めて山の音聞く俳諧師
傍線赤し推敲の跡

橋本直樹捌

吉田酔山
橋本直樹
種川とみ子
小松知二
河田水尾
森本幹子
北川稔
柏元章
と直

後輩^{ナオ}と寄せ鍋つつき故郷話
俄かの嵐枯葉舞い散る
神の手に委ねた紅き糸手繰り
夫の打ちし新蕎麦が好き
月見てはあの時この時懐かしく
露時雨して猫も蓑着る
在^{ナウ}りし日の紋付き袴凜として
連句の普及に努力惜しまず
亡き人とすれ違いたる朧の夜
風船高く遙か彼方へ

知水幹稔 章直と 知水稔

令和四年九月 六日首
令和四年九月二十八日尾
(文音)

附勝歌仙 『新春に』

小川廣男捌

新春にこの旨酒を飲み干さむ

懸蓬葉の床に由由しく

ただいまの声元氣よく孫の来て

ご隠居さんは囲碁に熱中

月明りコンビニ弁当買出しに

右へ左へ揺れる穂芒

明日の旅風の盆へといざなはれ

ベッドの上でメイクばつちり

まだ若い卒寿すぎたるお姉ちやま

たまには猫にキツイお仕置

甘やかす家人尻目にかける錠

子の空部屋に月は汗かき

笛の音の余韻かすかに祭あと

にぎはひ消えて残る虚しさ

故里の無人の駅に降り立ちて

田圃に映る白馬の山

花過ぎの日日は仕事に追われつつ

お昼時です蜆汁でも

磯直道

永見徳代

渡辺ハツエ

〃

田村昌江

〃

〃

〃

大内善一

昌江

ハツエ

善一

ハツエ

〃

昌江

善一

ハツエ

昌江

ナオ GOTOの街で買ひ物春休み

鳥居の横の目印の店

待ち合せ時刻がせまりどきどきし

彼は氣短いつもバツキン

母となり女房徐々に強くなり

静けさ破る寒雷の音

道端に吹かれるままの枯芙蓉

過疎の集落人影のなく

床板は油煙で黒く光りをり

原稿用紙風に吹かれつ

澄みきりし中天高く後の月

虫の音すだく病室の窓

ナウ 最近の氣候變動身に入みて

防災グッズ常に点検

定年の後は安寧願ひつつ

お玉杓子の池をにぎはし

実朝の花はしだれて地を払い

遠く霞めるおだやかな馬場

昌江

〃

昌江

ハツエ

ハツエ

〃

〃

昌江

〃

昌江

ハツエ

〃

〃

〃

善一

ハツエ

〃

昌江

令和四年 四月十七日首
令和四年十二月十八日尾

(於・川口総合文化センター「リリア」会議室)

《松山・草笛連句会》

半歌仙 『入 彼岸』

升田佐栄子捌

御手洗に会釈交はして入彼岸	升田佐栄子
地表かすめてついとつばくろ	名本敦子
知らぬ間に山みな木の芽吹き上げて	平井繁樹
保育園児の泣く子笑ふ子	山岡良春
月光に透かしてみせる赤ワイン	高木幸恵
セールのチラシ秋風に舞ふ	杉前いと子
ッ ふるさとと変はらぬ声につづれさせ	敦子
逢ひたき人はすでに人妻	佐栄子
禁断の恋なればなほ燃えあがり	良春
着飾る服は表裏さかさま	繁樹
噓してピカソもどきの崩れやう	いと子
ひろがつてゆく反戦の渦	幸恵
大鳴門うねる波間の月涼し	佐栄子
虫養ひにちよいと葛切	敦子
爺さまの旅の話はまだ続き	いと子
座敷わらしも雛の輪のなか	繁樹
花満ちてふはりふはりと飛行船	幸恵
路上ライブのうらかな午後	良春

令和四年三月十七日首
令和四年四月十六日尾
(文音)

歌仙 『北山の尾根』

春浅し北山の尾根くろぐろと
淡き濃き香の満つる梅苑
大掃除由緒書きなる文書出て
明治の御代は県令の家
満月に少し近づくと肩車
酸漿の笛ぼつぼつと鳴る
ゆるやかに落鮒移る藻の茂み
唐崎に降る小雨やさしく
母君の手解き受ける盆手前
銘果「赤福」喉に悶へる
枯華微笑見合ひ写真に捕はれて
畏れ多くて床入りはまだ
蚊帳越しの画質の荒き庭景色
飛石の果て一条の滝
夏の月かすめて鳥の影走る
女殺陣師の光る切つ先
花明り場末に掛かる絵看板
ドローン去りて蛙ふたたび

井尻荷葉捌

井尻荷葉

吉村あかり

出来千苑

冬日庵訥平

長谷川陶子

井尻夏子

竹内千代女

荷葉

あかり

千苑

訥平

陶子

夏子

荷葉

千代女

あかり

千苑

訥平

ナオ 春泥に軍靴の跡の夥し

まだ迷子とは気付かぬ童
チンドンの浮かれ太鼓に連れられて

通天閣にビリケン参り

三年目板に付きたるマスク顔

大煤竹を僧はうち振る

都をばのつしのつしと弁慶が

妻恋ふ文の筆の流麗

今回も正室残し江戸を発つ

朝な夕なに煙る塩の屋

小波の月の欠片を掬はばや

人魚の歌を運ぶ初潮

ナウ うたた寝の夢は長篇秋うらら

草原列車ひたに加速す

4Kの「日本紀行」で観る昭和

オセロの角を白で押さへて

平和祈願踏花畏み祝詞あぐ

淡雪舞ひて風に溶けゆく

陶子

夏子

千代女

荷葉

あかり

千苑

訥平

陶子

夏子

千代女

あかり

荷葉

千苑

千代女

陶子

あかり

訥平

夏子

令和四年二月二十日首
令和四年七月 三日尾 (文音)

《狛江・狛連さざなみ会》

歌仙 『春耕や』

林 転石捌

春耕や武州の土の黒々と

昼は膨らむ菜の花の丘

弥生尽挨拶の声弾みいて

ドッゲランにも新しき顔

月の夜に村の定めと髪洗う

カメラずらりと狙うかわせみ

夏芝にボール遊びの親子連れ

宿題わすれて泣きべそをかく

岸田さん物価対策赤信号

ワインは止めてサワー今宵は

はちきんに頭上がらぬいごっそう

恋愛履歴ウソもまことも

暮早し半分残るガラス拭き

月を眺めてぼんぼこ狸

つい浮かれサンバのステップ踏んでみた

浅草六区に客の戻りて

誰れもかも美しく見ゆ花簪

蛭烏賊とは龍宮の使者

岡本康子

小林節子

橋本みほこ

荻野祥三

小西 恵

上田邦枝

武田章子

邦

祥

祥

康

節

章

み

康

祥

邦

節

ナオ 八十路すぎ曲水の筆なかなか

D J ポリスさばく人流

ミルクティー暖めて待つ夜勤明け

電車の音に心うきうき

駆落ちの果ては地図なく迷い道

砂文字二つ消してゆく波

はるかなる宇宙に人も住めるとは

バツハの調べ古酒は盃

十三夜懐かしき声ふと耳に

窓辺に揺れる紫式部

露けしや石山寺の朝まだき

多国籍語のやまびこおかし

ナウ 古里はハイジの村にほど近く

パスタくつつく人こいし夜

ランニング準備体操してみたが

電話の誘い芝居見物

ポトマック畔花と振袖艶競い

前にうしろに蝶のたわむれ

恵

康

章

み

祥

節

恵

祥

康

み

康

恵

祥

節

章

邦

康

節

令和四年四月十三日首
令和五年三月 八日尾

(於・調布たづくり)

《豊田・ころも連句会―その二》

二十韻 『電車旅』

初花や一合に酔ふ電車旅
霞たなびく山の夕暮
孕馬若き獣医の急ぎ来て
尻ポケットへしまふ携帯
ッ
シーグラス拾ひ集める乙女たち
美男葛の紅の鮮やか
月眺め広きベッドに独り寝す
モルドバからの便り待つ秋
流血に染まつた土の重たくて
破れ衣の僧のまなざし

小野芳梅捌
おのほうばい

小野芳梅
伊藤良重
徳永あき子
石川葵
あ
深津明子
坪井まちこ
重
葵

ナオ
何たつて介護の質は金次第
恨み辛みも入れて闇鍋
学生ナオの論文指導まなならず
烏騒いで小満の月
恋に生き浮世楽しく業平忌
夫婦岩見て誓ひたる夢
ナウ
新調の化粧回しの誇らしく
椅子にちよこんとムーミンのパパ
梅八分スケッチブック取り出して
蝶々ひらひら飴を売る店

明 梅 ま 葵 重 あ 梅 重 明

令和四年三月二十二日首尾

(於・豊田市福祉センター)

《豊田・ころも連句会―その二》

二十韻 『緑児の』

深津明子捌

野遊びや緑児の足おぼつか
白詰草で編んだ王冠
春シヨール自動改札すり抜けて
着信音の調べ柔らかに
窓際に誰を待つやら月円か
ひとときわ目立つ彼は跳人に
不意を打ち林檎片手にキスをする
老舗の味を残す街道
校庭にドクターヘリの砂煙
仲裁案提げ使者の降り立つ

平羽州
稲垣渥子
板倉合子
深津明子
渥合
羽合
明合

城跡の石垣覆う蔦若葉
根本中堂消えぬ法灯
多言語のパンフレットを貰い受け
マトリョーシカの並ぶ本棚
月冴ゆる戀を語らう声のして
熱燗を酌む弟子と師匠と
ナウ金継ぎの筋くつきりと猫茶碗
夢かうつつか蝶々ひらひら
明日にも海峡越える花前線
春の光は里にあまねし

羽合
明合
渥羽
明渥
渥合
羽合

令和四年四月二十六日首尾

(於・豊田市福祉センター)

歌仙『梅林の』

吉田醉山捌

吉田
醉
山

五郎丸照子

澁谷盛興

木村ふ
う

高岡風蘭

小泉
桂

武井敦子

武井敦

ふ 興 照 山 敦 桂 蘭 ふ 興 照 山 子

外人見れば急に緊張
石畳尖塔の鐘がえわたる
坂の垣根に咲ける寒木瓜
潔く紙いち枚で夫捨てん
老いて初めて味が出た妻
板前の腕が自慢の小さき宿
世界への夢作文に書く
月上る太平洋をしたたらせ
くの字くの字で渡りゆく雁
ナウ地芝居の招きチンドン街を練り
ラジオ体操元氣はつらつ
ヴァイオリン弾く銅像はアマデウス
紙飛行機を飛ばす兄弟
花の門高き偏差値くぐり抜け
碁盤を囲むうらかな昼

筆ふ桂蘭敦興照桂敦山蘭ふ興照山敦桂蘭

— 84 —

《さいたま・さくら草連句会―その二》

歌仙 『羊皮紙の』

羊皮紙の文字躍り出す目借時
暈の上で眠る猫の仔
クレソンの香りも共に摘み取りて
シヤッターチャンス狙ふ撮り鉄
向う岸遠会釈する月皎と
秋狂言の幟はためく
破顔あり松茸飯と今年酒
異国の衆も揃ふ手拍子
あの女将口は悪いが気ツ風よし
あやめも知らぬ恋のときめき
隠沼に一声残し瑠璃鶴
月と遊ぶは帰省せし孫
ともだちのともだちは皆友達で
御朱印求め西へ東へ
ウクライナ負けてなるかとビッグボス
老兵死なずそれが口癖
惑星の宙の青さよ花満つる
ヴィオラ奏でるうらかな午後

澁谷盛興捌

澁谷盛

吉田醉

本屋良

半田有

城山九

興山子杜天興山良杜九興山良杜九興山良

ナオバンカーにまた捕まつて山笑ふ
孵化した稚魚の目玉可愛く
親子連れ賑はふ児童絵画展
巣鴨の店は赤パンツ売り
秀吉の悪趣味ひとの妻を問ひ
涙に暮れる閨もあるとか
氷山の痛い半島肩を寄せ
蒟蒻玉につける寒味噌
血糖値高くお仕置き入院に
にはかに晴れし東の空
眠らない街を隈なく望の月
虫の音乗せて流す笹舟
招客の三々五々と風炉名残
ナウ囲碁に将棋にあどけなきプロ
幸運も降つて来いよと神頼み
頭にざうり化ける練習
名城の天守に花の冠着せ
いのちの限り陽春の夢

杜九興山良杜九興山良杜九興山良杜九興

令和四年四月二十日首
令和四年五月十八日尾

(於・日本連句協会リモート連句室利用)

歌仙『辛夷咲く』

岡村糸子捌

赤星敬子

岡村
耿

小野里子

荀 星 糸 里 耿 荀 星 糸 里 耿 荀 星 糸 子

奥平大生
嶋田ゆう子

杉山俊

星俊里耿ゆ大糸星子里大ゆ星糸里耿子生

令和四年三月十一日首
令和四年四月三日尾

(於・岡村宅及び文音)

三十六韻 『ミサ始／マツチ擦る』

神父まず裏技を説くミサ始
髯の中から飛び出した舌
時計塔へブライ文字はさかしまで
赤銅色の満月と逢う
うねったりくねったりして芒原
初鮭担ぐ猫の宅配

松井真吾
松澤龍一
野村路子
日下部敦世
瀧村小奈生
海老原雅

アマゾンで男黙って媚薬買う
ぼくに自撮りを送る校長
ボスが来る緑のジャガー操って
小春日和に事故の予感が
一息に護符流し込む寒の水
鯉のあぶくに鯉は包まれ
虹だけをモノクロにすることもたち
月光荘のコバルトブルー
裏通り黒いベレーが並んでた
踊り子を待つクリスマスイヴ
なつかしき人の声する花の奥
きな粉に埋もる草餅の苞

龍吾生雅路世吾龍
龍吾生雅路世吾龍
龍吾生雅路世吾龍
龍吾生雅路世吾龍

マツチ擦るつかの間海に霧深し
波止場の果てに座る月光
長兄は流れるようにピアノ弾き
柱の下に埋まる心臓
窓開けておやつ知らせる鳩時計
ほんのり甘い雪の結晶

寺山修司

さざなみを両隣から渡される
箸の袋で鶴を折りだす
〈おとおり〉のグラスを受ける手の震え
おばあの皺がおかえりと言う
スリッパと僕の来世を交換し
胸元飾る金のスカラベ
月照らす横顔だけの肖像画
隠れた頬にキスをしようか
ファントムが現る闇の静まりて
ゆらりふうわり墓石を抜け
昏れなずむつづらの坂に飛花落花
春の光とくぐる長縄

(進行役) 松澤龍一

吾龍生雅路世吾龍
吾龍生雅路世吾龍
吾龍生雅路世吾龍
吾龍生雅路世吾龍

令和四年十一月 五日首
令和五年 二月十九日尾 (文音)

米 字 『少 年 期』

少年期空を見上げて泳ぎけり
歌が歌追うキャンプファイアー
裏山の洞穴キョンが棲みついて
カメラ構えて好機待つ日々
竹林を抜けて真つ赤な橋渡る
人気甘味屋ネット検索
米寿会今宵の月に雲もなし
後の 裕の 似 合ふ 輩
御揃いの衣装作ってハロウィーン
移動教室小さく手を振る
街コンの自己紹介で大見栄を
そのひと言が恋の始まり
忍び逢ふ血の繋がりのない姉と
本心 見せぬ 盤 若の 面
床暖に腹ばひで読むミステリー
猫の尻尾を照らす凍て月
雑草と呼ばれし草も名はありて
入社式では社是を三唱

本屋良子
松澤龍一
鈴木すず
赤坂恒子
諸藤留美子
土屋日菜
安楽明郎
速藤尹希子
大塚智子
奥野美友紀
朝倉一湖
静 寿美子
丹下 誓
大山とし子
沖津秀美
竹崎利野
菜 野
ず

初花の溜め込む力限りなく
蟻穴を出るラッキーナ今日
ニオ 遍路路で出遭う昔の基敵に
潮騒浴びた春日傘開け
砂浜に書いてはなぞる下思い
Gパン裂いて見せる太腿
利根川原音なくよぎるグライダー
てるてる坊主軒に並んで
あんちゃんに負けたくない駄々をこね
糞 長 金 魚 上 位 入 賞
門扉開け「薔薇をどうぞ」の誘い文字
チロルハットに鳥の羽根つけ
望の月貧乏作家の部屋覗く
反故に埋もれて集く蟋蟀
ニウ ヤンキーが忘れ団扇で風を入れ
パーティーション越しの組織改革
不可思議なボーカロイドの声のして
女王 様 の 鞭 に 恍 惚
パドックのサラブレッドの尻に惚れ
絵描き目指した道が消え去り
噴水の真水が濡らす影法師
大正ガラスにゆがむ夏月
微燠にてアルバトロスを達成す

良 龍 留 恒 郎 尹 智 紀 湖 寿 誓 と 秀 野 柚 良 龍 ず 恒 留 菜 郎

森の妖精拍手喝采
 花片の付いた鼻先子の寝顔
 黄金週間どこも行列
^三二人乗りぶらんこあまり漕がないで
 急発進のフェアレディZ
 ルージュ濃くバックミラーに引き直し
 握りしめた手強く引き寄せ
 路地奥の縁切り神社夜に紛れ
 サッカー勝ちて裏返る声
 古日記ひとつきごとに変わる夢
 とくに探偵ときに盗つ人
 母思う阿漕平治の碑を訪ね
 秘湯の宿で旅の終わりを
 海峡に影を映して渡る月
 並木道にも猿の腰掛け
^三いつもより少々早起き秋の朝
 女性まじえてかこむ麻雀
 勝負事私苦手と甘える娘
 元カレの名のタトゥー隠して
 お惣菜タイムセールを待って買い
 ゴーグル掛けた縄文土偶
 参道のがらくた市に「だっこちゃん」
 蘊蓄語る立ち飲みのお客様

尹智紀湖寿誓と秀野柚良龍ず恒留菜郎尹智紀湖寿誓

ブラボーと叫ぶ選手の映像に
 月の驪場に逃げる飯蛸
 迷宮の出口にありし花の門
 蝶々吐き出す神明の獅子
^ナ豊漁に浜の賑わい白子干
 伊根の舟屋に夕日射しこみ
 憧れの一眼レフで試し撮り
 和服着こなす所作美しく
 倒れこむスイートルーム獣めき
 覚えある肌再びの恋
 青嵐妻アフリカへ発つという
 離れ小島に騒ぐ海猫
 ワイヤレス骨伝導で届く音
 ロケット部品作る工場
 冬の月目薬さして滲ませる
 きしきしと哭く雪吊りの縄
^ナ素封家の蔵に真筆見出され
 旅はやっぱ奥の細道
 虚無僧の怪しき姿二人連れ
 ウクライナへとそっと訪問
 妖精の踊るパ・ド・ドウ涙して
 ゆらりゆらり初蝶の飛ぶ
 蒼天の天守閣より花吹雪

國司正

と秀野柚良龍ず恒留菜郎尹智紀湖寿誓と秀野柚良夫

春の
コ
ー
ト
で
団
子
坂
下

渡
辺
憲
和

令和四年七月 十一日首
令和五年三月二十一日尾 (文音)

(留書)「米字」という八十八韻の長尺物をやってみた。連衆の中には米寿の方も何人かいらっしゃる。元氣な米寿の猪と米字を巻いた。
(龍一)

《岐阜・獅子門―その二》

遺吟脇起
短歌行

『獅子門支考忌追善俳諧』

大野鶴士捌

春風や障子の日影燃ながら

支考

早も軒端に来たるつばくろ

大野鶴士

椿餅青き器を選びゐて

奥山ゆい

きりりと結ぶ前掛の紐

藤塚旦子

ッ月今宵老舗を継げる八代目

名和よちゑ

御稻荷さんの庭に虫の音

高木節子

川を越え堤を越えて草の絮

柴田恭雨

初恋実る例ありとは

藤井大和

横笛の舞妓の帯のたをやかに

大竹花永

産寧坂に雨小止みなく

原えつ子

一本の花の辺りに人集り

宮本光野

甘茶をかける子らは背伸びを

片桐栄子

ニオ 大空を虎の風船泳ぎたる

服部瑞華

エレベーターは上へ下へと

恭雨

愛の巢は二LDK角の部屋

五島青沙

君が好みの泡のバスタブ

衣斐佐和子

こんがりと潮焼けの肌火照りつつ

森美翠

休憩所にて湿布薬貼り

川井功子

艶やかな颯が過る月の道

矢橋初美

戦始まるニュース伝はる

松尾ひろし

名ヲ 囲みたる山高からず低からず

よちゑ

ふるさとに住むたらちねの母

光野

方寸の百里四方の花の雲

鶴士

蜜の豊かに垂るる蜂の巢

執筆

右短歌行

令和四年三月二十七日首尾

(於・岐阜ハートフルスクエアEAG和室研修室)

《岐阜・獅子門―その二》

遺吟脇起
歌仙

『獅子門翁忌追善俳諧』

大野鶴士捌

かくれけり師走の海のかいつぶり

翁

初雪 近き 八景の山

大野鶴士

ハイウェー風より速く駆けて来て

宮本光野

コーヒーショップ賑はへる声

服部瑞華

手の届きさうなる月のみづみづし

名和よちゑ

棚にいくつも下がる瓢箪

大竹花永

白秋を彩る鯉のとりどりに

光野

今は懐かし田中角栄

光野

口説くには大風呂敷も大切に

柴田恭雨

電光板に君が恋しい

光野

再会を祈る戦火の只中に

片桐栄子

尖塔に鳴る鐘の厳か

高木節子

噴水の水七色に月照らす

花永

散歩の子犬飼主の先

瑞華

帰りにはいつも立ち寄る惣菜屋

衣斐佐和子

昔話に和むひととき

栄子

花吹雪新幹線は北を指し

光野

震災の傷癒えぬ春愁

鶴士

耕せば命生まるる土の中

三輪洋路

過去も未来も陽炎の奥

恭雨

ブルータスお前の像は塵かぶる

光野

実は林檎を食べぬニユートン

佐和子

鈴虫は月の静かの海が好き

瑞華

星の雫は袖の露かも

光野

忘れむと思へどなほも忘れ得ず

光野

小指の傷は今日は瘡蓋

瑞華

六人が鍋をまあるく取り囲み

よちゑ

畑一面霜柱立つ

佐和子

地藏さん毛糸の帽子よく似合ひ

節子

介護施設の母を待つ父

瑞華

名鏡台に真珠のロングネックレス

花永

シャワーを浴びる音の聞こゆる

松尾ひろし

みちのくのこけしが棚にぎつしりと

藤井大和

五平餅には旨さうなたれ

よちゑ

集ひたる三百年の花の下

鶴士

長閑かなる日に天女舞ひ立つ

執筆

右歌仙行

令和四年十二月四日首尾

(於・大津市義仲寺無名庵)

《岐阜・獅子門友楽社》

遺吟脇起
歌仙行一折

『翁忌追善俳諧』

宮本光野捌

冬の日や馬上に氷る影法師 翁

松の古さの残る凍道 宮本光野

山幾重カメラを担ぎ遠出して 柴田恭雨

口に含めるミルクキャンデー 原えつ子

月一輪水面きらきら銀に染め 矢橋初美

色鳥渡る野辺は紫 恭雨

教会の窓に秋冷明らかに えつ子

バリアフリーのロビー円形 初美

注文の珈琲配る京美人 恭雨

三半規管きゅんとする恋 大野鶴士

千号の記念式典盛大に 初美

相撲甚句の届け天まで 鶴士

夏月は雲と遊べる空を持ち 恭雨

戦の国は地下を住み家に 光野

繕へる着物の裾に墨の跡 えつ子

幽かに匂ふ母の面影 初美

爛漫の花に心の雲もなし 鶴士

木の葉を透かす光うららか 執筆

令和四年十二月十二日首尾

（於・大垣市赤坂港会館）

《岐阜・獅子門藜杖社》

遺吟脇起
歌仙

『翁忌追善俳諧』

瀬尾千草捌

翁

寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき
入江 近くに集ふ水鳥
爪弾けるギターの調べ聞こえて
ミルク珈琲自販機に買ふ
月皓と高層ビルのもつと上
こんなところに木の実転がる
万鬼祭とんがり帽の小さき魔女
見知らぬ村の敷石の道
すれ違ふ瞬間視線絡み合ふ
ナルシシストの美少年なり
初恋は宝石箱に眠らする
樟の若葉の香りほのかに
白ビール似合ひさうなる宵の月
心に描くモルディヴの島
ちらしにて紙飛行機を次々と
口遊みある同じメロディー
玻璃窓に吹き込んでくる花の風
ソファアの上に春のスカーフ

瀬尾千草 伊藤弥生 渡辺靖子 武山瑠子 後藤朱乃 千草 弥生 理子 靖子 瑠子 千草 靖子 瑠子 弥生 瑠子 弥生 靖子 弥生 靖子

茶を喫し八十八夜過ごしけり
免許返上やつと決心
雨上がりに街に活気の戻りたる
地域猫には餌の当番
我が妻は紅など差していそいそと
程よく焦げる夫の焼餅
開園のジブリパークへ行こまいか
変はり易きは冬の天候
産土の絵馬に停戦祈る文字
キッチンカーに人の集まる
後月に望遠レンズ構へむと
空耳かもね螻蛄の鳴く声
名^{ナウ}滲みたる母の墨絵に秋惜しむ
午後の廊下に日差し穏やか
タイツ穿きヨガのレッスンオンライン
キムタク来るの話題持ち切り
山城を担ぐごとくに花の雲
ゆらめき止まぬ糸遊を追ふ

瑠子 靖子 千草 弥生 朱乃 瑠子 弥生 瑠子 弥生 朱乃 千草 弥生 靖子 朱乃 千草 執筆

令和四年十一月十八日首尾

(於・岐阜鑄物会館)

《岐阜・獅子門麗水社》

遺吟脇起
歌仙

『翁忌追善俳諧』

名和よちゑ捌

炉開や左官老行鬢の霜

翁

名和よちゑ

見え隠れして綿虫の舞ふ

澤井国造

古池は鳥の声にも漣て

松野孝子

一眼レフを旅の鞆に

北浦典子

叢雲を流して月の留まりぬ

衣斐佐和子

美術の秋に目指す二科展

赤塚つねみ

ッ境内に燃えんばかりの彼岸花

和田勝子

スマホが頼り肌身離さず

五島青沙

恋人はアプリで探すマツチング

渡辺やちよ

別れ話はいとも簡単

孝子

シャッターにスプレーで書く鷗の絵

国造

キッチンカーのピザが評判

佐和子

ギター弾く若者二人夏の月

典子

花火終はれば道は賑やか

よちゑ

肩組んで歌ふ親子の千鳥足

勝子

ジャンゲルジムに帽子置かれて

つねみ

竜に乗り花びら届く天守へと

やちよ

ナオ草餅を重箱に詰め母来る

今からねだる忘れ形見を

新聞にロシアミャンマーウクライナ

献花に並ぶ絶えぬ行列

軋みゆく路面電車に雪しきり

おでんみそ味ちくわ蒟蒻

野良犬の淋しさうなる後ろ影

眼鏡外せば童顔の君

身のこなし老舗旅館の御曹司

駆け落ちの文帯にかくして

満月にジキルハイドの裏表

古刹の松に秋の風抜け

ナウ雁渡る後に遅るる一羽二羽

セロを抱きて弓の撓やか

いつの日かウイーンに行く日夢にみて

ベビーカーには双子ぐつすり

花に酔ひ酒に酔うては壽

やまなみ遙か止まぬ囀り

国造

青沙

やちよ

つねみ

孝子

勝子

典子

よちゑ

勝子

国造

佐和子

青沙

佐和子

やちよ

孝子

つねみ

よちゑ

執筆青沙

令和四年十一月二十日首尾

(於・大垣市総合福祉会館)

《東京・下町連句会》

半歌仙 『雄飛の翅あり』

衆議判

十五夜にうさぎを探す子らの声
きのうも今日もあては枝豆
雁の列遠く見ながら窓拭いて
将棋の棋譜をひとり並べる
三味線の音に誘われて路地の奥
風の匂いは梅雨の前触れ
水馬^{ウマ}に雄飛の翅あり雲を蹴る
出世払いと又もせびられ
恋多きクイーン年貢の納め時
螺旋が語る私のルーツ
信じてカルトの闇のどこまでも
ベーブルースを超えた大谷
朽^く野^のに魑魅魍魎^{ちみりやう}がたむろする
犬の遠吠え皓と寒月
眉太き医師の見立ても異常なく
大草原をナナハンが行く
散る花に過ぎゆきし日々重ねつつ
霞棚引く高層の街

鈴木すず
安楽明郎
竹田金糸雀
櫻田野老
鈴木ちかひ
高山英子
明郎
すず
野老
金糸雀
英子
ちかひ
すず
明郎
大内善一
白石一有
斎藤東砂
小田みみこ

令和四年九月十四日首
令和四年九月二十九日尾

(於・亀戸梅屋敷(二部文音))

歌仙 『村 二 つ』

妙島秋男捌

村二つ沈めてダムの紅葉燃ゆ

妙島秋男

山の彼方に昇る弦月

三木祐子

新蕎麦をリズム良く切る音のして

子野村知

碁盤を前に頭垂れつつ

子西岡礼

縁側の座布団の上猫丸く

祐子

柚子で華やぐ街の銭湯

秋祐

ッ消炭で悪戯書きをあちこちに

礼

首相辞めろとデモの行進

知

共白髪のらりくらりと添ひ遂げて

秋祐

元のカレシのデータ消しかね

祐

ひと文字を秘かに入れし子供の名

知

葉末に揺れるとうすみ蜻蛉

礼

月涼し馬に任せてふるさとへ

秋祐

土産の品は宅配便で

祐

俳優の熱ほとばしる紅テント

礼

ポケットの中各種のど館

知

線路脇特急通過花ふぶき

祐

ドローン悠々霞の空を

秋祐

ナオ磯遊び夢中になりて服も濡れ

レコード盤にそつと置く針

神前に供へる菓子 of 堆く

校長談話睡魔蔓延る

もふもふの羊の群れに癒されて

庭の隅では雪だるま溶け

大隠は市中に住み糟湯酒

抽選会で当てたマンション

突然の人事異動で海外へ

解くに解けない指切りの指

月見船橋くぐる度キス求め

畑に高々小鳥網張る

ナウ鮭焼く間杉下右京ぶつぶつと

雨の銀座にタクシーの列

早朝にサムライブルー大騒ぎ

まだ醒めぬうち夢の続きを

初花を見つけて嬉し通学路

風やはらかに頬撫でてゆく

祐 秋 祐 知 秋 祐 知 秋 祐 知 秋 祐 知 秋 祐 知 秋 祐 知 祐

令和四年十一月六日首
令和四年十二月四日尾

(於・西宮市市民交流センター)

エモイチヨベリバナウなヤングで
傾けし応援団の団旗にて
職場の上司実は後輩
織月に鳴き声だけの鳥が行く
故郷偲びしみる秋風
ナツ野の錦ジュラ紀の化石鑑定に
ストレッツチして背骨まつすぐ
スターへの階段のぼる元子役
おひとり様の老後また良し
レトロ趣味レコードさらに売り出して
スマホ決済すんでうららか
花万朶勅使出航せし港
首ふり歩く鳩に陽炎

令和四年一月四日首尾
(於・鎌倉生涯学習センター玉縄分室)

二十韻 『万歩かな』

永田吉文捌

夏めきて体調戻る万歩かな
目に新緑のここちよき朝
吊り棚に青磁の香炉置かれいて
厨に響く包丁の音
猛練習若者達を月照らす
秋嶺仰ぎじつと待つ君
科白決め新酒を干してプロポーズ
タワマン狙い宝籤買う
成金と蔑まれても勝ち勝ちは勝ち
兎が聞きわける五種類の鳥

永田吉文
小林静司
山本ゆう
秋山よう子
白井暎子
松田ぼくる
鈴木善春
るゆ
司

寒菊の手入れみごとに女人寺
月に凍れる放生の池
医薬品紛争の地へ運びゆく
別れの涙命惜しみて
車椅子押して押されて老夫婦
恋文の東シユレッダーへと
鑑識は虫めがね持ち大がかり
海釣り公園風のやわらか
半島は一面花に満ちて艶
憲法記念祝う催し

るう吉暎春う暎司春

令和四年五月二十九日首尾

(於・玉縄学習センター分室)

《北海道・白老連句を楽しむ会》

ストリート連句 in ミナパ祭

虹多き町（非懷紙二十二韻）——白老尽し

白老^{しろおい}は虹多き町ユカラ聞く
雨の散歩の傘は露の葉
青絹の風は渦巻模様して
夕星^{ゆうすづ}見詰め思うミチ、ハポ
弟と騒ぎ眠らぬ稚児の宵
春の終りの朝日まぶしく
輝けるポロトの杜に息吹あり
子鹿親鹿草をついばみ
秋味を狙う動物浣刺と
濁酒酌むささくれた指
十五夜の水面に映り道のごと
栗原シエフの旨しパエリア
ステージは歌やダンスで盛上がり
天岩戸の幕開く時
冬の山煙と雪を装いに
裸木めぐりリスの戯れ
初夢はアヨロの海にたそがれん
羽根突き競い顔に墨塗る

梅村光明
田村きく
半澤孝平
田村弘子
竹浦真
二瓶千尋
降矢和好
藤澤久美子
藤澤昌幸
大西朝子
須貝^の析愛^あ
岩崎良子
畠山尚久
杉中^{ゆう}呼
中谷通恵
吉原芳美
須貝夢乃
きく

ごちやまぜの文化が集う大切さ
ミナパの庭に遊ぶ猫の仔
花の笑^{えみ}イヤイレイケレ広がる輪
蛇の飛ぶ音^ねを月は愛^{いと}しむ

小田島一典
岩井真里子
田村直美
中嶋祐子

注*ユカラ「叙事詩」、*ミチハポ「父母」、*ポロト「大きい沼」、
*アヨロの海「白老町虎杖浜にあるアヨロ海岸」、*ミナパ「笑
いの満ちる」、*イヤイレイケレ「心から感謝を」

二〇二二年五月十五日首尾

捌き*梅村 光明

二十韻 『散歩道』

水野森雄捌

夕月や落ち葉ひらひら散歩道
パチンと弾く腕の哀れ蚊
秋の宿山海の幸楽しみて
家族の会話時を忘れる
果樹園に薄陽差し込む雨上がり
ほつぺの赤いおぼこ無邪気で
在りし日の君の面影ケアハウス
いつもの香りあの頃のまま
悠々と番いの丹頂舞い降りて
初御籤引く母はご機嫌

水野森雄
山口綾子
勝又丘女
森雄
綾子
丘女
森雄
綾子
丘女
森雄

ナオ 早朝にノラ・ジョーンズを聴きながら
ス ポー ツ 界も 記 録 更 新
百歳が九十万人越えたとか
雪 溪 眩し君は 愛 お し
祭の夜寄りそうふたり夏の霜
ひれ酒が好き食通の友
ナウ 喧嘩して仲直りして鍋つつき
腰 掛 け 椅子に風の柔らか
花の下亀のんびりと甲羅干し
瑞々しきは春の大根

綾子
丘女
森雄
綾子
丘女
森雄
綾子
丘女
森雄
綾子

令和四年九月十八日首尾

(於・裾野市立東西公民館)

二十韻 『生絹のごとく』

土屋日菜捌

爽やかに生絹のごとく雲流れ
東の空に昇る玉輪
庭先にごろり転がる南瓜手に
華やぐ中で時を忘れて
泡となる身と知りつつも恋一途
君に似合いのダイヤモンドを
叱られて障子に隠る我が子かな
境港に鬼太郎が住み
晩涼の三つ先まで青信号
眼前迫る尾根に雷鳥

宮原うた子
土屋日菜
井上輝夫
窪田浩晃
日菜
輝夫
浩晃
日菜
うた子
浩晃

ナオ新記録名球会に名乗り上げ
クールジャパンはアニメ・日本酒
懸想文出すか出さぬかポスト前
誕生日には揃ひの襟巻
月凍つる家路を急ぐ鳥居脇
赤いランプの終バスに乗る
ナウ秋田犬幼子に径ゆづらるる
大空高くシャボン玉舞ふ
河岸に香りも載せて花筏
ミツバチ育つビルの屋上

輝夫
日菜
浩晃
輝夫
日菜
うた子
浩晃
輝夫
日菜

令和四年九月十八日首尾

（於・裾野市立東西公民館）

《白河・宗祇白河連句会》

二十韻 『春光や』

田畑豆男捌

春光や切株に浮く杉の脂

高さを競ふ風船の色

卒業の吾子は異国の夢を見て

柑橘類の香りただよふ

雪合羽月まだ残る糶市場

灯り落として寒紅を濃く

よく見れば口まで裂けた狐顔

郷土力士の優勝に湧く

空を飛ぶ車の未来目前に

地球の裏の止まぬドンパチ

田畑豆男
久保田直

佐藤和子

豆男

和子

豆男

豆男

和子

和子

和子

ナオ職退きて地酒の冷酒酌み交はし

お化け屋敷の闇に抱きつく

勝算はありとネクタイさつと抜き

あれよあれよと魂棚の前

名月を映して湖の波静か

夕霧の立つ猫の抜け道

ナウ病名は残念ながら加齢です

銭湯に浮く常連の首

一輪の胴咲き桜花明り

まどろみの中鶯の声

豆男直

北川信弘

和子

和子

信弘

信弘

信弘

和子

和子

令和四年三月二十六日首
令和四年四月二十三日尾

(於・白河市中央公民館)

脇起歌仙 『ふじのゆき』

一尾根はしぐるる雲かふじのゆき
掛大根の軒に問ふ声
自動ドア閉ぢる間際にとび出して
豆鉄砲を喰つた目ん玉
月明にいのち騒めく潮溜溜
紅葉楓の色づいた道
今年酒名は菊姫と申します
天狗のやうな男伊達にて
柴犬は妻が実家に連れ帰り
許しもしない非難もしない
次の世は鮫鰐に生れ吊るさるる
生ハム原木自宅配送
月の下静かに開く月見草
経正公の琵琶ぞ涼しき
琥珀石半睡に旅人を待つ
自肅肅清肅が気になる
白鳩の散る羽根花にうちまじり
にらいかないを目差しゆく海胆

村松定史捌

翁

村松定史

朝倉一湖

西川菜帆

岡部瑞枝

四ッ谷 龍

浅岡照夫

山地春眠子

吉岡三智子

工藤 繭

川野蓼艸

三智子

一湖

照夫 龍

一湖

菜 龍

帆

ナオ 春の風邪ひいてピエロは宙返り
P K 戦に身の縮む夜
鉈彫の御仏拝む列に付く
垣根の下に古ぶ鉄瓶
あらたまの兎の知恵の使ひやう
打つよ家計簿松の内から
若き日のこひびと朝の夢に來て
にじむ想ひを水彩の青
城下町二十七曲り鍵曲り
緊急地震速報用回転灯
茶を淹れて居待の部屋の広きこと
梢の柿の落ちず皺みて
ナウ 蜻蛉と唐子ら遊ぶ羽織裏
押すな押すなの誓文払
茫々と指動かしてゐる近代
圧力鍋を霾天の午后
邑ひとつすつぽり花に包まれし
野のうららかに軽き足どり

瑞枝

照夫

一湖

瑞枝

三智子

瑞枝

一湖

瑞枝

三智子

瑞枝

三智子

瑞枝

三智子

瑞枝

三智子

瑞枝

一定

一湖

令和四年十二月 十日首 (於・東京文化会館)
令和五年 一月二十一日尾

(於・文京シビックセンター)

《福井・武生連句の会―その二》

歌仙 『初紅葉』

車座の話はづむや初紅葉
月に影踏み遊ぶ母と子
秋の野を銀輪ペダル軽やかに
通勤前のウインナーコーヒー
音楽の留学募る掲示板
入道雲の高く沸き立つ
竿下ろし里なる河へ回鮎
同窓会にあこがれの君
お揃ひの時計は今も時刻む
日経読めど見えぬ先行き
お百度に挑む媼の大叔
道頓堀の寄席も盛況
目を見張る天地明るき冬の月
北窓塞ぎ当夜独酌
ちやぶ台に置かれし成績票を取る
新入社員延ばす営業
花一樹会釈で過ぎぬ地藏仏
隅田を上るレガッタの争

水上潤子捌

三木蓮糸
水上潤子
岡田有峰
前田高宏
潤子
蓮糸
有峰
高宏
蓮糸
潤子
有峰
高宏
蓮糸
潤子
有峰
高宏
蓮糸
潤子

ナオ
投了の碁敵の声の長閑なり
畳に立たす包帯の巻
内科・外科・眼科に皮膚科けふはどこ
よやりひやりと横たはる猫
夕蟬に渋滞の列きりもなく
富士詣みな白衣装束
鉄斎の羊腸萬折浮かびきて
死んでもいいわもつと強くよ
デュエットの演歌のサビに見詰め合ふ
成人に夢古稀にまた夢
幔幕の色際立たせ月出づる
地芝居狂ひ今日もうきうき
ナウ
芋煮鍋河原に並べ一服す
飛び入り参加旅行者の居て
悠然と空舞ふ鳶の声高く
歴史に残る聡き姫皇女
花の庭ありて決めたる新住居
陽炎の下明日へ踏み出す

有峰
高宏
潤子
蓮糸
高宏
有峰
蓮糸
潤子
有峰
高宏
蓮糸
有峰
潤子
高宏
蓮糸
有峰

令和三年 十月三日首
令和三年十一月一日尾 (文音)

《福井・武生連句の会―その二》

歌仙『燭灯し』

燭灯し舞始まりぬ冬座敷
壺に挿さるる白き山茶花
撮り鉄の汽車の通過を待ちわびて
豪華外食ほくそ笑む娘ら
月出でて歓声消えし遊園地
虫の音繁き帰途の路地隅
ハロウィーン婀娜めく魔女となる準備
宅急便で送る口紅
周り無視腕組む二人大股で
シャンパンタワーあやふくも立ち
影ふみの帰りは怖い通りやんせ
読書専念疫病対策
真かところも魅入る夏の月
誘ひ合はせて薪能へと
街道へ姉と弟曲がり来て
杖の急き行く十番札所
明日のため脚を揉みたる花の宿
ニュージージラントの羊の毛刈る

清水季扇捌

清水季扇

白崎ひろ子

久野天神

水上潤子

岡田有峰

潤子

ひろ子

有峰

前田高宏

季扇

潤子

季扇

高宏

潤子

有峰

天神

ナオ 挨拶はオレンジひとつ投げよこし

こちらの列島変よそこかしこ

巷騒がす I T の波

閉ぢ籠り歌留多楽しむ家族どち

火事だ火事だと触れ回る声

久方のフランスからの子の便り

運命の糸やり直し婚

念願の思ひ果たせる数寄屋橋

お地藏さんの顔のにこやか

編集者急かす原稿居待月

曼珠沙華咲く道に迷ひて

ナウ 新蕎麦の看板探し突き止めぬ

赤提灯の尽きぬ政談

正面に柱時計の鎮まりて

台形のごと母の人生

宮参り嬰に着せたる花衣

空まで届け飛ばす風船

高宏

潤子

天神

潤子

季扇

潤子

高宏

潤子

季扇

有峰

高宏

季扇

潤子

高宏

有峰

執筆

永田なるみ

令和三年十月二十七日首
令和四年二月二十六日尾

(於・越前市生涯学習センター)

《東京・遅刻坂連句会―その二》

小野酔陶さん追悼

歌仙 『春 眠 を』

春眠を猫と競へる余生かな
青磁の壺にいけし山藤
清明の学び舎の坂足早に
謂はれを刻む碑を読む
さざ波をいざ出航と月の海
焼きもろこしの鼻をくすぐり
色葉散るわれも昔はギャンブラー
手練手管はどつちもどつち
オーロラを見にいきませうと誘ひだし
だうする気なのそんな酔はせて
鷗飛ぶ潮の満ち干の渦となり
一句ひねるにパイプくゆらし
鎌の月風にさぞ寒からう
燕すゝしろ庭の菜園
うつすらと埃の被る神棚に
LEDの電球長持ち
友と行く北の丸には花満開
亀鳴く午後の警察学校

大久保風子捌

小野酔陶

谷口螺々子

仲本お池

田中安芸

螺々子

半田有杜

今富千辺

久保田朴

上原百々

小林喜一

石田耕庵

池喜辺芸耕朴杜庵

ナオ麗かに乾されて数多柔道着

為替変動予想裏切る

宗磨の「異端に徹す」に惚れ込んで

章法極め筆は揺るがず

ハンカチの花天空を招きをり

夏の光とフィヨルドの旅

ぶらぶらと骨董街に辿り着き

笑みを浮かべし薄き唇

年の差を抱き溶かさんか恋の果

思ふがまゝに紫の君

たましひは雲のあなたに月澄みて

松茸ご飯別腹に入り

ナウ秋深しひとり旅する大和古寺

選挙ポスター風に吹かるゝ

「ふるさと」を老いも若きも声合はせ

一休みには飴と焙じ茶

花惜しむ文机にある謹呈書

彼の岸此の岸風やはらかに

大久保風

青柳祥

武井蛙

沼田睦

睦蛙祥杜辺耕喜百朴芸池螺子女風子杜辺

令和四年五月二十五日首
令和四年七月 十二日尾

（於・リモート&文音）

歌仙『旅人の』

旅人の置いていきたる残暑かな
がらんどうなる部屋に蛸
岩肌に碎ける波よ月出でて
板一枚の橋を渡り来
指先にチョンと乗せられやじろべえ
おでんの匂い立ち込める路地
今年こそ流行の柄のセータで
メールアドレスついに聞き出し
話せども通じないそは異星から
知らぬところで進む縁談
戦況は目まぐるしくも果てしなく
迷子の犬は主探して
熱中症たらい回しの救急車
風の隙間に羅の月
高野山雨降りしきる多宝塔
グーグルマップいつも頼りに
リモートのふるさと自慢花自慢
畑を耕す影のおちこち

半田有杜捌
半田有杜
青柳祥風
高井辛六
田中安芸
今富千辺
久保田朴
小林喜一
大久保風子
谷口螺々子
仲本お池
石田耕庵
お池
喜一
安芸
田朴
螺々子
風子
有杜

ナオ
ドボルザーク遠くなりゆく目借時
コーヒーブレイクミルクたっぷり
新幹線とぎれとぎれに西へ延び
若い祈りの十字架の町
砂山に肩寄せて見る寒昂
嫉妬に溶けてしまう雪鬼
言い訳の多い漢と縁を切り
テレビが煽る世論分断
友垣と互いの喜寿に乾杯を
お医者の子約またも忘れて
月高く里の稲穂の黄金色
屋台しずしず行く秋祭
ナウ
こだわりの火加減は良し秋刀魚焼く
テーマパークへ急ぐ子どもら
延長で勝負決まらずPK戦
夢の中まで続く草原
花吹雪哲学の道埋め尽くし
霞たなびくハイデルベルク

喜一
耕庵
田朴
安芸
螺々子
風子
武井蛙女
喜一
田朴
有杜
千辺
螺々子
安芸
蛙女
風子
田朴
喜一
上原百々

令和四年八月二十四日首
令和四年九月二十八日尾

(リモート&九段生涯学習館)

《東京・遅刻坂連句会―その三》

歌仙 『復元を』

復元を待てる城跡秋あかね
飛行機雲のかたえ昼月
球根を植える親子は楽しげに
アツプリケにはバケツシャベルの
学び舎の清き歌声流れ来て
齒にしみ渡る氷金時
花マロニエ三年ぶりのパリの街
後姿がちよつと気になり
さそり座にチクと刺されて囚われて
ベッドサイドで揺れるキャンドル
風吹けば風吹くままの無人駅
五百羅漢に粉雪の舞う
天井を清めて静か嫁が君
ふるさと偲ぶ母の前垂れ
頭から足先までの診察券
畳の上で死ぬる幸せ
朧月ノンアルコールの花の宴
殿様がえる庭にひよっこり

仲本お池捌

仲本お池

塙於玉

谷口螺々子

田中安芸

半田有杜

大久保風子

武井蛙女

石田耕庵

小林喜一

久保田朴

安芸

耕庵

有杜

お池

有杜

田朴

上原百々

お池

ナ分水嶺春の水音聞かざるや

区画整理は若手に託す

街中をレンタサイクル列をなし

防犯カメラショーウィンドーに

原色の水着のマネキンまぶしくて

抱きしめられて闇にくちなわ

禁足となりし週末忍び込み

ギガテラヨタにナノピコヨクト*

わが孫は英検二級四年生

一見さんには売らぬクッキー

聖堂の白きクルスに望の月

広き沃野を鳥渡り行く

ナウ新酒にはうまい肴と友がいて

世界遺産の並ぶ島々

細密画ムソルグスキー聴きながら

宅配便で届く公魚

ドローン飛ぶ吉野の山に花万本

予定表には書かずのどらか

※ギガは10の9乗、テラは10の12乗、ヨタは10の24乗、

ナノは10の19乗、ピコは10の11乗、

ヨクトは10の124乗

令和四年 十月二十六日首
令和四年十一月二十二日尾

(於・九段生涯学習館&リモート)

於玉 喜一 耕庵 安芸 田朴 安芸 お池 百々 喜一 百々 蛙女 螺々子 耕庵 田朴 風子 蛙女 喜一 安芸

二十韻 『炎 昼 や』の巻

田中安芸捌

炎昼や大地を齧るブルドーザー
したたる汗の祈る復興
黙々と砲丸練習校庭に
店は行列メンチコロツケ
庭の影深めて今宵月煌々
新走りとて口移しとは
閨怨の遠白波の音くぐもる
誰の気配か風の枝折戸
反戦の故郷遠く身寄りなく
アイロンいらぬこのカーキ色

谷口螺々子
大久保風子
今富千辺
上原百々
武井蛙女
半田有杜
井田瑞亭
石田耕庵
小林喜一
仲本お池

山眠る仁王の睨む古寺の門
月の広野を月輪熊よ
刺青を纏う娘は胸を張り
追いかけられる鬼となりしか
儂くも一夜限りと知りつつも
音程少しはずれそうなる
谷間をしぶき燦めく長良川
かげろうゆるる空へバルーン
花浄土如何におわすか父母義父母
若草色の八十八夜

久保田田朴
瑞亭
蛙女
田中安芸
有杜
千辺
田朴
喜一
風子
百々

令和四年六月二十二日首尾

(於・九段生涯学習館)

《東京・中央連句会》

脇起歌仙 『雲に鳥』

鈴木美奈子捌

芭蕉翁

鈴木美奈子

服部秋扇

谷内 令

この秋は何で年寄る雲に鳥
紅葉且つ散る道に緋月
風炉名残亭主の席は不動にて
雄渾な筆残す家計簿

白石一有

短日のIT嘶は素通りし

立ち飲み珈琲ちよつと休止符

浜口泰子

まぼろしの呪縛に吸はれ夢うつつ

たましひ奪ふしなやかな唇
濃き鬚の漢危ふき橋渡る

呼べば罅の返り来るよな

民意てふ測り難きをグラフにす

特号 活字躍る新聞

月涼し女王陛下のカレーパン

馬場に溢れるファッションの風

花ふぶき英雄伝説いま盛ん

若鮎跳ねて鯉となる堰

ナヲ 囀はクレッシェンドに建長寺

将軍実朝海へ憧れ

厚い帆布素材にしたるバッグ展

麻の葉模様憶ひ出の色

いいのよとシングルママになつてやる

並べて立てる朝の歯ブラシ

惜しみつゝ雪見障子を後にして

纏を肩に火消装束

プーチンに刺客放つてやりたいな

ウォッカ・テキーラ・マオタイ・バーボン

月蝕は終り満月また拝む

和音と聴くは木の実降る音

ナウ 段々畑山田の添水罅して

泰山鳴動ミミズ一匹

強さうで大阪なおみ何故勝てぬ

茹でたマカロニ掬ふラケット

花鎮め若殿ばらは傾き者

春の名残に舞をひとさし

執

筆 奈 扇 泰 令 有 泰 扇 奈 令 有 泰 扇 奈 令 有 泰 扇

令和四年十一月十五日首尾

(於・京橋区民館)

歌仙 『四条どんつき』

椎咲くや四条どんつき東山
下ろしたてなる名入り白靴
温暖化はた熱帯化五月はや
波板の屋根傷み激しく
方丈もそれなりに良し望くだり
糸瓜の水は一升瓶に
畑守らん野猪に荒らされ絞る知恵
峠に見える蒸気機関車
ただひとり降りしは彼女駆け出しぬ
両手ひろげてひと抱き止め
砲撃のやみたる広場聖母像
とんびはぴーひよろ常のごとくに
鬼やらひ振り捨てたきは多々あれど
先づよろこぶは内定の報
初任地は竹富島の診療所
赭い瓦が心なだめる
昼月がべらりと花の枝先に
バスを待つ間に開ける草餅

高岡風蘭捌

北原春屏

小林ジュン

岡本利英

長谷川陶子

井原弦

井尻荷葉

高岡風蘭

丸山景子

出来千苑

廣瀬松石

春屏

ジュン

景子

荷葉

春屏

利英

赤木和子

ナオ 陽炎のスクランブルを渡る人

余命告げられ命かがやく

一座づつ百名山に挑みたき

列島地図にたちたちとなる

海霧の来たる最果て未知の町

バーベキューならサムギョプサルで

かりかりに脂抜けてる方が好き

水揚げせしは檀家総代

炭太祇遊女の懸想代筆し

嘘八百で億ションひとつ

見定めん暈けたる月の精いづこ

ナウ わが認知度に爽やかな風

柚味喰舐めちびちびと飲む病み自慢

無双窓べで老猫あくび

ラバイを唄ふやさしいママの居て

片手で長閑メロディーを弾く

海道にぼんぼりのごと花ともる

今日もふらりと春蟬の丘

風蘭弦

千苑

ジュン

松石

荷葉

陶子

利英

和子

春屏

景子

千苑

松石

ジュン

風蘭

陶子

和子

令和四年五月七日首と六月十一日は於三木半
ウ11から文音で同年九月十八日尾

歌仙 『鳶の芽吹き』

鵜飼桜千子捌

一幹に縋りし鳶の芽吹きかな
早ひるがへる二羽の燕
競漕の母校応援土手降りて
硬貨を握りお使ひの子等
今日の月巨石の影は動かざる
洋梨の香のリビングに充ち
部下の来て棚から降ろす濁り酒
町会長は百戸東ねむ
湯上りの髪を遊ばす優姿
最優先はいつだつて君
子の刻に儀式のごとく帯を解く
運慶彫りし小さき仏像
冬波に柱状節理色深め
闇のバイトに月の凍えむ
ロボットの道案内を聞き損ね
年老いて世に疎き生活
樹木医の見上ぐる余花のさやかなる
蟻の列には先頭の無し

東海林さくら
林 茂 夫
越尾董 絲
小田みみこ
朝倉一 湖
長船園 子
得丸一 夢
川崎穹 子
さくら
鵜飼桜千子
聖成美智子
一 夢
茂 夫
美智子
さくら
園 子
一 湖

ナオ 名も知らぬ地への旅立ち見送らむ
巨大重機の展示販売
漱石と引力の本片隅に
初心者向けの詰め将棋解く
明日の空どうなりますかと靴に訊き
金製を得て吉の鸞替
管と弦あひし呼吸のこち好く
書類あれこれ配偶者ビザ
還らざる叔父の遺骨は海溝に
サイの角なる短剣を吊る
獏に夢齧られたまま月を待ち
餅にたつぷり枝豆の餡
ナウ すさまじき模試の数字にため息し
大臣の座は三か月だけ
病み抜けて古城を巡る自転車に
富士のはみ出すカメラフレアム
様々な幸を集めて花盛り
乗込鯛の届く夕暮

安楽明 郎
董 絲
一 夢
穹 子
みみこ
明 郎
一 湖
桜千子
明 郎
茂 夫
董 絲
美智子
みみこ
穹 子
さくら
園 子
桜千子
一 湖

令和四年二月 三日首
令和四年二月二十日尾

(於・北とぴあ&文音)

歌仙 『産土の水』

産土の水たうたうと法師蟬
白桔梗の凜とひと本
月見んとコンコース出る足早に
観光ガイドやたら忙しく
培った技術生かして家具修理
そつと拭ひし吾子の玉汗
初なすび漬かり具合がほどよくて
この絹の靴明日のダンスに
待ちぼうけさせたお詫びはロゼワイン
蔵に眠りし家紋入り膳
保護猫はいつのまにやらあるじ顔
母の大島普段着とする
廃鉱のお化け煙突月冴えて
サツカーファンの増えるこの頃
親しさに裏木戸開けて来る友
活断層の上に住みをり
コンサート沸きて総立ち花の園
飛ばしあひするジェット風船

密田妖子捌

高見よ志子
密田妖子
北野真知子
藤江紫虹
加納俊子
永多澄枝
多田史代
山本比佐子
村上町子
よ志子
妖子
真知子
紫虹
俊子
澄枝
史代
町子
比佐子

春ナオの空雲の兄弟ゆつくりと
沃野と変わる古戦場跡
眉つばの噂は千里先までも
猊に食はれし外遊の夢
回転寿司あつという間に皿の山
冷蔵庫には西瓜どつかり
脱サラの百姓暮らし板につく
歳の差二十睦まじき仲
禁断の道戻れずになほ燃えて
コバルトブルー湛へ火口湖
夕弥撒へ月を背にして集ひ来る
町中走る猪に逢ふ
ナウ陶房の軒に柿干す伊賀の郷
雨あがり待ち地質調査へ
パーサーの叔父より届くエメール
館玉探る深きポケット
女優笑み撮影すすむ花の寺
風は麗らか流す友禅

よ志子
妖子
真知子
紫虹
俊子
澄枝
史代
町子
比佐子
よ志子
妖子
真知子
紫虹
俊子
澄枝
史代
町子
比佐子

令和四年十一月一日首
令和四年十二月十日尾（文音）

《赤穂・つばさ連句会》

歌仙 『吉右衛門丈へ』

賀状書くこの一枚は播磨屋へ
まねきに無き名偲ぶ顔見世
注目の的は婿殿立派にて
にぎはひ戻る界限もまた
引窓を引けば良夜となる館
掛け合ひのごと鳴きとほす虫
神苑の色変へぬ松亭々と
遠会釈する謎めける人
夢のやう吸ひ寄せられる恋心
この場に及ぶ愛想づかしを
今はただ悲劇の浜の波静か
蕎麦処には伊達な役者絵
彼方より囃子聞こゆる夕涼み
鵲が窺ふ月遅き里
DVDやはり別格武蔵坊
嬉しくもあり哀しさの増し
みちのくに貴種流離譚花街道
笠をかくせる霞ゆかしき

八尾 暁吉女
東條 士郎
橘 文子
宇野 恭子
士郎
暁吉女
恭子
文子
暁吉女
士郎
文子
恭子
士郎
暁吉女
恭子
士郎
暁吉女
恭子
文子
士郎

ナオ 役宅の庭へ仔猫の顔を出す
配下科人つつむ温情
銀紙で作った指輪のプロポーズ
スケッチ帖とロマンスの旅
さびしさも孫の仕草で救はれる
広き居室に厚き絨毯
蹲踞に音をとちこめ氷面鏡
フイレんツエ風のステッキが欲し
海外を巡る公演順調に
趣向を凝らし色紙毛筆
下戸なれど月見酒とて洒落ようか
紅葉の錦秀でたる山
ナウ 天空をしの字くの字に雁渡る
しかと受け継ぐ入魂の舞
緞帳の奥へ合掌余韻の輪
白玉楼に春興の宴
花吹雪散り果つるまで美しく
香り彩り弥生弁当

恭子
文子
士郎
暁吉女
恭子
文子
士郎
暁吉女
恭子
文子
士郎
暁吉女
恭子
文子
士郎
暁吉女
恭子
文子
士郎

令和四年十一月 十日首
令和四年十二月二十八日尾 (文音)

会員歳旦三つ物

ふと耳朶に懐かしき声 去年今年
ことしも愛に満つる正月
早々と楽しいプランのどらかに

杉山 壽子

初御空兔のごとくピョンと跳ね
五体満足 芳春の候
やっとかめ友の手を取り喜びて

長谷川 芳子

ふるさとの山河かがよお元日
初便りには恙なしやと
はらからの団居うれしき夢を見て

中森美保子

一病に負けぬと誓ふ去年今年
産土神に受くる破魔弓
春の丘孫と兎と遊びゐて

古賀 幹子

自分へのエールと思ひ初日記
健やかなれと屠蘇の一服
奈良公園馬酔木の花の満開に

島田 裕子

八千汐の感謝に染めて去年今年
種蒔く兎はねる初夢
らいねんの花を友との約束に

宮川 尚子

初茜陽の昇りきてあらたまる
跳躍せむと木彫りの兎
歌留多とる晴れ着のうから集ひ来て

中西 静子

初晴れや伊吹御岳相寄りて
のろき兎も跳ねる正月
しがらみもコロナも忘れ春の野に

八雲 鏡湖

波多野茂子

初芝居 狂言小唄 朗々と
太郎次郎と暖める酒
賑やかに宝恵駕籠橋を渡るらん

寺田重雄

神宮でまだまだ続く初懷紙
兎柄の盃友と酌む屠蘇
富士の山紅梅越しにゆらめきて

高橋すなを

あいさつの清々しきや福沸
稽古始の背すじ真つ直ぐ
こころざし春の光にあたためて

回文 二十韻 『湿^{しめ}地^じ飯^{めし}』

島田裕子捌

島田裕子

杉山壽子

中森美保子

長谷川芳子

寺田重雄

中西靜子

外科の家妻しばし待つ塀の影
ゲカノイヘツマシバシマツヘイノカゲ

波多野茂子

手利きで川にはか敵来て
テキキテカハニニハカテキキテ

八雲鏡湖

白靴がもろとも泥もかつ黒し
シロクツカモロトモトロモカツクロシ

宮川尚子

山椒魚は奥羽余震さ
サンシヨウウオハオウウヨシンサ

高橋すなを

崩れ出す山山や巢垂れ木菟
クズレダスマヤマヤマヤスタレズク

壽

噛む噛む薬リスクむかむか
カムカムクスリリスクムカムカ

裕

大胆にデートで遠出忍耐だ
ダイタンニデートデートニンタイダ

雄

雪降る汝と吾後なる不朽
ユキフルナトアアトナルフキユ

茂

今朝の酒南を皆見袈裟の裂け
ケサノサケミナミヲミナミケサノサケ
恋しているよ夜い出し行こ
コイシテイルヨヨルイテシイコ

二郎の木啄木鳥突つき木の洞に
ニロウノキキツツキツツキキノウロニ

この子歌うま間歌うこの子
コノコウタウママウタウコノコ

気付き宵良き清い良き月
キツキヨイヨキキヨイヨキツキ

しめじ飯たいたよ炊いたしめじめし
シメジメシタイタヨタイタシメジメシ

冬の月トロトロトロと木津の夕

古賀幹

子

フユノツキトロトロトロトキツノユフ

ろしや国鬼氣聞き来小社

尚

ロシヤコクキキキクコヤシロ

余技信太サルサのサルサ樂しきよ

保

ヨキシノタサルサノサルサタノシキヨ

端の陽炎広きかの田は

鏡

ハタノカキロヒヒロキカノタハ

飛花落下頭も日ハナハハ鬢買ひ

裕

ヒカラツカアタマモマタアカツラカヒ

そいつは鳴き洲好きな初磯

壽

ソイツハナキススキナハツイソ

歌仙 『乾 杯』

高橋すなを捌

乾杯のワインうれしや去年今年
初風受けてらりるれろらろ
畑打の背骨一本立ちをりて
厨の隅に潮を吹く貝
昼月に笑はれてゐるめかり時
舞台の上で進むお芝居
自^ウ転車の鼻歌なんとベートーベン
運命的な出会ひあるのか
生徒会わたし会长君は書記
水着の彼女眩しすぎるよ
CMの撮影終はりぬぐふ汗
旅の土産に虎の置物
竹林の小径に月の降りそそぐ
秋の夜話洩れる引き窓
ハロウィーン魔法使ひはおてんばさん
形いろいろクッキーを焼く
散る花のふりはりふはり漂ひて
認知の父と触る、綿雪

長谷川芳子
宮川尚子
杉山壽子
八雲鏡湖
中森美保子
寺田重雄
波多野茂子
島田裕子
中西静子
古賀幹子
高橋すなを
芳子
尚子
壽子
鏡湖
美保子
重雄
茂子

ナウ新聞の切り抜き増える太子の忌
数の論理は不安かきたて
宇宙へと人類の夢果てしなく
ひねもすのたり浸るコミック
ラグビーのタックルに見るど根性
水柱も溶かす情の圧力
有難う有難うのみふんだんに
高嶺に至り男置き去り
伸びずれば身うち広がる解放感
独り籠つてホラー三昧
戸隠に神おはします望の月
文化の日には掲ぐ勲章
ナウ大画面うねる絵画の爽やかに
歴史伝へる遠き故郷
楽しいきは自給自足の暮らし向き
鷺の声あかず聴き入る
海に向かう友は生きてる花の雲
春の匂ひのやはらかな雨

裕子
静子
幹子
すなを
芳子
尚子
壽子
鏡湖
美保子
重雄
茂子
裕子
壽子
芳子
美保子
幹子
静子
執筆

令和三年十二月十五日首
令和四年三月八日尾
(於・芸術創造センター及び文音)

《東京・東京かびれーその一》

歌仙 『山眠る』

佐々木リサ捌

限りなき力を秘めて山眠る

大竹多可志
佐々木リサ

空の青さに舞ふ蒼鷹

早田維紀子
大山とし子

新調のドレスに軀華やぎて

後藤はるよ
奥野泰子

丹精の月へ御供物籠に盛り

子等が夢中に秋の野遊

豊年の祭り太鼓に誘はれ

ラストダンスは君と決めたよ

二人乗るリフトに並ぶ嬉しさに

大事大事と手捻りの壺

脳トレの新聞を読みメモを取り

旅へ行かうかイスタンブール

軽やかなチターの調べ避暑の宿

川の露天湯照らす夏月

捨て惜しむものに埋れて寄る齡

ベストセラーに寝食忘れ

地下鉄を降りて万朶の花明り

甘茶しとどに弥陀の彫像

維り泰はと維り泰はと維り泰はと維り泰はと維り泰はと維り泰はと維り泰はと

ナオ ひつそりと仔猫隠るる路地の奥

美容整形上手くゆかずに

ロボットが料理を運ぶレストラン

今なほ人氣賢治ワールド

炬話の尽きずぼんぼん時計鳴る

狐火見ゆる遠き畦道

道ならぬ恋と知りつつ思ひ詰め

再出発のプラットホーム

年寄りを狙ひ詐欺団また進化

趣味のマジック介護施設で

振り返る仕事帰りの月の窓

故郷を思ひ濁り酒酌む

ナウ ビル風のシャッター通り虫すだく

アロマオイルにゆつたりとして

目交は鷗群れ飛ぶ入江なり

足取り弾み課外授業へ

神宿る天水桶に花枝垂れ

タイムカプセル開けてうららか

ナオ

多維りと泰はと泰維り泰はと維り泰はと

令和四年十一月十五日首
令和五年一月二十七日尾 (文音)

歌仙『燕子』

船宿の窓を飛び交ふ燕の子
 甘草揺らす遠き海鳴り
 大好きな映画鑑賞樂しみに
 ポップコーンは直ぐに売れきれ
 県境のトンネル抜けて月見茶屋
 仲間誘つて利き酒の会
 秋場所に秘めし決意を新たにし
 吉と出るまで恋御籤引く
 あの方もバツイチそれも複雑で
 謡の声のいとも艶やか
 毛並み良き犬傍らに読む文庫
 ワクチン接種微熱が二日
 言い訳のどこか悲しき冬の月
 筑波風に桶も転がり
 顔のシミとれぬ高価な化粧品
 道化がふつと洩らすため息
 花の丘太平洋を眼下にし
 春風に乗せハモニカを吹く

大竹多加志
 大山とし子
 菊池幸恵
 鶴岡育枝
 羽場桂子
 佐々木りサ
 とし子
 幸恵
 育枝
 桂子
 リサ
 とし子
 幸恵
 育枝
 桂子
 リサ
 幸恵
 とし子

手作りの茶摘み総出で懇ろに
微笑み浮かぶ半廻思惟像
彼の国はまたもミサイル発射して
ウイズコロナ期はまだ続きせう
サマードレス優しき風をはらみをり
天道虫を追ひかける子等
青芝の土手に鞆を置き忘れ
交換したいメールアドレス
溢れ出る思ひタンゴの曲に乗せ
新刊本の帯のはらりと
月仰ぐ屋根裏部屋の小公女
啄木鳥叩く幹の響きよ
^{ナオ}
新そばを打てば父さん思ひ出す
宮沢賢治今も慕われ
カタールに熱き闘ひ始まれる
サポーター湧く連続セーブ
大手門くぐり天下の花に逢ふ
ぶらんこに置く一合の酒

令和四年 六月四日首
令和四年十二月十日尾（文意）

桂子 育枝 リサ とし子 幸恵 育枝 リサ とし子 幸恵 育枝 桂子 執筆

《東京・桃天樹吟聚連句会》

和漢行 歌仙 『未開紅』

○印は韻 灰

鵜飼桜千子捌

未開紅窓の余白を香らせむ

平林香織

雨 水 郷 友 来○

芳野禎文

野 婦 沃 土 耕

高橋賢

漁 夫 稚 魚 培○

鵜飼桜千子

月光がピアノの蓋をあけたがり

香織

ロッキングチェア揺れて冷やか

香織

裏 電 網 競 新 酒

香織

みんなあのこを狙つてゐます

香織

仙 女 化 烈 女

香織

愁ひを秘めしまなかひの媚

白石一有

お土産はゾーリンゲンのミニはさみ

香織

九尾の狐アニメージョンに

香織

寒 月 南 軒 視

禎文

粉 雪 北 庭 堆○

香織

消 毒 靴 底 頻

一有

貫主の経の響くあの世よ

香織

大花火怒り迷ひを吹き飛ばし

一有

政 談 坐 露 臺○

桜千子

ナホ

山 雀 群 梢 頭

鈴木千恵子

嘘も歪みてあふれ出るまま

賢

陶 工 銘 窯 変

小田みみこ

覚えていない明け方の夢

千恵子

年賀状懐かしい字にドギマギし

香織

迷ひながらも鍵を受け取る

みみこ

儒 者 説 仁 德

賢

君 主 成 蓄 財○

千恵子

乾パンとベツトボトルとアルファ米

千恵子

潮 波 打 塵 埃○

禎文

親不知子不知ゆけば月さやか

千恵子

闘 蟲 嗽 恢○

香織

鹿 聲 神 苑 渡

禎文

稲 架 田 畝 回○

香織

病 床 作 剪 紙

香織

キックボードで営業に出る

香織

花ふぶきパラボラの立つ家越えて

みみこ

春の茶会に清遊の杓

桜千子

ナウ

令和四年二月八日首
令和四年三月八日尾

(於・京橋区民館)

《東京・稲門連句会「西北の風」》

歌仙 『旅の日や』

旅の日やバックに光る魚の眼
表八句に書きしるす夢
寝ぼけ顔洪の団扇で煽られて
何か始まりそうな雲行き
はらからは後の今宵に集いおり
鳥の渡りを屋形船から
おしゃべりで松茸少し焼きすぎて
むせたくしゃみに大笑いする
「最悪の相性」なんて信じない
なるようにしかならぬ賽の目
現実^ウは韓流ドラマより奇なり
猫の言語を訳す A I
豆腐やのラッパ聞こえぬ路地となり
月を潤ます鰯酒の湯気
扉より洩れる明かりに雪女
ひとつやふたつ秘め事を持ち
ほろ苦い想いを乗せて花筏
親離れする春の鹿の子

松澤龍一
佛測雀羅
渡部春水
山口和生
高山鄭和
鈴木ちかひ
服部明日檜
服部亞以子
高橋千香子
江畑哲男
坂根慶子
赤澤水魚
小田みみこ
西川菜帆
浅岡照夫
渡辺 柚
高橋夜潮
木之下みなみ

ナオ 囀りのベンチの下の忘れ物
路傍の石の吾一少年
文庫本まずは眼鏡を探さねば
台北盆地メガサウナなり
竜宮へ海亀の背にふたり乗り
媒酌人は羅の姫
あなたとはあの世で別の星になる
転生してもうみうしはいや
エプロンにアンパンマンのアップリケ
大団円に満ちて眠る子
風の盆きようは朝まで踊ります
始発のバスによれよれの月
ナウ コロコロと落ちる銀杏ふみ苦る
立たされた後掃除当番
因習の村には不文律ばかり
ハクナマタタ※はまじないことば
コロナ明け花燦燦と咲き誇り
若駒勇み風は西北

桂 右團治
安楽明郎
野村路子
杜青春
雀羅
春水
和生
石上遥夢
親川紫水
宮本良
鄭和
ちかひ
亞以子
明日檜
哲男
千香子
水魚
山地春眠子

令和四年六月 二日首 (文音)
令和四年十月十三日尾

※ハクナマタタスワヒリ語で「心配ないさ」という意味。
(留書)「旅の日」は、「日本旅のペンクラブ」によって提唱
された記念日。松尾芭蕉が奥の細道に旅立った五月十六日(陰
暦元禄二年三月二十七日)にちなみ制定された。(龍一)

《徳島・徳島県連句協会》

蜉蝣 『ボギー気取れば』

梅村光明捌

襟立てるボギー気取れば冬の月
失樂園に眠る白鳥
近未来デジタル社会進歩して

関 真由子
梅村光 明
西條裕 子

一両列車野山コトコト
落人の谷に揺蕩ふ鯉幟
伝家の文を開く短夜

早見敏 子
光 明
真由子

起き抜けは炭焼珈琲味はへる
愛の余韻の残るてのひら
戦場へ向ふあなたに領巾振れば
墓標の石に木の葉散り敷く

敏 子
裕 子
真由子
光 明

顔見世に見物衆の唸りたる
神馬にほろとかかる御降
盃を交し交され花の春
手毬の唄の少し恐ろし

裕 子
敏 子
光 明
真由子

ナオ 楼蘭の美女のミイラに恋をする
妻の嫉妬に成す術のなく
蚊遣火は消えて部屋には三行半
コップの水は原爆忌ゆゑ

敏 子
裕 子
真由子
光 明

平和ボケしたる眼窩に昏きもの
望月赫く詰将棋指す
聞えざるコトバ辿りし秋遍路
企んでゐる毒茸の群

裕 子
敏 子
光 明
真由子

ナウ 海羸ゴマを廻す莫蔭あり古りてをり
悪友僕を口笛で呼び
大漁旗ずらり並んだ船泊

敏 子
裕 子
真由子

亀の看経TUNAMI忘れず
花吹雪く哀しい夢の間へも
蝌蚪の紐伸ぶ不忍池

光 明
裕 子
敏 子

令和四年二月二十三日首
令和四年二月二十六日尾

(於・渭東コミセン及び文音)

歌仙 『揚雲雀』

功刀太郎捌

揚雲雀助手席の窓全開し

柳田 萌

ふいに飛び込む蒲公英の絮

高山鄭 和

お裾分け草餅の餡はみ出して

松本華 与

母の好みの風呂敷の柄

功刀太 郎

工房のつぶやく藍に月明り

秋山よう子

美術の秋へ目指す入選

西川さと恵

夢窓忌に誘われて行く椅子座禅

和 萌

心臓の音する心地して

太 与

うぶ同士言い出しかねてまた吐息

恵 萌

コーヒー二つ並ぶ朝食

う 萌

キャラ弁の蓋開く毎に囁いたて

和 萌

お遊戯会の主役私よ

太 与

白粉を日焼けの顔に塗りたくる

和 萌

夕月透ける納涼川床

太 与

古きもの残る土地なり京の町

和 萌

遠慮しがちに寄付募りくる

太 与

花の雨選抜野球辞退せり

恵 萌

願閉じて春耕の日々

太 与

ナオ 初諸子不漁で足りぬ酒のあて

ふるさと納税届く返礼

悪友が市長に立って愛想よく

長く待ってもならぬ約束

国境を越えて愛の巣ふたりして

鶴の来たる日君は生まれし

毛糸編む丸い背中が語る過去

柱時計がボンと刻うつ

砲撃を生き残り猫餌あさり

抱いた人形髪は乱れて

十三夜はらから集う祖父の家

新酒舐めても下戸は酔眼

ナウ 堤防を群れなし北へ赤蜻蛉

山の古墳の進む発掘

着陸はヘリの埃を浴びながら

駐在さんが自転車を漕ぎ

幼らの鬼ごっこする花の下

書に倦み見やる湾は霞て

令和四年四月七日首尾

(於・ズーム連句)

和 太 恵 萌 和 太 恵 萌 和 太 恵 萌 和 太 恵 萌 和 太 恵 萌

『ゴミ出しの』

高山鄭和捌

ナオ
御所の池並ぶすっぱん甲羅干し
項 あ え か に 探 す 螢
秋山よう子
鈴木善
春
悦びを包むうすもの月に揺れ
唄 の ア ナ は 旧 姓 の ま ま
与
疫病とネットの神の猛る世に
々
国 境 超 え る 難 民 の 群
う
ナウ
補助線を一本引けば解ける幾何
与
春 山 ス キ ー 夜 行 列 車 で
う
故郷に花の便の届くころ
大 開 帳 へ 祖 母 の 付 添
う
萌
う

令和三年十二月十八日首
令和四年 一月二十八日尾

(於・リモート連句及び文音)

歌仙 『靴下の穴』

靴下到大穴あいて年の暮
羽子板市のにわか店員
カナリアの籠を軒端に吊るすらん
シニアグラスを部屋のあちこち
隣人と声かけ合いて月の客
お裾分けにと唐辛子味噌
ッ
甲斐の里葡萄酒醸す頃合いに
デートのために車磨いて
口紅を少し濃いめに颯爽と
問わぬ性別問わぬ国籍
「モッタイナイ」世界に響くキーワード
朝は涼しき高原の町
工房に芭蕉布を織る月明かり
路上ライプの虚無僧の笛
敦盛の若さを惜しむ須磨の浦
記憶もいつかセピアカラーに
子らの輪に楽しげに舞う花の雪
ドッジボールですごくす永き日

鈴木善春捌

鈴木善春

柳田 萌

秋山よう子

松本華 与

西川さと恵

高山鄭

与 和 萌 恵 善 和 恵 与 恵 萌 和 善 恵 萌 和 善 和 善

ナオ
曲げわっぱ菜飯田楽詰め込んで

検 診 結 果 注 意 信 号

愛犬がルンパ恐いと逃げ出した

半導体の足りぬこのごろ

神の留守趣味のちぎり絵存分に

炬燵据えおく六畳の城

眼はうるみ探る手足は絡み合い

双子のパンダ成長の日々

観察のまめさで今や研究者

始めの音で決まる合唱

月射して尖塔数多トスカーナ

帰る燕の喉は血の色

ナウ
地芝居のせりふ忘れも気にせず

道化に徹す鬚の村長

太陽光パネルの覆う山の畑

これが子孫に残す未来か

花の寺古の筆しのびつつ

珈琲の香の揺らぐ春昼

う 萌 与 和 恵 萌 善 与 和 善 萌 善 恵 与 善 恵 萌 善 恵 萌 善

令和四年十二月 十七日首
令和五年 一月二十三日尾

(於・日本連句協会リモート連句室利用)

《豊明・とよあけ連句会》

半歌仙 『寒牡丹』

荒川道子捌

華やぐや床に一幅寒牡丹

荒川道子

暈替えしてすがし新年

加藤真

雀卓をかこみ勝ち越しねらうらん

加藤真

貯金箱には硬貨ずしりと

道真

月に飛ぶ探査ロケット話題にし

道真

栗羊羹をうまく切り分け

道真

ッ
血糖値気になりつつも肥ゆる秋

柴田初

診断書には医師の下手な字

道美

イケメンに心惹かれて通う道

初

となりの席は君の専用

道真

電気代十万かかる猫邸

道真

背なのリュックに青時雨落つ

初

山小屋の夏の月下で時刻表

道真

旅行認可にカタログ多し

道真

赤米の酒をグラスに透かし見て

道真

卒業生は袴スタイル

道真

花霞馬の親仔は寄り添いて

道真

春昼に見る空駆ける夢

初

令和五年三月十八日首尾

(於・豊明市立図書館)

歌仙 『寒』

鴉 (旧かな)

増田 敏捌

友なくば庭にゐてよし寒鴉

東條士郎

日向ほこして薄茶一服

増田 敏

能舞台こけら落としが新聞に

もりともこ

髭の手入れを怠らぬ父

松本奈里子

筆洗ふ鉢に見つける望くだり

谷澤 節

残る暑さにそよと吹く風

金城比呂子

^ウ哀愁を帯びて鳴きたる奈良の鹿

生駒 聰

御影の山を仰ぐしあはせ

山本天球

婚礼の晴着のしつけ糸を抜く

角谷美恵子

否応なしに指輪渡され

三原寿典

収賄の疑惑高まる支店長

木戸ミサ

自由を求め白紙かかげる

上野知子

熱演のグランフェツテに玉の汗

井内温雄

月は涼しく何食はぬ顔

梅谷彌生

町内の噂話は知らんけど

竹山みどり

家事のほとんど夫任せに

斉藤徳子

それぞれの時が過ぎゆく花の窓

小池正博

春野来て子は素足喜び

中田寿子

ナオ カンバスのブローニユの森うらけし

林典子

神が遣はす七色の雲

岡谷 樹

虚しくも夢の余韻は束の間に

嶋田美智子

漆箔の笛いとも艶やか

蒲生智子

菩提寺の屋根は仄かな雪明り

米倉洋子

藁沓履いて上る坂道

羽根郁子

静穏な田舎暮らしに憧れて

敏子

お姫様だっこせがむ新妻

と

愛ゆゑにいつか疑心に負けそうな

里

磁力の狂ふパワースポット

節

名月はスーパームーン昇りそむ

比

紅葉鮎獲る若き舟人

聰

^{ナウ}ましら酒匂ふ窟^{いはや}に惹かれつつ

天

お腹でつぶりシャツはL

美恵子

師に会ふは南洲翁の像の前

寿典

順路標識濁点は消え

ミ

花大樹ひときは目立つ丘陵に

士

銀幕デビューかかる初虹

知

令和四年十二月 三首
令和五年 一月二十五日尾 (文音)

《東京・日台連句》

歌仙 『春聯や』

春聯や疫病み退散成就
烏魚子でや々と黙食
うまいこと老いる不安と折り合って
くるりと回れパラグライダー
初夏の空に溶けゆく昼の月
波打ち際をのそと海亀
火を噴ける山を下り来る巫女二人
壁画裏から会話聞こえる
伊賀者の探る屋敷の忍び逢い
渡鹿野鳥を覗くドロイン
駆け込みも投げ込みもある寺巡り
さざれ石とてやがて巖に
月光をベットボトルの水の内
においもれくる理科室の古酒
運動会遅くてごめんカオルちゃん
地盤看板靴抱えて
栄光の過去を語りがる花よ
巣箱に匿す自分史の稿

松澤龍一 杜青春 安樂明郎 山中たけを 佛測雀羅 木之下みなみ 高山鄭和 坂根慶子 赤澤水魚 龍春郎 羅を 羅み 和男 江畑哲龍

交流は聴不看不媽祖祭り
星より届く弱きシゲナル
三叉路をネコは無頼に右折して
檜造りの阿列山列車
荒川線面影橋の覚えあり
おしくらまんじゅう泣くな笑うな
閉店が決まってからの人の列
うだつ上がらぬ君が愛しく
口紅は控えめにつて言ったのに
レシートだけで財布ばんぱん
平凡な日々の平和を照らす月
紙飛行機で散らす椋鳥
鴨の血も豚の血も良し食の秋
弱き心に神の恵みを
目覚めては同じ頁をはじめから
わらい上戸にいつか泣き癖
花筏己のいのち運ぶのみ
ぐんぐん空へ昇る大風

慶魚龍春郎 羅を 羅み 和 慶魚龍春郎 羅を 羅み 和

令和四年二月 一日首 (文音)
令和四年三月二十五日尾
(留書) 今年の春節、台湾のお正月元旦は二月一日。日台連句はこの日に起首した。(龍一)

《東京・猫の目連句会》

歌仙 『巨人となりて』

静 寿美子捌

氷る滝巨人となりて哄笑す

石川夏山

列をなしたる狩の一行

日比谷虚俊

ロケ現場スタントマンの鮮やかに

静 寿美子

髭を伸ばせば風格もでて

山崎 垂

月照らす盆栽園に走る猫

三輪慶子

女優のごとく酔芙蓉立つ

山 俊

新酒酌む結婚ラッシュユマウ来るか

山 俊

ジャズの流るるカフェで再会

寿 垂

瞬く間恋の病に取り憑かれ

慶 垂

肖像画には美しきまま

慶 山

華やかな都会にもある木賃宿

山 俊

芭蕉の前で矢数俳諧

寿 垂

ひたすらに月の山道富士詣

寿 垂

刀捨てれば腰の涼しく

慶 山

食材は移動販売バス頼み

山 俊

九人寄り添ふ限界集落

慶 山

花片でレジャーシートを埋めんとす

山 俊

巣箱掛け替ふ児童公園

寿 俊

ナオ 春日和百円玉で動く象

自由を求め北欧の旅

ここにあるあなたはどこへいつたのか

白が全然出ないチートイ

セーターを編みてほどこきて時過ごす

値上げの波をかぶる鯛焼

往診に村中廻る若き医師

多くの誘ひ知らぬ振りして

シヨートヘア良いねと君が言つたから

夢も未来も全て託して

摩天楼の影くきやかに今日の月

太きかまきり斧を振りあげ

ナウ 定年も間近に迫り雁渡る

やつと減らせる積ん読の山

階下よりアールグレイの香の微か

誰もをらぬに揺れるふらここ

ひとの世の別れと出会ひ花の門

父祖伝来の棚田耕す

慶 山 垂 寿 俊 山 慶 垂 寿 俊 山 慶 垂 寿 俊 山 慶 垂

令和四年二月 六日首
令和四年二月二十日尾

(於・文京区民センター・文音)

《愛知・ねじまき連句会》

歌仙 『電波時計』

瀧村小奈生捌

秋澄むや電波時計の正確さ
老舗の主刻む新蕎麦
月まどか車線変更なめらかに
オフィスの椅子をいつもくるくる
耳伏せて父に散歩をねだる犬
炭酸水の泡はおしやべり
お釈迦様キリスト様にもあつた夏
風に煽られ飛ぶ女優帽
てのひらで転がす恋の味を知り
結婚詐欺じやないの愛なの
ありつたけの有給休暇使ひ切る
キムタク公に盛り上がる岐阜
着ぶくれて買ひ物に行く道の駅
昼月淡く河豚捌くひと
取材用へりは旋回繰り返し
バイリンガルの姉と弟
連弾の夜想曲聴く花の雨
行く春を抱き眠る盃

清水ましろ
小柳由起子
高橋すなを
二村典子
青砥和子
安藤なみ
杉山壽子
ま由典をを由ま子
石川葵
瀧村小奈生
壽を由

ナオ
風のぼる友のもとへと届きさう
バトン受け取り残り六キロ
皿回すDJ踊れ皆の衆
俺のことかと天狗顔出す
削氷をごりしやりふはり山もりに
宿題やつつけ飛び込んだ滝
雑踏に幼なじみの声を聞き
ときめいてゐた刻をたどらん
喧嘩するたびにあなたが近くなる
高性能に変はる掃除機
楽天のポイントたまる居待月
独り暮らしに沁みる露寒
迷鳥の一羽桂林船下り
差し上げますよ好きな絵画を
スパイスの香り漂ふ喫茶店
いのち育む凍ゆるむ頃
駆けて花ころんで花の花園
逆立ちすれば山々も笑む

令和四年 十月 十二日首
令和四年十二月二十七日尾 (文音)

ま和ま 壽を 由 壽な 由 壽を 典和 壽な 葵ま 由

《野田・野田連句会》

十八公 『御慶御慶と』

蔵の屋根御慶御慶と鳴く土鳩
清新の気を放つ門松
独り居へ一楽章の高鳴りて
トランペットは質種になる
初月は沼のほとりの指定席
補聴器つけて虫の声を聴く
自己都合退職願い書く夜長
鶏口目指し独立の夢
レトロでも時に役立つ膝枕
祖父の籐椅子昼寝に使う
夏^ッの朝のつべらぼうにメークする
ホストクラブへ恋を見つけに
ラインにて流れるままに愛おしみ
人魚の木乃伊秘蔵する寺
山門の監視カメラに手配者が
隣の猫がさかな啜えて
階段の被膜のように花の雨
初物ですともらう露の芽

松澤龍一
渡部春水
木之下みなみ
可不可
諸藤留美子
成島静枝
大塚久子
小泉桂
杜青春
志田則保
鈴木幸子
酒井千恵子
高橋宗史
龍史
水留
み留
枝

令和五年一月 一日首
令和五年二月二十一日文音 (メール)

(留書) 元旦に年賀状がわりにとおめでたい(十八公)を始めた。
野田連句会の連衆の皆さん、恙なく新年を迎えられてこんなために
たいことは無い。今年も良い年でありますように。
(龍一)

歌仙 『映画の聖地』

衆議判

鎌倉の映画の聖地踏む元朝
初寅詣で三代の幸
穏やかな水面まっすぐ石撥ねて
湖上に光る公魚の腹
祈るよう月仰ぎ見る孕み鹿
湿った土に笹葉銀蘭
ツイッタービデオで俯瞰八ヶ岳
西日をうつすマリアの涙
後れ毛に碧玉の蜥蜴身を隠し
梅の実黄ばむ合掌造り
夜明けまで裾翻す郡上の人
田んぼ畦道案山子微笑む
名月を眺めてうまし栗羊羹
雁行整然ブルーインパルス
オーロラのカーテン緑に乱舞する
アイスランドに初蝶眠る
控室花びら開く新婦の茶
輝く肩に春のシヨールを

阿部つぎを 須永恆 雄
浅井笈 羅
吉田松 陽
益子 和
富岡悦 子
早坂七 緒
池田果 穂
恆 穂
和 松
松 笈
悦 七
果 七
松 七
悦 七

ナオ
囀りに目覚め清しく卵茹で
耳朶攪る猫柳の指
くるくると東洋の魔女回転し
ジャンヌダルクの哀しき甲冑
無弦琴蜩呼び寄せ酔狂や
闇にふわふわ浮く走馬燈
鷗外忌文庫の埃ぬぐう午後
細腰泣きて教会に佇む
クオヴァデイス異境の姫に野分立つ
ムクロジを手にいざ出発だ
シャボン付けぬる湯に浸る宿の月
岩の隙間にちちろむし鳴く
ナウ
鳩湧ける城砦の塔棲み家とし
偵察飛行御神渡りあり
国境に集結露軍とNATO軍
卒業式に「悲愴」が響く
みんなして世界を飾れ花の輪で
雲雀は昇る深空の底へ

令和四年二月一日首
令和四年二月十日尾 (文音)

恆 笈 松 七 果 和 悦 松 笈 果 七 悦 和 恆 果 笈 恆 和

《岐阜・巴世里連句会》

短歌行 『秋の川』

ゆつたりと上る真鯉や秋の川
見渡す限り刈田広ごる
単線に走る列車に月乗せて
隣の町に住める両親
尻尾ふる迷子の犬拾ひたる
葉陰に潜む竜の髯の実
白シヨール纏ふ少女の声聞こえ
草津の湯でも恋の病は
思ひ出は思ひ出のままポケットに
連絡船の入港の時
海鳥と戯るるごと花の舞ふ
若きも混じる廻路七人

片桐栄子捌

片桐栄子
塚本 陸
各務恵 紅
奥山ゆい
津田公仁枝
ゆい
服部瑞華
柴田恭雨
大竹花永
松尾一歩
恵 紅
公仁枝

ニオ
茶店にも値上げの波の蓬餅
軒を借れども雨の止まざる
刻々と時間の迫る初デート
ロングスカート口紅は赤
パスポート写真十年前のまま
えんま蟋蟀声高く鳴く
塔頭の木戸閉ぢられて月今宵
濁り酒飲み時を忘るる
ナウ
おもむろに広げてみたる古き棋譜
父の遺言凡庸がよし
大の字に寝て深呼吸花の下
霞棚引く遠き嶺々

恵 紅
栄子
公仁枝
瑞華
花永
恭雨
一歩
ゆい
恵 紅
藤田真木子
執筆

令和四年十月十八日首
令和四年十二月二十八日尾

(於・岐阜市ハートフルスクエアG・文音)

《徳島・花音》

二十韻

『青^{もろ}』

鷹^{がへり}』

潮流はみるみる変る青鷹
ゆらりと傾ぐ船ぞ寒月
ノクターン弾く指細くしなやかに
ひと揃ひなる紙雛を折る
うらかな桃源郷は夢ごち
ただうれしくて走る馬の仔
恋すてふ目覚めて脱皮する少女
八重歯に残るあどけなき笑み
イーストの香る工房パンを焼き
古民家喫茶口コミの客

二橋満 東條士 竹内 菊
士郎 満郎 士郎 燦
満郎 菊 燦 士郎
満郎 菊 燦 士郎

ナオ 草苺籠いつぱいに摘まれゐて
蝉時雨より抜けて立ち読み
諍ひのなき未来をと願つたに
約束反古の君の裏切り
今日の月不倫にもかく美しく
主役射止めた名残狂言
ナウ 野仏は刈田の辻ににこと
避難経路の道標とす
一村をあげて恒例花の宴
遠嶺をつなぐ風光る空

士満 満士
燦菊 郎菊 燦菊 郎菊 燦菊

令和三年十二月十八日首
令和四年三月十八日尾

(於・グランドパレス・文音)

歌仙 『卯の花』

衆議判

卯の花や西より迫る雨の脚
厨にみちて匂ふ馴鮓
里帰り曾孫三人打ち連れて
メトロノームの止まる夕暮
山の端にまんまるの月皓皓と
重く撓れる熊の栗棚
ウハロウインの仮装溢るる交差点
肌の手入れに熱心な彼
ひと泣かす恋と思へば燃え上がり
円空 仏の鉦彫の跡
杉玉の下がる蔵元酒の町
子ども食堂ボランティアにて
煤逃を月が笑つて追ひかける
七つの海をまたぐ初夢
戦争は嫌ひと鳩と鳶が云ひ
コロナ太りを隠す姉上
花吹雪バケットハット一杯に
朝の空へと揺るるふらここ

森川淳子
城倉吉野
加藤亀女
渡辺 柚
伊藤弥生
金子朱蝶
酒井敬子
古川柴子
吉野子
吉野子
亀女
弥生
朱蝶
敬子
柴子
亀女
吉野

ナオ 竜宮の使者と伝へて蜚鳥賊
アーカイヴスはデジタルにする
あの頃は美しすぎた母の顔
耳をすませば届く篠笛
たがための高額献金海霧深く
すもも・あんずと羅の女
またしても人住み替はる軒の札
手に遊ばせる胡同の風
麒麟飛ぶ四千年の大地より
文明開化の匂ひ初むころ
パイ生地を重ね重ねて眉の月
待合室に堅椅子の冷ゆ
新走り欠番となる背番号
ナウ 浮世絵どれも数睨みなる
総理総理遠近法が違ひます
水は低きに流れ笹舟
花の橋出会ひ別れの旅衣
都踊の仕度そろそろ

小林節子
亀女
弥生
吉野
淳子
敬子
弥生
亀女
朱蝶
堀尾一夫
柴子
金井笑子
淳子
節子
敬子

令和四年十一月四日首尾

(於・神奈川県民サポートセンター)

歌仙『葉桜』

葉桜の下に研ぎ師の小さき椅子
豆飯弁当包む風呂敷
白地図に憧れの山書き入れて
わが住む町を巡る自転車
月今宵異人館より搖籃歌
門扉に現れし去年の色鳥
様々の羅漢愉快に秋を舞ふ
あんこう型の彼にぞっこん
キッスOKワクチン接種終ったわ
微熱少々旅先の恋
憂き世なべて渡る世間に鬼はなし
老人も来る子ども食堂
炬話の終りはいつもまたあした
寒杵響く月の路地裏
手すさびの組紐出来は上々に
ふるさと展もネット公開
薄墨の花はやさしく大地抱き
心字が池の亀の看経

衆議判

森川淳子
加藤亀女
城倉吉野
堀尾一夫
小林節子
酒井敬子
古川柴子
伊藤弥生
金井笑子
渡辺柚
亀女
一夫
吉野
敬子
弥生
淳子
笑子

ナオ
春の風邪こじらせ隠り居の十日
徒然草に再度挑戦
耐へてきし地球そろそろ限界に
ウオーキングの今朝も会ふ犬
海静か美しき彩シーグラス
麦酒売る娘は髪を巻き上げ
縁かいな新幹線に隣合ふ
「のぞみ」の名前嬉しお七夜
ガザの地の腕を無したぬひぐるみ
スパイススークに戻る賑はひ
月光を揺らし流るる表潮
松の手入れも半ば別邸
ナウ
何時からか無口な息子走り蕎麦
鳥獣戯画のけもの可笑しき
窯出しの日の高ぶりに神詣で
空っぽ財布にあたたかな夢
野に山にいのち溢れて花の波
袖摺り坂を行くは佐保姫

淳子
亀女
吉野
一夫
柴子
弥生
節子
敬子
笑子
柚
亀女
淳子
一夫
柴子
淳子
笑子
吉野
節子

*小文字「つ」使用

令和三年五月八日首
令和三年六月八日尾
(コロナ禍に於ける文音)

《みよし・ひなの会》

半歌仙 『池の朝』

坪井まちこ捌

水鳥の泳跡長し池の朝

徳永あき子

残る紅葉の色にあざやか

石川 葵

建築家シンプリシテイ極めて

坪井まちこ

お菓子あれこれ詰めるおもたせ

西田 荷

月明かり手に馴染み良きへげ茶碗

長坂 節

青年棋士の爽やかな笑み

々

行く秋の如來の慈悲のいよ深く

葵

民の心に添はぬ政策

節

直球に的を絞つて振るバット

あ

ジョー・デイマジオとマリリン・モンロー

夕

しなやかな裸身香気を漂はせ

ま

じつと見つめる魚籠のだぼ鯨

葵

マドラーのサマーカクテル揺らす月

夕

パスタを茹でる調理ロボット

あ

懐かしき訛飛び交ふ電車旅

節

阿蘭陀渡る鉦や太鼓や

夕

花衣纏へば母の白き面

葵

毬を蹴る子に風のやはらか

節

令和四年十二月六日首尾

(於・カリヨンハウス)

《徳島・ひねもす連句会》

歌仙『襲の色』

衆議判

王朝の襲の色か実むらさき

星野 焱

読書の秋を過ごす図書館

赤坂恒子

今日の月地球の未来見透かして

梅村光 明

想像力が羽搏いてゆく

光 恒 焱

民宿の客に農業体験を

光 恒 焱

手入れ欠かさぬ父の猟銃

光 恒 焱

鬼やらい鬼と化するを恥ぢらひつ

光 恒 焱

屏風の裏で出番待ち居り

光 恒 焱

美しい声に魅かれし夜もすがら

光 恒 焱

告白託すリクエスト曲

光 恒 焱

リモートが結ぶ縁の糸細く

光 恒 焱

井戸の流しになめくぢり這ふ

光 恒 焱

瓜をもみ膳部整へ仰ぐ月

光 恒 焱

襷外してほつと一息

光 恒 焱

維新後の明治の御世に仇を討ち

光 恒 焱

浅野も吉良も普通の人に

光 恒 焱

花咲けば大和心を誘へる

光 恒 焱

都踊の賑はひに酔ひ

光 恒 焱

ナオ 店先にお薄戴くのどけさよ

したり顔なる嘴太鴉

ひしひしと気候問題差し迫る

ラップ止め買ふ蓋付きの磁器

雪女郎淡ひ眠りに包まれて

遠慮がちにも続くしはぶき

晴天の霹靂といふ医者通ひ

背ナの窪みをなぞる指あり

傾城は梁塵秘抄口遊み

生ひ立ち思ひこぼつ暗涙

乾坤に月のエナジイ充滿す

相撲の神に運を授かり

ナウ 学び舎の部活新米届きたる

ドミノ倒しの放置自転車

下位からの箱根駅伝ぶつちぎり

表彰台に溢れくる笑み

降りしきる花びらに身を委ねつつ

行くべき道を進む春駒

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

光 焱

恒子

令和三年九月二十三日首
令和四年一月二十九日尾（文音）

《富山・風狂連句会》

二十韻 『片腕を』

いぬじま正一捌

片腕を猫に貸したる朝寝かな
余寒の卓に香るみそ汁
野遊びの子らはリュックを投げ出して
漢字テストはいつも満点
凍月を中天に置く鬼瓦
女房にまづ注ぎし熱爛
ねちねちと昔の浮気責められる
警策鳴つて痛む肩先
非課税の民にばらまく給付金
鴉五、六羽たくらみは何

いぬじま正一
密田妖子
北野真知子
村戸弥生
大村歌子
正一
妖子
弥生
真知子
妖子

ナオ梅雨しとど凱歌を挙げる桶狭間
監視カメラを西瓜畑に
産み月の近き身体をもてあまし
母から妻にもどる新涼
後にする廃墟の街に十三夜
金毘羅祭漁師いなせに
ナウトンネルに野次の飛び交ふ草野球
蛇皮線に舞ふ紅型の衣
触れなむと水面の雲に花の枝
ピエロ大きなシャボン玉吹く

歌子
真知子
正一
白石藻思
歌子
藻思
真知子
正一
真知子

令和四年三月二十七日満尾

(於・富山市星井町公民館)

歌仙 『梅の路地』

衆議判

梅の路地抜けて眩しき海に会ふ
大手 拵けて探る 春容
残雪の山の名前を尋ねゐて
等高線の美しき渦
月まつる月見団子に子の指紋
虫合とて小籠持ち寄り
秋の田の荒れたる庵を隠れ家に
筆の進まぬ依頼原稿
空中に君の横顔指で描き
濡れた褥に髪を撫でつつ
リメイクは昭和レトロな雰囲気
柔らかにして野仏の影
お茶杓の銘は羽衣風炉手前
夏の霜降る落柿舎の庭
声上げて読むいくたびの嵯峨日記
またもや空の旅を夢見る
花びらを満たして重き掌
経よみ鳥の声彼方より

春山悦子
北原春屏
赤木和子
植木陽子
尾崎志津子
小野雅子
柏谷絶学
志村宣子
角南和宏
土井重悟
星野 焱
堀竹善子
前田空果
三原寿典
春 屏
悦子
陽子
和子

ナオ 焙烙の皿粉々に壬生狂言
殺生石はぱつくり割れて
なめくぢら呪文の様な軌跡引き
ヒエログリフの遺構発見
見上げればモスクを覆ふ冬銀河
膝の間に火鉢を挟む
十本の指の硬さよ我が齢
ためらひもなく色に溺るる
もう尼となりし貴女に会ひたくて
夜の更くるまで独りカラオケ
出窓には有明の月傾きぬ
いざマスクして朝露を踏む
ナウ 柿滅法赤し本日晴れならん
飛鳥の里の猿石の笑み
くりごとをつひうかうかと真似られて
聞き洩らししは治聲酒の所為
舞ふ巫女の袖へ袴へ花吹雪
陽炎燃ゆる真直ぐな道

雅子
志津子
宣子
絶学
重悟
和宏
善子
寿典
空果
寿典
悦子
春屏
和子
陽子
志津子
雅子
絶学

令和四年二月七日首
令和四年四月一日尾 (文音)

二十韻 『小面の涙』

衆議判

小面の涙の露や井伊の蔵
お濠端には色鳥の群
名月に添へし団子はどこへやら
飛びだす絵本プレゼントされ
怪獣に占拠されたる汝が書齋
妻と出会ひし安保闘争
逃れ来て重ねる肌が発火する
寢食忘れ西鶴に酔ひ
算用に生くは浪華の夢やらん
下駄を鳴らして酸漿市へ

三原寿典
土井重悟
柏谷絶学
星野焱
尾崎志津子
絶学
志津子焱
重悟
寿典

疫病か鬼の霍乱養生す
三年ぶりに羽目をはづして
目覚めたら見知らぬ男ひとの腕の中
ジングルベルの鈴の音幽か
満月が奇しきまでに冴え冴えと
トトロの眠る森に分け入る
ナウ湖に樵落とした鐵の斧
蟻穴を出で狩が始まり
酒肴長屋の衆の花薙
祠のうらに仔猫戯れ合ふ

志津子
寿典
絶学
重悟
焱
志津子
重悟
焱
寿典

二十韻 『黒日傘』

熊坂昌子捌

ビル街をさつと漢の黒日傘
貸し自転車の籠に十葉
草木染媒染剤に生かされて
ダイヤル電話捨てられずおり
忘れ靴そろそろ月に帰らん
おわら祭の姉の細腰
虫すだく今日のモデルに恋をする
瓶はぶかぶか領海を越え
恐ろしや生物兵器なるものは
酔ったふりして酔えぬウオッカ

松ノ井洋子

熊坂昌子

秋田てる子

洋子

昌子

てる子

洋子

昌子

てる子

洋子

ナオ盛り上る自慢話は国訛り

月の雪は樹氷太らす

熊捌く手順くるわぬ老またぎ

振れねば崇る山の神様

恥じらいのかまとぶりも愛らしく

地震の晒した羨道の照り

ナウ若者には昭和の歌が新鮮に

幼の真似る鶯の声

花吹雪受け止めている雨後の土

陽炎の立つドーム球場

昌子

てる子

洋子

昌子

てる子

洋子

昌子

てる子

洋子

てる子

令和四年四月 十二日首
令和四年四月 二十六日尾

(於・北仙台コミュニティセンター)

《仙台・ほればれ座》

二十韻 『あんれまあ』

永 測 丹 捌

あんれまあものみな好色春動く

永 測 丹

穴からそろり腕を飯蛸

高山達雄

糸切れた操り人形うらかに

狩野康子

♫の旋律揺り椅子に聞く

佐々木游子

月仰ぐおんな先生頭巾つけ

丹

婚家を後にふるさとは雪

康子

花嫁は写真一枚外つ国へ

游子

銃口我に向けるゲバラか

丹

ゲルニカに哀しむ馬と猛る牛

康子

論戦交し酒を酌み合う

游子

ナオ 沖南風に幽霊船を深追いし

夢をたどれば業平忌なり

少女もう遊戯の輪には加わらず

おわら祭のほだす恋情

十六夜へ柴の扉は閉じたまま

こんな所に小鳥網あり

ナウ やんわりとうちなぐちを教えられ

画用紙はみ出す子らの山の絵

花守になりたいものと分限者が

隣の町へたんぼぼの絮

達雄

丹

游子

康子

達雄

丹

游子

達雄

康子

令和四年三月十八日起
令和四年四月十五日尾 (文音)

《松山・松山連句協会》

歌仙『初句会』

沖村むつ子捌

和装にて帶しつかりと初句会

沖村むつ子

跡継ぎの顔揃う獅子舞

井上雨道

山道は椿まつりのにぎわいて

白石美由紀

祖母は元気に飾る雛壇

平井恭子

終電を待つ駅頭の朧月

榎山谷水

スマホに頼る今日の情報

山田明美

^ッ石段に一円並ぶ薬王寺

む

耳美しき湯上りの妻

谷恭美

おのろけを恥ずかしそうに披露する

恭美

ビアガーデンの季節到来

美

雨上がりあじさいさらに鮮やかに

森アサミ

パテシエ希望娘弟子入り

明

満月に心の内を見透かされ

む

備前の壺に漬ける秋茄子

谷恭

秋麗に歴史ロマンの道遠く

恭

ひっそりと建つ人住まぬ家

々

花むしろ友と盃酌み交わし

美

新入生の部活勧誘

む

^{ナオ}笄は母の形見と大切に

時代劇とよテレビ四K

ダンデムを男どうしの観光地

飼猫ブーム近所迷惑

湖を囲み静かに山眠る

朱き杜殿に積る初雪

ウクライナゼレンスキーを英雄に

過ぎる火遊びやつと沈静

いろいろとあつて金婚五十年

必ずメモを持って買物

縁側に団子片手の居待月

伊勢音頭にて止みし虫の音

^{ナウ}合併の記念行事の村芝居

地方選過ぎ次は国政

青春のフォークソングを口遊み

趣味を生かすは情熱が基

飛び交いし訛りなつかし花の人

草餅並ぶ老舗開店

雨谷恭む明雨谷美む雨恭明美谷む明雨む

令和四年十二月十一日首尾

(於・西垣生東集会所)

二十韻 『あおすじ揚羽』

五郎丸照子捌

山門の仁王の像や樟若葉
あおすじ揚羽ひらり舞いたつ
坂道を抜ければ海の見えてきて
サイクリストの息う四阿
ひと日終え夢路を照らす望の月
君を想いて菊枕縫う
火祭の締め込み姿惚れ直し
一反木綿も追いかけてゆく
西日本新幹線は長崎へ
特産品のネットにぎわす

五郎丸照子
西村ミツ
林レイ子
秋野百草
永濱瑞穂
照子
ミツ
レイ子
百草
瑞穂

ナオ
ちり鍋を囲み辛口吟醸酒
月夜の森にほーと梟
硫黄泉皮膚病傷に効ありと
お龍龍馬も訪ね来しとか
ようやくに渡航解禁彼の元
A I アナのニュース記事読む
ナウ
膝の猫時にぴくりと耳を立て
ちよっとおすまし雛客の子ら
故郷は花の盛りと友の文
川に釣り舟のどらかな午後

照子
ミツ
レイ子
百草
照子
ミツ
レイ子
百草
瑞穂

源 心 『青年の虚無』

青年の虚無は夏雲傷つける
木の洞ひしと抱く空蟬
ピアノの音チェロとヴィオロン戯れて
ハーブ使いがカフェの評判
有明の懸かる離島へ舵を取り
伝統衣装まとい踊る娘
やんわりと焦らせて侘びて菊枕
地域猫には名前いろいろ
四才児迷子と告げるスピーカー
SL好きは撮り鉄となり
取り混ぜる風刺と洒落と般若湯
シヨートシヨートをベッドサイドへ
ふるさとは樹齡二千の花を背に
春の匂いを包むことづて

狩野康子捌

狩野康子
松ノ井洋子
熊坂昌子
秋田てる子
鹿野恵子
田中ひろ子
木田眞智子
鈴木ゆう子
部谷虎落
佐藤千枝子
永渕 丹
先崎紀子
川口陽正
石橋 蘭

まなうらに母の強さを孕鹿
御手洗団子の餡が頬っぺに
ビー玉の転がる先に招き猫
骨董市に金継ぎの酒器
投函を忘れて帰る麦稈帽
ほのと香水フリル艶めく
溢れでる未練は恋の進化形
熱き情けは性別を越え
凍月に光る松島人力車
冬の巖に一羽白鷺
水源地訪えば床しき杜あり
紙とえんぴつだけを身に添い
花万朶平和な地球とりもどす
夢の続きを弥生狂言

石橋真紀
中村記康
佐々木游子
高山達雄
川村紀子
浜田則子
笹川圭子
高橋玻斗子
山田史子
中村孝史
達雄
游子
執筆

歌仙 『神楽殿』

静 寿美子捌

錦秋や笙の清しき神楽殿
満ちくる潮に昇る望月
草の実をつけて跳ねる子抱きとめて
学習机買ひ換への時期
大騒ぎ地元アイドル握手会
車で待機ボスは革ジャン
寒紅の色合ひもよき若女将
密会の場所そつと渡され
晴れ晴れと挙式の朝の鳥の声
キッシュロレーヌのレシピ検索
妖精の舞へば戦のおさまりぬ
国境越えて医師の猷身
月白し麦酒の泡を髭につけ
納涼映画「銭形平次」
列なして皇居外周ひた走る
八百八橋はあきんどの町
花の下勸進相撲賑はひて
紙風船のふはりふはりと

静 寿美子
橋本やす子
永塚尚代
後藤とみ子
柳田宏子
三輪慶子
や 子
寿 子
と 子
尚 子
慶 子
宏 子
寿 子
や 子
尚 子
宏 子
江 子
佐藤澄

ナオ すれ違ふ異国の言葉 鐘 臑

北畠明

仮想通貨で買えぬ昼飯
マイナンバーカード必須になるといふ
アロマの香る瞑想の部屋
年内に片付け事が山とあり
吊るされてゐる鯨鰓を切る
豆絞りきりりいなせな三代目
婚約語る満面の笑み
愛あれば良しともいかぬたつきにて
ズーム画面に映り込む猫
「お六櫛」求める木曾に月今宵
里村の家早も炬火欲し
ナウ かしましき棚田に群るる稲雀
さあさ元気にラデオ体操
船旅の世界一周申し込み
鶯餅をどんと購入
窓開けて絵画教室花の風
蝌蚪の紐浮く木漏れ日の池

子 や 尚 と 宏 慶 江 寿 宏 と 尚 や 明 子

令和四年 十月五日首
令和四年十一月五日尾 (文音)

《東京・夢夢連句会―その二》

脇起半歌仙 『城跡や』

静 寿美子捌

城跡や古井の清水まづ訪はん

芭蕉 翁

さやけき風に白き鳶尾

静 寿美子

一列に並びし子等の賑やかに

橋本やす子

皆んなが主役島の分校

後藤とみ子

月照らすベンチに残る文庫本

北嶋明子

葛の葉揺らし通りゆく猫

佐藤澄江

夷切吉祥柄をみつけどし

三輪慶子

今度の上司男振り良く

永塚尚代

妄想も空想もよぶ秘めし恋

柳田宏子

メタバースには美女のアバター

や

ポケットに金比羅さんの守り札

澄

投票場で手指消毒

明

酒好きも下戸も多弁に年忘

と

眠る寒鷹月に影置く

慶

アレクサに懐かしの曲リクエスト

寿

散歩コースは足の向くまま

宏

天蓋となりて大樹の花盛り

尚

峠の茶屋の菜飯名物

や

令和四年七月 三日首
令和四年七月十六日尾 (文音)

《横浜・横浜ベイサイド連句会》

吉田酔山師 追悼

歌仙脇起 『夕』

顔』

母のごと夕顔白く楚々と咲き
水着の影の揺れる庭先
おさらひのビデオ撮影任されて
尺八の音に聞き惚れる客
棧橋で見送る船出月今宵
暖簾受け継ぐ落鮎の宿
内外の秋のブランド身を飾る
爪を短くお針子の姉
七色の彩雲仰ぐ西の空
印度から来た赤い恋文
ボリウツド年増女優と深い仲
ヘアーピースのメンテ欠かさず
月の夜裏山に鳴く梟が
終天神急ぎ参らん
銭湯の手配写真に似た男
開場前に並ぶ常連
潮風に散りゆく花よベイサイド

丹下 誓捌

吉田酔山 仏
丹下 誓

秋山よう子

安樂明 郎

國司正 夫

酒匂道 代

白石一 有

鈴木英 雄

鈴木 律

高山鄭 和

松田知 子

松田ぼくる

本屋良 子

う 誓 夫 郎

絵筆をとりてうらら一刷毛

ナオ 厩務員仔馬に何か語りかけ

祖国離れて慣れぬ明け暮れ

目に沁みる激辛料理飽きもせず

呼び屋稼業に賭ける生涯

多いのよ琴の師匠のお誘ひが

ふたりつきりで蛩追ふ闇

夏籠の尼に秘めたる過去のあり

おそろしきものの酒の勢ひ

初老にてアルバトロスを達成す

将棋三段 囲碁は 六段

高層の月は疲弊の街照らし

跳人に合はせラッセラッセラ

ナウ 先代の遺徳を偲ぶ虫の会

縁をつなぐ好物の茶菓

賑はへる地産地消の道の駅

ベンチにひとり文庫本読む

阿波の花夢幻を駆け抜けて

弥生尽なり只さやうなら

令和四年八月 八日首
令和四年九月十七日尾 (文音)

良和知有 蕨 英 道 夫 郎 う る 良和知英 道 蕨 有

協起歌仙 『煤 払 ひ』

旅寝して見しやうき世の煤払ひ
音なく積もる優し初雪
カルデラにディーゼルカーの走るらん
過疎の街角覗くコンビニ
蹴轆轤に陶土載せたる十三夜
節樽れた手で焼いた落鮎
かまつかの日の匂ひして華やげり
真紅のドレス舞踏会待つ
フェロモンを巻き散らかして恋探す
心の鍵がひとりでに解け
西郷どんの深き眼差し峠道
焼酎とろり温め黒千代香
四方の海涼しき月の昇り来て
庭のあちこち子犬穴掘る
辿りゐる先祖の系譜明治まで
ドロップ缶の薄荷うれしい
双児ですこの花の下日の本よ
巢立ちの鳥の行方見守る

高橋 賢捌

芭蕉翁

高橋 賢

本屋良 子

志田則 保

丹下 誓

浅沼小 葦

小池 舞

長坂美代子

山中土 筆

服部秋 扇

安樂明 郎

小泉 桂

速藤尹希子

白石一 有

良 舞 舞 桂

蒼穹に飛天舞ひ来て光る風
ピーターパンは縦笛を吹く
亡き父の形見にもらふ腕時計
ちよつと気になる頬の傷痕
スカジャンに色悪気取る立役者
たたら祭に袖を引かれて
君と僕夢の世界の置炬燵
レンタル家族写真残して
賽銭に一円玉はお断り
池の鯉さへ泡を吐き出す
月蝕の去りて満月また拝む
名残茄子ゆゑ奴に食はせぬ
ナウベい独楽の技競ひ合ふ嫁と父
C T スキャン何も写さず
異次元へ行つてみやうかアバターと
我が楽園に日差しこぼるる
背伸びして花を取らんと帰国子女
鐘供養なり出店賑はふ

令和四年 十月二十一日首
令和四年十一月 十一日尾

(於・京橋区民館)

扇 桂 尹 良 桂 葦 尹 舞 桂 尹 扇 郎 良 賢 桂 葦 賢 有

《仙台・連句会ひらめき》

脇起半歌仙 『蛸壺や』

木田眞智子捌

蛸壺やはかなき夢を夏の月	翁
昆布の森はゆらりゆらりと	田中ひろこ
ロボコンの一投足に沸き立ちて	鹿野恵子
裏町通りかすかジャズの音	鈴木ゆう子
書初めは自立の文字を筆太に	木田眞智子
手繰り上げたる作業の袖	ひろこ
^ッ 鳥帰る雲に漣のこるらん	ゆう子
踏切り板を探す蜃楼	恵子
花のもと船頭の唄流れゆく	ゆう子
お河童いつもなんでどうして	ひろこ
凍蜂の只そこにある眼のニヒル	恵子
夫の友来て急ぐ熱爛	ゆう子
稚児愛す古代女王左向き	ひろこ
砂漠に描く恋の曼陀羅	恵子
おとつと終末時計あと百秒	眞智子
外野席には鹿の草食む	ゆう子
月光を釉薬として伊賀の杯	ひろこ
共同募金声は鈴めく	恵子

令和四年十月十三日首尾

(於・パル長町)

歌仙『ダボ鯨や』

《和歌山・わかやま連句会》

半歌仙 『和歌の浦』

竜天に昇る兆しや和歌の浦
風やわらかに揺れる松ヶ枝
初めての入園式に大慌て
ちよつと気になる無料サンブル
むらぎものの心に浮かぶ居待月
相撲番付朝刊に載る
置き土産つまみに新酒酌みながら
体臭だけが思い出されて
エレベーター女子高生と二人きり
年齢詐称いくつまでなら
ウクライナ平和求めて冬山河
コロナ禍止める新薬はまだ
くちなわの水脈曳き渡る月の池
旅先で読む怪奇小説
住職がマタイ伝説く証城寺
竹とんぼ行く青い空まで
懐かしきアリアの響く花便り
船の上から春の海釣り

小池正博 捌

松本奈里子

谷澤 節

岡本遊 風

金川 宏

出口雅 子

中原美智子

宮本空 歩

小池正 博

宏

奈里子

美智子

遊 風

節

宏

雅 子

美智子

正 博

空 歩

令和四年三月二十七日首尾

（於・和歌山県民文化会館）

個人作品

グループを越えた交流が盛んな昨今、せっかくのよい作品を埋もれさせないためにも個人から投稿して頂く企画です。日本連句協会会員として、一人一篇のご出稿を掲載いたします。まだ、会員資格を取得されていない方は、ご入会の手続きをお願いいたします。たくさんのご出稿をお待ちいたしております。詳しい応募方法は日本連句協会会報（10月と12月）にご案内いたします。

《個人作品》

歌仙 『宮参り』

緑陰や嬰の微笑む宮参り
玉砂利を踏む夏浅き朝
小説の美しき装丁めぐりて
デッサンばかり上がる腕前
電線に一声高く鴉啼く
知らんぷりして瓢箪を干す
床の間に蔓竜胆の揺れており
白き横貌照らす明月
恋こがれそつと隠せる紅き爪
「ご飯できたよ」夫のやさしさ
小麦粉が高くて蕎麦を打ちかねる
手持無沙汰で呷る爛酒
新体操今度は決めるフォーメーション
波間の月も並ぶ烏賊舟
大山のアイスクリームお取り寄せ
久しく会わぬ友の消息
寂庵に平和の祈り花吹雪
鐘の音にのり春の野辺ゆく

出原樹音捌

出原樹音

中森美保子

高橋すなを

島田裕子

を裕保を裕保を裕保を裕保を裕保を裕保を裕保を

ナオ 永き日を棋譜読む老父長考す
臓器移植の入国審査
オスカーを手に監督は凱旋し
出演依頼テレビ局から
求婚の詩を捧げる夜勤明け
あなたなしでは生きていけない
月煌々治水工事のほころびて
ドラキュラ知らぬえんま蟋蟀
E.Vで紅葉の中を駆け抜ける
天気図語る気象予報士
菜園の出来よろしくておすそ分け
紅型の帯心躍らせ
ナウゴルフ場コロナの憂さをそぎ落とし
表示されてる二酸化炭素
赤道を通過しますと添乗員
異国の街の春の喧騒
花守の家に生まれて七代目
お玉杓子は夢を追いかける

正村

有

を裕保を裕保を裕保を裕保を裕保を裕保を裕保を

令和四年五月二十日首
令和四年六月五日尾

(於・熱田神宮文化殿(二部文音))

故吉田醉山氏を偲ぶ

牛木辰男 両吟

魚男 魚男 魚男 魚男 魚男

分埃して薬吻^{すり}れくに

男 魚 男 魚 男 魚 男 魚 男 魚

(文音)

《個人作品》

二十一世紀

『風人』

―尻取り押韻

梅村光明捌

風人の詩囊肥やすや望月夜
京で味わう名残狂言
鮎を染め帛染め紅葉鮮やかに
果肉の粒に差し菌危うし
牛の眼のその奥にある沼深く
隠れ里より舞うは初雪
逝きし夫十七回忌ひとり鍋
並べてメールで誘う鷲替え
帰らない選択もあり木を囁す
鑢をかけて鍍金剥がさん
三界の万朶の花に寄す謳歌
羽化登仙の心地駘蕩
陶然と盃酌み交わす夏近し
家集纏めて口笛を吹く
福音を思い思わば君の声
超える暮らしを共に過ごして
指定席弁当広ぐコメディアン
否収獲笑みこぼれくる

梅村光 明
赤坂恒 子
牧田榮 子
山本真 弓
内田正 美
今村さつき
田伏裕 子
山口洋 子
丸田礼 子
玉井洋 子
恒 子
光 明
真 弓
榮 子
さつき
正 美
山口洋 子
裕 子

眩めくは月の魔力と遠花火
ナビの導く古き山莊
僧推敲の故事を開封

玉井洋子
礼子
執筆

令和四年九月二十七日首
令和四年十月十九日尾

（於・ア・テンポの会＊文音）

＊二十一世紀形式。非懷紙二十二韻、拳句は短句を繰り返す。鈴木漠創案。

＊尻取り押韻は拳句から発句に循環回帰。

歌仙『春惜しむ』

新しき朝談ふ陣

三言

主のなき處に、今年も石の燈に

(於・浦和コミュニティセンター)

風啓桂 啓詩桂 ♪ 詩桂啓 ♪ 桂詩啓 桂風啓 詩

《個人作品》

歌仙 『破れ蓮田』

大山とし子捌

破れ蓮田常磐線が分けて行く

大山とし子

弓張月の現るる丘陵

森 譜稀子

今年酒女杜氏の凜として

相馬マサ子

三和土の隅に寝まる愛猫

井上千 秋

駅前に大きな楽器背負う子等

とし子

みんなの好きなアイスクリーム

〃

ッローマへはファーストクラス空の旅

譜稀子

素敵な彼氏私好みか

マサ子

夜の更けて影の寄り添う円舞曲

譜稀子

マリアの胸に抱くキリスト

〃

ホームランボールボーイも立ち尽くし

とし子

世界平和を願う諸人

マサ子

廃校と決まる分校月寒く

〃

七草がゆに集う同胞

千 秋

手土産は乙姫様の思いやり

とし子

夢は大きく宝くじ買う

マサ子

浄土とはこんなところか花の曇

譜稀子

黄蝶紋白小さき菜園

マサ子

ナ朝未だき義士祭の列静々と

とし子

豆大福は既に完売

譜稀子

ドイツ戦堂安律のゴール良し

とし子

歓喜のメール繰り返し読む

マサ子

ユーホーを見つけて騒ぐテント村

譜稀子

砂のやさしさ亀生るる浜

とし子

明け方の体調不良娘に内緒

〃

一か八かと打ち明けてみる

譜稀子

ばちばちと火花を散らす恋敵

マサ子

レモンサワアの泡と消えゆく

譜稀子

会釈して木の間の月を譲り合う

〃

光悦垣に揺れる穂薄

〃

ナウ山壁の奥まで晴れて鵲高音

マサ子

遠出の先は風に任せて

〃

耳遠き事にかこつけ知らんぶり

千 秋

緋毛氈にて抹茶頂く

譜稀子

母連れて言の葉要らぬ花の下

マサ子

佇みて待つ春の曙

執筆

令和四年 十月二十七日首
令和四年十二月 十日尾

(於・羽鳥ふれあいセンター)

《個人作品》

二十韻 『桜 し べ』

木之下みなみ捌

桜しべ降る空耳のコンサート
春愁包む絹のハンカチ
少年は小鳥の卵気になりて
秘密基地には鬼事の鬼
諸肌を脱ぎ大太鼓月涼し
西瓜届きてひろぐ哄笑
詩といふひとに恋して歌ふ詩
汽笛近づく待ち人の影
コロナ禍の慕情弾ける二年ぶり
回せば澄める独楽の色彩り

木之下みなみ
服部秋 扇
榎原十 詩
加藤万 里
秋 扇
みなみ
十 詩
みなみ
万 里
十 詩

八百萬の神の乗り込む宝船
幕内弁当タニタ食堂
父も子も襲名披露汗みづく
銀座通りの似合うカップル
唇重ね名画めきくる月今宵
マティーニグラスオリブの実
ナウ翼持つ麒麟となりて秋の旅
水影となる塔の水煙
銀鮒の鰭が動かす花筏
しろつめ草を編みて冠

秋 扇
々
みなみ
十 詩
万 里
秋 扇
十 詩
みなみ
万 里

令和四年四月二十日首尾
(於・浦和コミュニティセンター)

《個人作品》

短歌行 『曼荼羅塗絵』

五郎丸照子捌

新涼や曼荼羅塗絵ぬりあがり
かなかなかなと蜩の声
満月のいと美しとLINEにて
ヨガのポーズで呼吸整え
白檀の香りほのかに陶の苑
築地を越えて蜜柑たわわに
冬至湯の女の背中少し痩せ
ずっとそばにと君のいじらし
呑むほどに酔うて十八番の「北帰行」
じつと見ているぶちの家猫
花の旅ローカル線を乗り継いで
初獲り供う磯の口開け

林レイ子
五郎丸照子
西村ミツ
レイ子
照子
ミツ
レイ子
照子
ミツ
レイ子
照子
ミツ

ナオ
突提が起点終点春の虹
父の遺作の写真飾られ
越中の反魂丹の置き薬
高石友也自己流で弾く
芸術を二人語りしバリケード
囚われし彼支え続けて
短夜の鳥の囀を照らす月
女王陛下を民の偲べる
ナウ
伝統の重み世界を圧倒し
ドローンおくる映像の妙
吉野山全山染めて花盛り
紙風船を空へ打ち上げ

レイ子
照子
ミツ
レイ子
照子
ミツ
レイ子
照子
ミツ
レイ子
照子
ミツ

令和四年八月 十日首
令和四年九月二十一日尾
(文音)

《個人作品》

短歌行 『天上に』

佐々木リサ捌

天上に続く花野と思ひけり
立ち去り難き爽涼の丘
月今宵友の榮転祝ひもし
路上ライブに集ふ若者
駅前は旅を楽しむ人溢れ
赤きヤツケに心乱るる
抱かれて眠る湯宿に鶴の声
不治の病と知りしあの頃
シャルトルの大聖堂は厳かに
女王陛下を惜しむろびと
花に酔ひ名酒に酔ひてよき一日
淡雪解くる山荘の庭

佐々木リサ
後藤はるよ
井上千代子
鶴岡育枝
大山とし子

育千は
育千は
育千は
育千は
育千は
育千は
育千は
育千は
育千は
育千は

遠足の列に加はる盲導犬
湾の向かふの富士を眩しむ
マスターの挽きしコーヒー味はひて
棚にびつしり推理小説
着信に「元氣ですか」と任地より
蚊帳の中には双子すやすや
ナイターの月をめがけてホームラン
大谷選手記録更新
夢持ちて生きてゆかふよこの浮世
産土神の垣繕ろはれ
花吹雪髪に肩にとめどなく
颯合戦のいよよ佳境に

令和四年九月 十一日首
令和四年十月 二十七日尾 (文音)

育千は 育千は 育千は 育千は 育千は 育千は 育千は 育千は 育千は 育千は

《個人作品》

二十韻 『天井の』

瀧村小奈生捌

天井の高さをはかる立夏かな	二村典子
ていねいに剥く蚕豆の莢	なかはられいこ
角張った文字を大きく看板に	瀧村小奈生
駐車場までのびる行列	典
黒猫が猫の影踏む月の下	れ
踊の輪からきみと抜けだし	奈
ハロウィーン衣装いつしよに選んでね	典
演技指導をされる駅前	れ
蕎麦うどん井も出す純喫茶	奈
電子レンジがチンと言わない	典

ナオごめんねと国境またぐ霜柱	奈
昼月を背に挑む寒泳	典
ゆるめてはしめる人工股関節	奈
円よ上がれと幣を振り振り	典
恋の歌それとも恋の五七五	れ
転居はがきを連名にして	奈
ナウ自転車でワイン農家を巡る旅	典
轍のあとにゆれる陽炎	れ
花の雲日本最古の眼鏡橋	奈
ボートレースに歓声の湧く	典

令和四年五月四日首尾

（於・尾崎山）

《個人作品》

二十韻 『蛭舟』

棚町未悠捌

薄闇にゆるゆる進む蛭舟
操る竿にさやぐ青葦
キッチンはバナラの香りに包まれて
風もやさしい新築の家
鉄橋を渡る夜汽車に望の月
葡萄ジュースを手作りで詰め
運動会上司も部下もへだてなく
思わぬ人と二人三脚
この道をずつとあなたと歩きたい
お地藏様のまろやかな笑み

棚町未悠
城依子
齋藤桂
岡部七兵衛
山根敬子
悠
依
桂
七
敬

ナオ
サククスを仲間と吹いて小春風
寒満月に見守られつつ
きりもなく思い出涙で辿りおり
皺に刻んだ苦勞数々
恋なのかコロナ禍なのかこの微熱
韓流ドラマわたしヒロイン
ナウ
愛犬がどこまでも付いてくる
見晴らしの良い長い堤防
賑やかに酒酌み交わす花筵
ロバのパン屋に宵はあたたか

悠 依 桂 七 敬 悠 依 桂 七 敬

令和四年六月十七日首
令和四年八月 五日尾

(於・インターネット掲示板)

《個人作品》

歌仙 『雨上がり』

嘯りや三日振りなる雨上がり
アスパラガスを籠に一杯
競漕のリズムよろしきコックスに
菓子を横目にパイプくゆらせ
大銀杏こずえ遙かに月のぼる
あれやこれやと冬支度して
緋毛氈時代祭に盃交わす
空澄み渡りたたなずく尾根
ロケットを語る横顔ほれぼれと
通りすがりの男でさえも
Aとそこから先はまた今度
蜚蜚^{こまごま}避けて月の縁側
あいの風渚に寄せる波静か
ローカル線で聖地巡礼
湯治宿売り来る豆腐分け合いて
今の世相をラップでうたう
外つ国の戦場に咲く花ありて
命をかけて川上る鮎

仲本お池捌

仲本お池

半田有杜

大久保風子

上原百々

小林喜一

田中安芸

久保田朴

石田耕庵

谷口螺々子

安芸

喜一

安芸

田朴

有杜

風子

百々

田朴

有杜

ナオ雲の間に覗く中天夏近し
氣象予報士目指すタレント
すらすらと答案用紙埋めてゆき
ベンチ塗り立て街の公園
行列の拾円カレー松本楼
犬に引かれて白き息吐き
着ぶくれを一枚ずつと剥されて
ベットに届く朝のコーヒー
庭先に透明人間ぬつと出る
餃子泥棒無人販売
満月に誘われ猫股踊りだし
棚田に響く粃磨りの音
ナウ世界中大谷のショー爽やかに
航空便で届く饅頭
手捻りの大皿床に並びいて
柱時計のねじ巻き忘れ
この橋を渡れば花の未来都市
そよと流るる蒲公英の絮

お池 風子 有杜 安芸 喜一 有杜 今富千 百々 安芸 百々 有杜 田朴 風子 蛙女 有杜 お池 千辺 耕庵

令和四年五月二十五日首
令和四年六月二十二日尾

(於・九段坂生涯学習館&リモート)

《個人作品》

歌仙 『語るべき事』

語るべき事もあるらし木の実落つ
硯の海に筆染める月
さんま漁帰港の旗を待つならん
軽自動車で通う村長
入札は提案型に改めて
ゴールポストに注ぐ冬の陽
隼は狙う獲物へ急降下
酒と美女には目がないと云う
ふり切れず思い出してる過去の恋
外人墓地のケルト十字架
焼きたてのパンの香りに誘われて
割符合せてそこで商談
半地下に差す月影も蒸し暑く
行水をする腕の彫物
ゼネコンの現場監督東大出
小兵したたか五輪柔道
花踏んで生涯夢を追い続け
平賀源内春雷の獄

林 転石捌

林 転石

田中秀夫

坂本孝子

宇田川 肇

孝

孝

肇

孝

夫

肇

夫

肇

孝

孝

肇

夫

孝

肇

ナオ 人だから不動明王出開帳

C T スキャンで傷を診察

兎より猫より聡き犬の耳

数多の星が地平より湧く

深窓の令嬢化けてへビメタル

草食男子通す筋道

山姥の情けを受ける雪の夜

賽の河原でじょんがらを弾き

戦後には流行る思想の様々に

四コマ漫画長期連載

半月は軽くなるかと問う子供

紅葉の不思議哲学の道

ナウ 煉り切りの秋を彩る窺の先

情にはもろい俺の親方

世の中の川も運河も海へ出る

フィルムカメラと抱瓶を持ち

あの人には非に見せたき今日の花

蛇のしばらく止まる中空

夫

肇

孝

孝

肇

夫

孝

肇

石

夫

肇

夫

孝

孝

肇

肇

石

夫

令和四年九月十七日首尾

(於・三鷹緑華亭)

《個人作品》

歌仙 『杜の暗さや』

伊東連句会「風」

走り根の杜の暗さや青葉木菟
浴衣の子らの軽き足音
久々に友と碁盤に向き合いて
宅配便で故郷の酒
川下る船頭の竿月を背に
いろは紅葉の谷を彩り
草庵に生きてる証吊し柿
島田の髻の女が覗き
密会の後の切なさひとしおで
パーティーションが阻むくちづけ
ウイルスは次から次に進化して
薬師如来にはずむ賽銭
裏山に狼の声したような
月影蒼くとがる氷柱よ
心地よき水琴窟に聞き惚れて
じゃんけんぼんの最初はぐー
花冷えの天守跡からビルの街
社員旅行は潮干狩へと

半田有杜捌
藍原綾子
菅沼公子
半田有杜
宮澤次男
菅沼不立
寺本碧水
りん亭
公子
綾子
りん亭
次男
有杜
綾子
碧水
次男
齋藤恵子
綾子
公子

ナオ閉ざされし分校の門百千鳥
ベビーキルトを祖母はひたすら
果てしなき戦火の終り祈りつつ
約束の地にあの人を待ち
兄嫁の昔語りと一夜酒
ゆるく崩せる羅の膝
白河の関を越えたぞ優勝旗
俳聖のゆくおくの細道
おもてなしクックパッドの世話になり
手品の技であつと言わせん
鉄格子やすりで挑む月の窓
薄の原がおいでおいでと
ナウ流水をとどめて久し崩れ梁
鴉天狗の御朱印を受け
希望とは無一物より湧き出づる
ちよつと気取つてエスプレッソを
外つ国の友に見せたや花吹雪
春の驟雨に逸る駒たち

次男
綾子
有杜
公子
綾子
公子
不立
恵子
碧水
りん亭
角田紀子
次男
綾子
碧水
恵子
公子
不立

令和四年七月二十一日首
令和四年九月 八日尾

(於・伊東市中央会館)
(ナオ九句目から文首)

半歌仙
『大漁旗』

薫風や大漁旗の新しき

端午の節句祝ふ親戚

窓の外窺ふ猫を抱き上げて

寸胴鍋のスープことこと

なだらかな山の端出づる望の月

更けゆく夜長読書三昧

ウぬらひよん南蛮煙管銜へをり

コロナ禍なれど旅は解禁

ジム通ひ倦きたる頃に恋に墮ち

婚儀さておきまず嬰の欲し

神送り小半酒の酔ひ早く

月の奥伊予梟の声

廃校をリニユーアルして喫茶店

緋の作務衣袴に着こなし

早世の兄に代りて政界に

つい騙される四月馬鹿の日

幾重にも重なり合ひて花筏

翁畑打つ山峡の里

令和四年五月二十八日首
令和四年五月二十八日尾

— 178 —

学生 の 作品

小・中・高・大学の授業や地域のイベントでの連句作品を掲載しました。「付けと転じの連句の座」のおもしろさを披露するものです。

若いころの連句の経験は、言葉の魅力、「座の文芸」の魅力が人生の糧となつて幅を広げていくことに間違いありません。たとえ社会人になつていつとき中断したとしても連句経験の抽斗はすぐに引きだせます。

ご指導にあたる先生方にもご理解をいただき、全国に連句が盛んに伝播することを期待します。

《小学生・徳島》

徳島県連句協会2022第十八回

夏休み子ども連句教室作品

令和四年七月二十七日（水）～二十九日（金）

於 徳島市徳島城博物館和室

指導者 徳島県連句協会（子ども連句実行委員）

東條士郎 竹内 菊 関真由子 二橋満璃

樋口磨汐（第七～九回受講者）

実践の記録

第一日 七月二十七日（水）

俳句をつくろう

連句の発句となる五七五（俳句）を作ることから始めた。
できあがった主な作品は次のとおりである。

井上愛梨（内町小学校三年）

ゆうがたに ながしソーメンつめたいな

ひまわりが大きくそだって種つける

井上航太（内町小学校三年）

夏休みしゆく題多くておわらない

夏の風もうすぐぎふに行く予定

長あや乃（内町小学校三年）

夏の昼海がキラキラささいこむ

夏の朝やさいはどれもぴっかぴか

津嘉山照代（八万小学校三年）

あついのにならジオ体そう毎日だ

太陽ま上プールに入ってつめたいな

津嘉山正泰（八万小学校一年）

まつ山にみんなでもどる夏やすみ

さんしんはくやしい からだはあせだらけ

安村碧唯（鳴教大附属小学校一年）

なつやすみプールあそびはたのしいな

なつのあさ ほんをよんだよ がくどうで

第二日 七月二十八日（木）

長句に短句を付けよう

昨日作った俳句（＝発句）に七七（短句）を付ける。

今度はその七七に五七五を付ける。それを繰り返し
てゆく。

はじめから、座を組み、式目にそって作るのはむづ

かしいので、独吟とし、長句と短句の付けになれることを目的とした。

なお、次の点を留意点とした。

- 1 自分の句（夏）を発句とし、六句をつないでゆくこと
- 2 五句目に月を出し、秋の句とすること
- 3 定形になれていない場合（一年生）は、字余り・字足らずもよしとし、自由に作ってもいいこと。

井上愛梨

ひまわりが大きくそだって種つける

どんな味かなしましまの種

パンダさんタイヤのおもちゃで遊んでる

ブランコのつてあの空高く

えんがわでおだんご食べて月を見る

山はこうようはしゃぐいもうと

井上航太

夏の風もうすぐふに行く予定

田んぼの近くの家にいく道

川で見たぎん色のはこは何だろう

取ろうとしたらはさまっていた

十五夜の月におそなえわすれずに

ススキを四本立ててまつた

長あや乃

夏の朝やさいはどれもぴっかぴか

トマトやきゅうりみんなおいしい

あつあつのからあげたくさんたべたいな

陽はさんさんと かげをこくして

月見そば おだんご思う まん月に

もみじといちよう ふくのもようは

津嘉山照代

太陽ま上プールに入ってつめたいな

ひえた体にあげたてポテト

ぐうぐうと車でつかれてねていたよ

おもわずわらうねこもねていて

月がでた光がさしてかげできる

ぶあついマンガよんで夜ふかし

津嘉山正泰

さんしんはくやしい からだはあせだらけ

あおいしばがひかるグラランド

ピアノの音がなめらかに聞こえてくる

ねこが公園で大きなあくび

ながればしとんで十五やまんげつだ
プロやきゅうのせんしゅになる

同じ言葉や同類の発想でも、「いけない」とはせず、ただ付けることに専念させた。「あれはいけない」「これはダメだ」と言う、萎縮するからである。まずは、言葉が次々と生み出せるという体験を持たせたかった。

第三日 七月二十九日（金）

句をつないでいこう

新しい人が二人参加した。
連句のあらましを説明し、長句、短句を交互につなぐことを試みた。
座ではなく、自分ひとりの連想から組み立てられる独吟とした。

吉村^{けいと}京桃

朝起きてはじめに聞こえるせみの声

青空見つつアイス山もり

友達と夜おそくまでゲームして

台所から母どなる声

自転車で月を見てたら転んだよ

立とうとしたらすきつかなだ

今ばんのおかずはきつと秋刀魚だな

ソナチネの五番四分の三拍子

花の中家族みんなでお弁当

進級をする教科書もらう

吉村^{さら}彩良

空の中入道雲はわたがしだ

てんぼう台に向日葵の花

おにごっこむちゅうで走る公園で

ミートスパゲッティお皿やまもり

ちゅう車場見上げてみれば月中天

草むら深くこおろぎの声

いしゃになるたくさんの人すくうため

じゅ業で一番好きな算数

まんかいの花の下でのおべんとう

友達の顔みんなのどらか

三日目は、座を組んで連句を巻く予定であったが、三日目の体験者にあたる人は二人だけになったので、座を作ることにはむづかかった。したがって、昨日の続きを独りで、できるだけ長く繋げられるように

指示した。なお、小学一年生には、定型（五七五、七七）に言葉調えることに慣れていないので、思いつくままに作っていいと、伝えた。まずは、表現に先立つ発想の方を優先したからである。なお、その上で、春（花）・夏・秋（月）・冬の句を入れて欲しいと注文をつけた。

津嘉山照代

太陽ま上プールに入ってつめたいな（夏）

ひえた体にあげたてポテト

ぐうぐうと車でつかれてねていたよ

おもわずわらうねこもねていて

月がでた光がさしてかげできる（月）

ぶあついマンガよんで夜ふかし

秋の山おちばをふんで音がする（秋）

パリッとわれてハートの形

ふと思うびょうきなんてなきやいいな

さむい朝にこたつにもぐる（冬）

雪がっせん顔に当てられ前見え（冬）

だんさですべり頭ぶつける

のりものの絵をほめられるみんなから

花の木のしたかけっこをする（花）

つばくらめひくくとんだら雨がふる（春）

雲が去ったらできた初虹（春）

津嘉山正泰

さんしんはくやしい からだはあせだらけ（夏）

あおいしばがひかるグラウンド（夏）

ピアノの音がなめらかに聞こえてくる

ねこが公園で大きなあくび

ながれぼしとんで十五やまんげつだ（月）

プロやきゅうのせんしゅになる

ささのはの七月七日はたなばたの日（秋）

もうすぐ松山にかえってあそぶ

プールでひらおよぎのれんしゅうをしたい（夏）

ふゆのときはアイススケートたのしいな（冬）

ゆきがふったらゆきだるまをつくらう（冬）

もういっぴきのことりはインコ

ぞうきがけはあしあとがつく

べんきょうはとちゅうでねむくなる

とうきょうからおともだちがやってくる

春はいっぱいちようがとぶ（春）

花がさいたら水をやろうか（花）

木がぐんぐんのびてつばみもひらく

あとがき

予定どおりにはいきませんでした。座の中で、創作の思考を共有する連句の楽しみに触れさせることができなかったのはざんねんでしたが、この体験は、どこかで創作の芽吹きをうながすきっかけとなることでしょう。

なお、子どもたちの句を断片的なままにしておくのは、もったいないので、それらを書き並べることで半歌仙に仕立ててみました。発想を大切にしながら、全体の調子を整え、少しながら式目にも配慮し、作り上げたのが、次の半歌仙「さんしんはくやしい」の巻です。

半歌仙 『さんしんはくやしい』

さんしんはくやしい からだはあせだらけ

津嘉山正 泰(夏)

トマトやきゅうり どれもおいしい

長 あや乃(夏)

パンダさん タイヤのおもちやで遊んでる

井上愛 梨(雑)

かくどうほいくで 本をよんだよ

安村碧 唯(雑)

ちゅう車場 見上げてみれば月中天

吉村彩 良(月)

草むら深く こおろぎの声

秋の山 葉っぱをふんで音を聞く

津嘉山照

パリッとわれて ハートの形に

代(秋)

川のなかぎん色のはこ 何だろう

井上航 太(雑)

取ろうとしても 夢は取れない

々(雑)

あつあつのからあげ たくさんたべたいな

あや乃(雑)

冬になったらアイススケート

正 泰(冬)

寒い月 光のリズムおどるかげ

照代(冬月)

ソナチネ五番 四分の三

吉村京 桃(雑)

進級だ もらう教科書あたらしい

々(春)

ブランコ乗って あの空高く

愛 梨(春)

花ざかり 家族みんなでお弁当

京 桃(花)

友達顔 みんなのどらか

彩 良(春)

もちろん、この作品は後から編集された作品であって、子ども自身の作品ではない。しかも、もう一日、全員の子どもたちが集まれるチャンスがあったならば、このような作品が、子どもたちの座で創り出せたであろうと確信をする。

なお、二〇一一年(第七回)～二〇一三年(第九回)の受講生であった樋口磨汰くんが立派に成人され、今度は指導者の一員として参加くださったことは、実に嬉しいことであった。

(東條士郎)

《小・中・高校生》国民文化祭おきなわ2022
ジュニアの部 応募作品より

表合せ六句 『花びらは』

宮川尚子捌

岩原凜 弥

鈴木琥 珀

凜 弥

丸山花 純

琥 珀

花 純

三つ物 『かぜのしっぽ』

鈴木千恵子捌

植田泰 就

植田結 衣

々 衣

はるのかぜかぜのしっぽはどこにある
にげられちゃったおたまじやくしに
赤ちゃんの目がひかつてるときかわい

令和四年三月二十九日首尾

(於・Zoom 東京都・石川県)

令和四年三月二十六日首尾 (於・愛知県

BST学院)

表合せ六句 『はるのにじ』

鈴木千恵子捌

植田結 衣

山内咲 良

結 衣

咲 良

結 衣

咲 良

はるのにじずっとみてたらきえてった
カメラでパチリうぐいすの声
イースターエッグレースをおとうとと
ぐらぐらゆれる高い吊り橋
手どりがわおくせんまんの花火さく
こおりいちごをもっとたべたい

令和四年四月五日首尾

(於・Zoom 東京都・石川県・鹿児島県)

表合せ六句 『合図なく』

宮川尚子捌

岩原凜 弥

丸山花 純

鈴木琥 珀

凜 弥

花 純

琥 珀

始まりは合図なく来る受験生
春の夢へともぐりこみたい
パンジーにさんにいちとトライして
僕の顔見て笑いころげる
恋バナの続き聞きたい月の下
いっしょに眠る猫とこおろぎ

令和四年三月二十六日首尾 (於・愛知県

BST学院)

表合せ六句 『ひいばあ』

神奈川県 関口 遥 (渡辺柚 捌)

さくらがねひらひらまうようちようみたい
 ひいばあ好きな春のお散歩
 池の中お玉じゃくしが顔出して
 少し大きめ兄の制服
 ヘディングは月に向ってまっすぐに
 どんぐり落ちたポケットの中
 関口 遥
 関口 圭
 高原大 和
 高原陸 斗
 遥 圭

令和四年五月四日首尾 (於・札幌グランドホテル)

三つ物 『かたつむり』

かたつむり大きなカラをせおってる
 バーベルあげて金メダリスト
 名月にウインドチャイム鳴らしたい
 山内裕子 捌
 山内颯 真
 植田結 衣
 山内咲 良

令和四年四月十六日首尾
 (於・Zoom 石川県・鹿兒島県)

表合せ六句 『弟は一年生』

石川こはる 捌

弟は一年生になったとよ
 きょうのきゅうしよくまめごはんやん
 キラキラの羽見せつけるアゲハチョウ
 月まで飛んで地球ながめた
 かみさはぜんぶがぜんぶきめられる
 花よめさんはトルコそんぐで
 石川こはる
 石川こはる
 こはる
 こはる
 こうたろう
 こはる

令和四年五月 九日首
 令和四年五月十二日尾 (於・福岡県自宅)

表合せ六句 『日焼けかまわず』

体育祭梅雨で延びたよ頑張ろう
 高校最後日焼けかまわず
 リポーター震災の地を訪れて
 幼き頃の恐さ身にしむ
 織月に孤独な虎は吠えるのみ
 山彦 響く朝の茸狩
 鈴木善春 捌
 団長 恭 吾
 仁 菜
 直 樹
 千 聖
 瑠 那
 麟

令和四年六月 一日首
 令和四年六月二十日尾
 (於・神奈川県立深沢高校三年四組教室)

三つ物 『にゆうがくしき』

鈴木千恵子捌

もんしろちようにゆうがくしきにとんできた

植田結衣

ピカチュウたちと花をまつてる

山内咲良

フエルトのブローチだれにあげようか

山内咲良

令和四年三月二十九日首尾

(於・Zoom 東京都・石川県・鹿児島県)

三つ物 『校庭に』

先崎紀子捌

校庭にひっそり咲いた花石榴

先崎陽汰

下から見れば夏空に映え

先崎あかり

先人の知識集めし本読みて

ク

令和四年六月二十三日首
令和四年六月二十八日尾

(於・宮城県)

三つ物 『うちのねこ』

鈴木千恵子捌

うちのねこねこのこいとかするのかな

植田結衣

ばあばのおにわレンギョウウひらら

山内咲良

よもぎもちコネコネこねた白のなか

山内咲良

令和四年三月 二日首

令和四年三月二十九日尾

(於・Zoom 東京都・石川県・鹿児島県)

表合せ六句 『鳥になる』

平林香織捌

ぶらんこにのるとわたしは鳥になる

村上咲耶

初花笑う校庭の隅

村上麟太郎

休日父は猫の子捕獲して

村上鉄太郎

乗ってみたいな夢の白バイ

麟

たくさん庭のトマトがすぐに消え

鉄

いちにのさんで跳んだ大縄

咲

令和四年三月十二日首尾

(於・リモート 東京都・長野県)

表合せ六句 『体育祭練習』

体育祭梅雨で延びたよ頑張ろう
涼しい顔で放課後練習
瞬く間夢のひとつき過ぎゆきて
雁が音に問う恋の行末
漱石は月を愛でつつ告白す
互いの癖に気づく朝寒

鈴木善春捌
團長 恭 吾
夏 稀
優 咲
千 斗
実 聖
夢

令和四年六月 一日首
令和四年六月二十日尾

(於・神奈川県立深沢高校三年四組教室)

表合せ六句 『シーサーの口』

おきなわの海は青くてきれいだよ
シーサーの口はとても大きい
焼き肉店食べ放題は九十分
ホテルの朝のバイキングだね
目覚ましがいくら鳴つても起きられない
夢なら会えるあこがれの人

山本美咲捌
前島 夏
前島 環
山本美 咲
夏 環
美

令和四年六月 五日首
令和四年六月二十八日尾

(いとこ同士LINEで北海道・埼玉県)

三つ物 『シャベット』

シャベットあたまキンキンはがとける
吹上浜でパパと飛び込み
銀色のかみひこうきをのせる風

植田陽子捌
植田結 衣
山内咲 良
結 衣

令和四年四月十六日首尾
(於・Zoom 石川県・鹿兒島県)

二〇二二年度 創価大学総合演習
十二律 (オンライン)

*ルーム2
『秋
初
月』

山夕一好如山偏好山如好偏
桜季弘波来桜人波桜来波人

秋初月色なき風に我一人
十日の菊に煽る盃
薄紅葉あなたと巡るいろは坂
互いの頬も赤く染まつて
寒参ライカで写す君の顔
心躍らせコーヒーを挽く
帰り道敷き詰められた落椿
卒業生たち先生に会う
春の暮橋から望む花菖蒲
季節を渡る醍醐寺の鐘
夏祭母を探して泣く子ども
手と手を握り笑う向日葵

優飛丸伸飛優伸丸優伸丸飛
葉洲太幸州葉幸太葉幸太洲

*
ル
ー
ム
3

『コスモスの』

コスモスの押し花落つる文庫本
つづく話は秋の果まで
職人の如くにさんまを七輪へ
焼酎片手に想い巡らせ
千鳥足米津玄師も呆れ顔
都会の光に負けぬオリオン
改札の遠く先まで絶えぬ道
子供の笑顔初春彩る
眩しいと視線の先の残る雪
君と消えゆく沈丁花の香
湖のほとりで記すラブレター
飛行機雲が空を切り裂く

南優千夏優南夏千南優千夏
月誠暇宵誠月宵暇月誠暇宵

*
ル
ー
ム
4

『火恋しと』

火恋しとこする両手に缶ココア
満天の星街照らす月
公園の紅葉かつ散る切なくて
走り抜けてくアムステルダム
一人暮らし高層ビルに囲まれて
豚かつ恋しと霜柱踏む
寒雀君と合わせて夜想曲
彼女と作った落味噌を食う
たんぽぽの綿毛をとばし新天地
期待表す鳥曇りかな
OCでアイスクリーム頂いた
サイダー飲んで帰る童心

一 大 大 憂 大 銀 憂 大 銀 大 大 憂
弘 庵 智 山 庵 三 山 智 三 庵 智 山

(注) OCIIオープンキャンパス

（高校生向けの大学開放日）

*
ル
ー
ム
5

思ひ出す今はいらぬ流れ星
 夜空に浮かぶ月の冷まじ
 校庭の焼き芋齧る小学生
 風に起こされ朝は寝坊し
 帯広のハチが群がる花畑
 卒業控え撫でる艶髪
 いっただけ君との出会い出す
 二人二色に幸せな日々
 同僚と久方ぶりの冷やつこ
 浅草祭担ぐお神輿
 不協和音イヤホンの中鳴り響く
 心のうちにいつもある夢

執宰彦悠宰隆悠彦宰彦悠隆
筆範鳥雨範風雨鳥範鳥雨風

*
ル
ー
ム
6

バレリーナ君は滴る露時雨
 涙溢れて秋惜しむ様
 橋の上ネオンと月が重なって
 あなたを思ひ夜空見つめる
 冬の日の駅の約束初デート
 白く染まつた窓に落書き
 空を飛ぶ鳥がゆくたび影がさす
 コンクリートに一つたんぽぽ
 タリーズで苺ミルクのおかわりを
 春の窓辺に座るあの人
 遠い空君に届くか僕の歌
 並ぶ足音風わたる街

執大紅萌朱大朱萌紅大朱萌
筆雨葉月雨雨雨月葉雨雨月

*ルーム7

『秋惜しむ』

秋惜しむ暑さ寒さの真ん中で
独り悲しくキリギリス鳴く
電話越し月明かりの下彼の声
勇気百倍恋の決戦
試験前涙と共に飲むココア
内はぽかぽか外は大雪
ビッグベンチャイムを聞きに街に出る
黄色い帽子並ぶ麗らか
親燕子ども気にするママ友ら
富士を眺めてツツジ道征く
縁側で汗をかいてるアイスティー
ケーキに灯る数字の花火

星乃 藤天 緑香 藤天 緑香 藤天 森餅 緑香 藤天 森餅 藤天 森餅 藤天 緑香

*ルーム8

『月光の』

月光のピアノの調べ空に舞う
音含む風新酒ひとくち
柿の木を見つけ教える白い犬
朝陽を写す海辺オレンジ
足跡を君と見つめる冬の浜
聖夜に贈るおそろいの靴
二時限目終了のベル待ち望む
忘れられない母のお雑煮
本棚にずらり並んだぐりとぐら
河川敷公園たんぽぽを摘む
陸上部風光る街駆け抜けて
京王線の走る晩春

佳月 結菜 麗華 雨零 佳月 結菜 雅治 雨零 佳月 結菜 麗華 雅治

令和四年 十月十五日首
令和四年十一月十五日尾

《大学生・富山》富山大学
共通教育科目「日本文学」

表合せ六句 『冬 銀 河』

衆議判

冬銀河燃え尽き来たる夜明けかな
氷割りつつ行く通学路
一瞬の横顔愛しき廊下にて
文房具屋で君の声聞く
赤ちゃんが黄色い服で初花見
風やわらかに背伸びするねこ

宇津木奏 那
浅利朱 音
ペドロマルタ 那
執 筆

表合せ六句 『雪 月 夜』

衆議判

鍵かたし灯台守の雪月夜
赤い指先つける熱爛
音楽を聴いては想う窓辺にて
疑似体験で行き止まる恋
胸おどる革のローファー花吹雪
力いっぱいぶらんこを漕ぐ

前野早智子
小林唯 衣
赤木友 紀
紀 衣 早

令和五年一月三十一日首
令和五年二月 七日尾

(於・富山大学五福キャンパス)

令和五年一月三十一日首
令和五年二月 七日尾

(於・富山大学五福キャンパス)

《大学生・東京》日大藝術学部・文芸学科ゼミⅣ

脇起オン座六句 『言葉も響き』

浅沼 璞捌

立冬と言葉も響き明けゆく空
山川蟬 夫

まなこ荒れにし果の霜月
曳尾庵 璞

十本もミネラルウォーター買ってきて
日比谷 虚 俊

エレベーターはやゝ混んでゐる
金井 百 香

外に出し背広照らせるこの良夜
濱田 智 華

手紙もなしに届く新米
今野 日菜美

1Kに「少年ジャンプ」うづたかく
虚 俊

全ゲーセンに参拝をする
百 香

隣町から常連のお坊さん
智 華

座布団横に置かき氷
日菜美

カミキリのきりく〜とたゞきりく〜と
虚 璞

マスクをかぶるヒールレスラー
虚 俊

グランド・オダリスクのやうに寝転がり
百 香

天 蓋 背 に 候 爵 を
智 華

呼び捨てにされたくて急にあなたと呼んでみた
日菜美

ふるーい人工知能
璞

桑原武夫くんが京大でZoom授業
ジョーズに乗りながら

虚 俊
百 香

宝船にも税法はふりかゝる

日菜美
璞

屠蘇は屠蘇とてかぶる円安

虚 俊

青鬼が駄々をこねても内は内

百 香

椅子に姿を変へられたいか

日菜美
璞

泥を被せて静かな零余子

智 華

石の上三年居れば近江牛

虚 俊

反芻したる飼葉から駒

百 香

孫たちをかの山中に連れていき

日菜美

圏外表示たしかに消した

虚 俊

写真といふ写真に写る花吹雪

執 筆

ギターのダイレイさげる麗か

日菜美

令和四年十一月 七日首
令和四年十二月十九日尾 (Zoom音)

奈良県連句協会

会長 生駒さとし(聰)
副会長 もりともこ(森 智子)
事務局 谷澤 節
〒520-0042 大津市島の関1-44
(tel&fax 077-522-8379)

宮崎県連句協会

会長 黒岩昭彦
副会長 近藤蕉肝
事務局 七島純子
〒887-0021 宮崎県日南市中央通1-7-1
日南市文化センター内
宮崎県連句協会事務局
携帯1：080-6425-8885(七島純子)
携帯2：090-4625-7577(近藤蕉肝)
日南市役所：0987-31-1145
(生涯学習課 佐分 剛)

新潟県の連句を育てる会

会長 牛木辰男
事務局 小久保美子
〒950-2181 新潟市西区五十嵐
二の町8050
新潟大学・院・教育学研究科
(fax025-262-7117)

連句協会群馬県支部

会長 伊藤稜志
事務局 伊藤稜志
〒371-0811 前橋市朝倉町3-5-37
(0272-61-2297)

宮城県連句協会

会長 狩野康子
副会長 中村孝史・永渕 丹
事務局 狩野康子
〒981-0924 仙台市青葉区双葉ヶ丘
2-5-12
(022-271-0005)

静岡県連句協会

会長 宮澤次男
事務局 宮澤次男
〒414-0051 伊東市吉田保代782-4
(0557-45-2244)

徳島県連句協会

会長 梅村光明
副会長 喜島政行
事務局 喜島政行
〒776-0005 吉野川市鴨島町喜来93-3
(0883-24-6900)

京都府連句協会

会長 筒井紘一
幹事長 河合臥雲
〒606-8225 京都市左京区田中門前町
103-21瑞林院
(090-3723-3882)

鹿児島県連句協会

会長 前田 豊
副会長 松下みゆき・日高うんま
顧問 梅村光明
事務局 大西朝子
〒890-0046 鹿児島市西田1丁目15-5
(080-3183-5077)

茨城県連句協会

会長 堀江信男
副会長 大山とし・城 依子
事務局 根本美茄子
〒319-1225 日立市石名坂町1-31-9
(0294-53-6635)

やまぐち連句会

会長 諏訪欣二
事務局 中本蒼水
〒746-0025 周南市古市2-3-43
(0834-62-1400)

岡山県連句協会

会長 大倉青帆(祥男)
事務局 今村華紅(節子)
〒710-0031 倉敷市有城193
(086-429-1550)

山梨県連句協会

会長 後藤臣彦
副会長 後藤はるよ
事務局 後藤臣彦
〒400-0814 甲府市上阿原町1258
(055-235-1653)

秋田県連句協会

事務局 佐藤康子
〒010-0826 秋田市新藤田中山台54-11
(018-832-5722)

愛知県連句協会

会長 出原樹音
事務局 宮川尚子
〒450-0024 名古屋市中区尾崎山
2-108-2
(052-662-3280)
(fax052-622-3284)

地 方 連 句 組 織

愛媛県連句連盟

会長 大西素之
副会長 名本敦子・平井繁樹
事務局 岡田伊勢子
〒791-0113 松山市白水台
2-7-13
(089-923-9663)

連句協会石川県支部

支部長 藤江紫虹
事務局 宮島 茂
〒929-0327 石川県河北郡津幡町字庄
チ65
(076-289-4214)

埼玉県連句協会

会長 磯 直道
副会長 白根順子
事務局 石川光男
〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町
寄居535
(048-581-5943)

岐阜県連句協会

会長 大野鶴士
副会長 瀬尾千草
理事長 古田 了
顧問 岡本満智子
事務局 松尾一步
〒500-8415 岐阜市加納中広江町68
(090-3389-3067)

大分県連句協会

会長 南雲玉江
事務局 南雲玉江
〒874-0902 別府市青山町8-72
(0977-24-9407)

連句協会千葉県支部

支部長 松澤龍一
副支部長 鈴木すず
事務局 松澤龍一
〒278-0037 野田市野田665
(080-9532-3729)

連句協会三重県支部

支部長 西田青沙
事務局 西田青沙
〒512-0921 四日市市尾平町3768-188
(0593-32-8931)

富山県連句協会

会長 大西紀夫
副会長 藤縄慶昭
事務局 森川敬三
〒939-8241 富山市惣在寺1306
(090-1637-0518)

香川県連句協会

会長 沖津秀美
副会長 清水定代
事務局 沖津秀美
〒761-8084 高松市一宮町357-9
(087-889-3141)

福岡県連句協会

会長 守口 薫
副会長 佐藤えつ子
事務局 村上孝枝
〒804-0021 北九州市戸畑区一枝
1-2-12-703
(093-871-3779)

<p>(2) 貸借対照表</p> <p>(3) 損益計算書（正味財産増減計算書）</p> <p>2 前項により報告され、又は承認を受けた書類のほか、監査報告を主たる事務所に5年間備え置くとともに、定款及び会員名簿を主たる事務所に備え置くものとする。</p> <p>（剰余金の分配の禁止）</p> <p>第46条 当法人の剰余金は、これを一切分配してはならない。</p> <p>（残余財産の帰属）</p> <p>第47条 当法人が解散（合併又は破産による解散を除く）したときに残存する財産は、総会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。</p>	<p>第50条 当法人の設立時の役員は、次のとおりである。</p> <p>設立時理事 白杵悠治</p> <p>設立時理事 和田忠勝</p> <p>設立時理事 高尾秀四郎</p> <p>設立時代表理事 白杵悠治</p> <p>（設立時社員の氏名又は名称及び住所）</p> <p>第51条 設立時社員の氏名及び住所は、次のとおりである。</p> <p>設立時社員</p> <p>1 住所 神奈川県横浜市青葉区 みたけ台2番地22</p> <p>氏名 白杵悠治</p> <p>2 住所 神奈川県横浜市港北区 綱島東5丁目22番4号</p> <p>氏名 和田忠勝</p> <p>3 住所 東京都町田市図師町1333番地8</p> <p>氏名 高尾秀四郎</p> <p>（法令の準拠）</p> <p>第52条 本定款に定めのない事項は、すべて法人法その他の法令に従う。</p> <p>平成25年12月11日 制定</p> <p>平成28年3月28日 第7条の年会費額を5千円に改定。</p> <p>令和3年3月28日 第2条の主たる事務所を東京都狛江市に改定。</p>
<p style="text-align: center;">第8章 附 則</p> <p>（最初の事業年度）</p> <p>第48条 当法人の最初の事業年度は、当法人成立の日から平成26年12月末日までとする。</p> <p>（入会金）</p> <p>第49条 当法人の母体である任意団体、連句協会の当法人への権利義務承継の日の前日における会員には、第7条の入会金の支払を求めないものとする。</p> <p>（設立時の役員等）</p>	

<p style="text-align: center;">「日本連句協会」顧問・役員名簿</p>	
<p>（顧問）磯 直道・和田忠勝</p> <p>（役員）</p> <p>会 長 高尾秀四郎</p> <p>副 会 長 小川廣男・小池正博・林 転石</p> <p>理 事 長 林 転石</p>	<p>常任理事 大久保風子・岡本遊風・木之下みなみ・近藤蕉肝・高橋 賢・宮川尚子</p> <p>理 事 奥野美友紀・大山とし・勝又丘女・栗原和宏・五郎丸照子・鈴木千恵子・鈴木善春・鈴木了斎・高岡風蘭・高山達雄・南雲玉江・馬場由紀子・平井繁樹・平林香織・松尾一歩・村松定史・森川敬三・洛中落胡・渡辺 柚</p> <p>会 計 岡本遊風（兼務）</p> <p>監 事 静寿美子</p>

取引

- (3) 当法人がその理事の債務を保証することその他理事以外の者との間における当法人とその理事との利益が相反する取引(責任の一部免除)

第28条 当法人は、役員の法人法第111条第1項の賠償責任について、法令に定める要件に該当する場合には、理事会の決議によって、賠償責任額から法令に定める最低責任限度額を控除して得た額を限度として、免除することができる。

(顧問)

第29条 当法人に、顧問を置くことができる。

- 2 顧問は、会員の中から、理事会の決議を経て会長が委嘱する。

- 3 顧問は、無報酬とする。ただし、その職務を行うために要する費用の支払をすることができる。顧問は会費を納めることを要しない。

(顧問の職務)

第30条 顧問は、会長の諮問に応え、会長に対し、意見を述べることができる。

第5章 理事会

(構成)

第31条 当法人に理事会を置く。

- 2 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(権限)

第32条 理事会は、次の職務を行う。

- (1) 当法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 会長、副会長、理事長及び常任理事の選定及び解職

(招集)

第33条 理事会は、原則として年3回、会長が招集する。

- 2 会長が欠けたとき又は会長に事故があるときは、副会長が理事会を招集する。

(議長)

第34条 理事会の議長は、会長がこれに当たる。会長に事故があるときは、当該理事会において議長を選出する。

(決議)

第35条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

- 2 前項の規定にかかわらず、法人法第96条の要件を満たしたときは、理事会の決議があったものとみなす。

(議事録)

第36条 理事会の議事については、法令で定めるところにより議事録を作成する。

- 2 出席した会長及び監事は、前項の議事録に署名又は記名押印する。

(理事会規則)

第37条 理事会に関する事項は、法令又はこの定款に定めるもののほか、理事会において定める理事会規則による。

(常任理事会)

第38条 常任理事会は、原則として隔月に会長が招集する。常任理事会に関する事項は、理事会において定める常任理事会規則による。

第6章 基金

(基金の拠出)

第39条 当法人は、会員又は第三者に対し、基金の拠出を求めることができるものとする。

(基金の募集等)

第40条 基金の募集、割当て及び払込み等の手続については、理事会の決議を経て会長が別に定める基金取扱い規程によるものとする。

(基金の拠出者の権利)

第41条 基金の拠出者は、前条の基金取扱い規程に定める日までその返還を請求することができない。

(基金の返還の手続)

第42条 基金の返還は、定時総会の決議に基づき、法人法第141条第2項に定める範囲内で行うものとする。

第7章 計算

(事業年度)

第43条 当法人の事業年度は、毎年1月1日から12月31日までの年1期とする。

(事業計画及び収支予算)

第44条 当法人の事業計画書及び収支予算書については、毎事業年度開始日の前日までに会長が作成し、理事会の決議を経て総会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も同様とする。

- 2 前項の規定にかかわらず、やむを得ない理由により予算が成立しないときは、会長は、理事会の決議に基づき、予算成立の日まで前年度の予算に準じ収入又は支出することができる。

- 3 前項の収入支出は、新たに成立した予算の収入支出とみなす。

(事業報告及び決算)

第45条 当法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を経て、定時総会に提出し、第1号の書類についてはその内容を報告し、第2号及び第3号の書類については承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告

(議決権)

第17条 各会員は、各1個の議決権を有する。

(決議)

第18条 総会の決議は、法令に別段の定めがある場合を除き、総会員の議決権の過半数を有する会員が出席し、出席会員の議決権の過半数をもってこれを行う。

2 前項の規定にかかわらず、次の決議は、総会員の半数以上であって、総会員の議決権の3分の2以上に当たる多数をもって行う。

- (1) 監事の解任
- (2) 定款の変更
- (3) 会員の除名
- (4) 解散
- (5) その他法令で定められた事項

3 前2項の規定にかかわらず、法人法第58条の要件を満たしたときは、総会の決議があったものとみなす。

(議事録)

第19条 総会の議事については、法令の定めるところにより議事録を作成し、総会の日から10年間主たる事務所に備え置く。

第4章 役員等

(役員の設置等)

第20条 当法人に、次の役員を置く。

理事 3名以上35名以内

監事 2名以内

2 理事のうち、1名を会長とし、5名以内を副会長、1名を理事長、10名以内を常任理事とすることができる。

3 この法人の会長を法人法上の代表理事とする。

(選任等)

第21条 理事及び監事は、総会の決議によって選任する。

2 会長、副会長、理事長、及び常任理事は、理事会の決議によって理事の中から定める。

3 監事は、当法人又はその子法人の理事若しくは使用人を兼ねることができない。

4 理事のうち、理事のいずれかの1名とその配偶者又は3親等内の親族その他特別の関係にある者の合計数は、理事総数の3分の1を超えてはならない。監事についても、同様とする。

5 他の同一の団体（公益法人を除く。）の理事又は使用人である者その他これに準ずる相互に密接な関係にある者である理事の合計数は、理事の総数の3分の1を超えてはならない。監事についても、同様とする。

(理事の職務権限)

第22条 会長は、当法人を代表し、その業務を執行する。

2 副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序でその職務を代行する。

3 理事長は理事会及び常任理事会を運営する。

4 常任理事は、会長、副会長及び理事長を補佐し理事会の議決に基づき当法人の業務を執行する。

5 前各項に掲げられた理事は、毎事業年度毎に4か月を超える間隔で2回以上、自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務権限)

第23条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。

2 監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、当法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。

(任期)

第24条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時総会の終結の時までとし、再任を妨げない。

2 監事の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時総会の終結の時までとし、再任を妨げない。

3 補欠として選任された理事又は監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。

4 役員は、辞任又は任期の満了後において、定員を欠くに至った場合には、新たに選任された者が就任するまでは、その職務を行う権利義務を有する。

(解任)

第25条 役員は、総会の決議によって解任することができる。

(報酬等)

第26条 役員の報酬、賞与その他の職務執行の対価として当法人から受ける財産上の利益は、総会の決議をもって支給することができる。

(取引の制限)

第27条 理事が次に掲げる取引をしようとする場合は、理事会において、その取引について重要な事実を開示し、理事会の承認を得なければならない。

(1) 自己又は第三者のためにする当法人の事業の部類に属する取引

(2) 自己又は第三者のためにする当法人の

『日本連句協会』定 款

第1章 総 則

(名称)

第1条 当法人は、一般社団法人日本連句協会と称する。

(主たる事務所)

第2条 当法人は、主たる事務所を東京都狛江市に置く。

(従たる事務所)

第3条 当法人は、理事会の決議を経て、必要地に従たる事務所を置くことができる。

(目的)

第4条 当法人は、連句文芸の創造的発展とその普及ならびに連句実作者、連句愛好者の内外における交流を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目的とし、その目的に資するため、ユニバーサルデザインの精神に基づき次の事業を行う。

1. 全国大会および地方大会の開催、共催
2. 会報(隔月)の発行
3. 連句年鑑の発行
4. ホームページの運営
5. 国民文化祭への後援
6. 前各号に掲げる事業に附帯又は関連する一切の事業

(公告)

第5条 当法人の公告は、主たる事務所の公衆の見やすい場所に掲示する方法により行う。

第2章 社員及び会員

(入会)

第6条 当法人の目的に賛同し、入会した者を会員とする。

- 2 会員となるには、当法人所定の様式による申込みをし、会長の承認を得るものとする。

- 3 当法人の会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律(以下、「法人法」という。)上の社員とする。

(経費等の負担)

第7条 会員は、当法人の目的を達成するため、それに必要な経費を支払う。

- 2 会員は、入会金2千円及び1月から12月までの年会費として5千円を納入しなければならない。

(会員の資格喪失)

第8条 会員が次の各号の一に該当する場合には、その資格を喪失する。

- (1) 退会したとき。
- (2) 成年被後見人又は被保佐人になったとき。

- (3) 死亡し、若しくは失踪宣告を受け、又は解散したとき。

- (4) 2年以上会費を滞納したとき。

- (5) 除名されたとき。

(退会)

第9条 会員はいつでも退会することができる。ただし、1か月以上前に当法人に対して退会届を提出するものとする。

(除名)

第10条 当法人の会員が、当法人の名誉を毀損し、当法人の目的に反する行為をし、会員としての義務に違反するなど除名すべき正当な事由があるときは、法人法第49条第2項に定める社員総会の特別決議によりその会員を除名することができる。

(会員名簿)

第11条 当法人は、会員の氏名又は名称及び住所を記載した会員名簿を作成する。

第3章 社員総会

(構成)

第12条 総会は、すべての会員をもって構成する。

(権限)

第13条 総会は、次の事項について決議する。

- (1) 理事及び監事の選任又は解任
- (2) 理事及び監事の報酬等の額
- (3) 事業計画及び収支予算の承認
- (4) 事業報告及び収支決算の承認
- (5) 定款の変更
- (6) 解散
- (7) 会員の除名
- (8) その他総会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項

(開催)

第14条 当法人の総会は、定時総会及び臨時総会とし、定時総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時総会は、必要に応じで開催する。

- 2 前項の総会をもって法人法上の社員総会とする。

(招集)

第15条 総会の招集は、理事会がこれを決議し、会長が招集する。

- 2 総会の招集通知は、会日より1週間前までに各会員に対して発する。

(議長)

第16条 総会の議長は、会長がこれに当たる。会長に事故があるときは、当該総会において議長を選出する。

一般社団法人

日本連句協会定款

年鑑担当

○編集

〒330-0053 さいたま市浦和区前地二一九一二

大久保風子

(電話・FAX) 〇四八―八八一―二七五六

○購入申込・発送

○連句年鑑会計・送金先

〒278-0037 野田市野田六七七一―A二二五

木之下みなみ

(電話・FAX) 〇四一七―一二五―五三九七

郵便振替 〇〇二三〇―一―一〇七四二三

加入者名 木之下みなみ

○日本連句協会会員簿担当

宮川 尚子

〒458-0024 名古屋市緑区尾崎山二一〇八一

宮川 尚子

(電話) 〇五二―六二二―三三八〇

(FAX) 〇五二―六二二―三三八四

■編集後記■

★「連句年鑑令和五年版」をお届けします。

★文章頁には、協会から総会報告、国文祭おきなわ報告、昨年の連句界回顧があります。連句の普及と愛好者の交流のために組織が必要であることを再確認できる頁です。

★評論「フランス俳諧のはじまりと連句」の執筆者は蛙門会代表・草門会事務局・協会理事の村松定史氏です。もう一つの肩書はフランス文学者です。今から百年以上も前に、フランス人が「ハイカイ」を研究し、船旅で吟行・七十二句を記録していたという。仏語・日本語を併記・詳しい注釈が施されています。読み慣れないスタイルですが、ゆっくりと解きほぐしてください。

★エッセイ「言葉の園で出会ったもの」のほしおさなえ氏は文庫版の小説「言葉の園のお菓子番」（大和書房・三冊シリーズ）の作者です。連句との出会いを「歳時記を眺めて言葉と格闘する面白さ」と仰っています。どの行も協会会員自身を語ってくれているようなエッセイでした。

★協会会報「連句」で新三つ物の募吟を担当している鈴木千恵子氏に日頃、付け句に何を感じておられるのか執筆を依頼しました。「付け」「転じ」という連句の基本を改めて復習し、分析し、その構造を理解して尚且つ、詩にすることを再認識させられながら読みすすめるエッセイです。

★年鑑はその年の連句活動の記録という役目を負っています。作品を応募してくださったグループ数は七八、作品数は一〇二巻でした。ご連衆の高齢化に加えてコロナ禍が大きく影響し、座が縮小、休会、やむを得ず解散を余儀なされたところもあるようです。長年投稿してくださった会のお名前が見当たらないのはとても寂しい限りです。そうした中でも「岡山連句協会」「とよあけ連句会」「松山連句協会」「わかやま連句会」など新しいお名前を発見しますと、付け句を楽しむ連句の広がり嬉しくなります。一昨年はリモートの作品が目立ちましたが、昨年の作品はリアルに行き会って巻いた作品が増えてきました。顔を合わせる楽しさ面白さは、コロナ禍を経験したからこそ、と改めて噛み締めております。

（大久保風子・木之下みなみ）

令和五年六月二十五日 印刷
令和五年六月 三十日 発行

令和五年版 連句年鑑

定価 二、五〇〇円

編集人代表 大久保 風 子

発行所 〒241-0011 東京都狛江市西和泉二丁目45-06

林 転石方

一般社団法人 日本連句協会

電話 〇四二一四八九一〇七九〇

公式サイトアドレス

<https://renku-kyokai.net/>

印刷所 〒336-0021 さいたま市南区別所三丁目一〇

関東図書 株式会社

電話 〇四八八六二一二九〇一

FAX 〇四八八六二一二九〇八

